
プログラマーはハルケギニアで夢を見る

軍師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プログラマーはハルケギニアで夢を見る

【Nコード】

N42890

【作者名】

軍師

【あらすじ】

現代を生きるプログラマーが、チート能力を引っさげハルゲニアに転生しちゃった。

最初は冷めていたが、何やら駄神に巻き込まれたあたりから、吹っ切れたようだ。

能力？何それおいしいの？（いっちゃったw）
これからどうなるのやら

一応、いろんなところでツツコミが入れるようにしています（書

いとくの忘れてた)

プロローグ（前書き）

FF書いちゃった（テヘ
どうも、計画性のない男
軍師です。

ということでは

プログラマーはハルゲニアで夢を見る始まります

プロローグ

俺は何も変わらない日常を、送っていた。

念願のプログラマーになり子供が生まれそれなりに、平和な日常を歩んでいたはずだったのだ。

夜に仕事が突然入り、翌日の昼まで仕事をし帰る途中、走っている最中のトラックの先に子供がいたのが見えた。

よく見ると、トラックの運転手は寝ている。

俺は何も考えずにあわてて車道に飛び出し、子供を力いっぱい押し飛ばす。

多少の骨折ぐらいは、大目に見てくれよ……

そう思った瞬間、ぶつかったのだろう……。俺の視界がぶれ意識が飛んだ。

俺ははっとして、意識を取り戻す。

「やっと目覚めたのか……」

俺は顔を覗き込んでいる、男か女かわからないやつを凝視する。

「お前さんに起きたことを、話してやろうか？」

俺は首を横に振るう

「いや、いい……記憶ははっきりしている。」

「ほう……通常の間人なら、自分が死んだという認識をしたくないから記憶を飛ばすのにな。お前は死を覚悟していたということか」

普通、自分からトラックに飛び込んで、無事でいられるっていうきもちおきねーよ。

俺が死んだとするなら……

「ところで、あんた誰だ？」

起きた時に、そばにいたやつは少し咳払いをする。

「失礼、名乗るのが遅くなったな。俺は創造神……。主神と呼ばれている。」

現代風の碎けた喋り方だが、立ち振る舞いや動作はいちいちがき

れいだった。

「で？ただの死人の俺に、主神が何の用です？」

俺の言葉に、神は微妙な顔をする

「もっと驚いてくれても、いいんじゃないか？まあいい、お前の前に現れたのはお前が転生する気があるかどうかを聞きに来たただけだ。」

「どういう意味だ？」

「ああ・・・君の助けたのが、私の大切な友人の子孫だったんだ。」
なるほど、それで俺を転生させようと・・・

心を読んだことは驚かないことにしようか・・・

「転生で引き継げるものはあるか？」

「知識と記憶、それから、神によって与えられる力だね。さてと・・・

・・・君の転生先なんだけど、ハルケギニアの貴族になるよ」

やっぱり元の世界には戻れないのか・・・

魔法があつて、俺のよく知る世界というか小説か・・・

「なんか、妙に落ち着いてるね？まあいいけど、力は3つ選ばしてあげよう。何がいい？」

3つか、正直急に言われても思いつかないな

「とりあえず、虚無と魔眼がいいな」

神はにやりとする

「魔眼は複写眼と殲滅眼でいいかな？」

伝勇伝か、魔法主流の世界にこんな化け物生まれたら悪夢だろうな

「魔眼に虚無、それからプログラムを授けよう」

俺は眼を見開く

「プログラム？」

「すべてを、プログラミング言語に置き換える魔法だ。プログラムを組めばその通りのことが実際に実行される。たとえば物質生成から始まり、世界の改変まで。世界の改編は君でもいきなりは無理だろうね？」

確かに能力だが

「魔眼二つは、能力に入らないのか？」

「細かいことはいいんだよ。後、魔眼なんだけど空白容量あるから、一つ自分で考えてね」

なんかもう適当だなこの神

「ところで、少しお願いがあるんだけどいいかな？」

「何だい？」

神はすべてをわかっている風な口調で、俺に問いかける

「まず一つ、俺の助けた子供は無傷だった？」

「ちよっとねんざしたかな？って程度だったよ」

そうか・・・よかった。

「俺の家族は幸せに暮らせるか？」

神は少し短く考え。

「一般的には、幸せに暮らせるよ？君の遺していった家族には、俺の加護があるからね？でも君を亡くした不幸は、ぬぐいきれない。すまないね」

「いや、いいんだ」

俺はそれだけ聞けただけで安心だ。

「じゃあ・・・多分次は、君が本当に死んだときね」

そうして、俺はアレオス・ラ・ラインバースとして、ゼロの使い魔の世界に生を受けたのだった・・・

その時は、神の多分の意味がわかっていなかったが・・・

プロローグ（後書き）

とくに・・・

そうだ、ノリと勢いで書いているので、更新が不安定になります
ご了承ください

0. 5話：隠れた記憶（前書き）

第一話作るはずが後付け設定的な話数稼ぎに・・・

0. 5話：隠れた記憶

僕は六歳の誕生日の日に、枕元に置かれた一冊の古びた本と透明な石がはめられた指輪を見つける。

それらはまるで、僕を呼んでいるかのような光を放ち始めた。

僕は何も考えずに、その本と指輪を手取る。

その瞬間、頭が割れるように痛み始めて僕はうずくまる。

数時間たっても収まらない痛みの中に、ちらちらと見たことのない風景がフラッシュバックされているのに気づく。

その瞬間に、痛みのすべてを理解し僕は・・・俺になった。

俺は体の調子確かめるように、体を動かす。

そして記憶の整理をし始めた。

「どうやら、この体が生きてきた六年間の記憶はあるみたいだな」

親は二人ともいて、姉と妹がいるのか・・・

杖との契約はまだ・・・どうせ使えないか

「さてと・・・本だ」

原作を読んだ時から気になっていた物を思い出す。

製紙技術のことだ。

俺が前世いた世界であったような本があれば、未知の物質に書かれた本ということでかなり高額なものになるはずだ。

どこまで技術面が進んでいるのがわからなかったからなあ

俺はそう思い、先ほどの本を手にとってみる。

「材質は、紙に近い動物の皮か？」

ぺたぺた触っていると、一枚の何かが書かれた紙が落ちてきたので、読んでみることにする。

『まずは、六歳になるまで前世の記憶が戻らなかったことからの説明をしよう』

いきなりだな、多分、神様だと思うけど

『幼子の頭には、君の持つ知識はあまりにも多すぎた。それでもギ

リギリなんだ。それ以上は勘弁してくれ。能力なんだが、プログラムはキーボードをイメージするだけで使える。虚無に関してはこれが挟まっていた、始祖の祈祷書というより、神の祈祷書と透明のルビーを持っていないと使えない。ちなみに、始祖が遺した祈祷書でも使えるぞ。そうだな、サービスとしてこっちの言語を扱えるようにしておいた。（以下自分がどれだけ偉大なのか書かれているため省略）』

使用人がはいってきたので、あわてて本を隠し軽く笑う。

午後になり、俺の魔法適正・・・つまりは杖との契約と時が来た。まあ魔法は使えないけど・・・

結果としては、水で水蒸気爆発、火で普通の爆発、土でも人は違う感じの爆発、風では火の時十すごい突風をとまった爆発が起きた。

うん・・・ルイズさんとちょっと違うね。理由は文字通り神のみぞ知るってね？

落ちはないんだ、すまない

0. 5話：隠れた記憶（後書き）

説明回追加

文字数足りないのは許してくれると嬉しいです

本職の方が忙しい・・・

C++でゲーム作ってるので

APIに手を出したら死ねたわけだけど

第一話：六歳児の場合（前書き）

二、三回はこんな感じのタイトルが続きます

第一話：六歳児の場合

俺がアレオス・ラ・ラインバースとして、この世界に生を受け6年がたった。

幸いにも、髪は銀色で、眼は赤色の美系？（子供なのでわからないが）に生まれた。

文字を読み書きする能力は、デフォルトで付けてくれたみたいだし、本を読むことに關してはなにも差し支えがないと言える。

ただ、本を読み過ぎてか親からも本当に六歳児か？と疑われてしまふ始末。

六歳児ですよ？精神年齢は35ですが・・・・・・・・

「グラモン元帥のところへ行くぞ」

あれ？うちの家ってペーペーの貴族だった気が・・・・・・・・なのに、なんで原作に出てくるくらいの高い貴族さんの家に？

「興味があるので、おとします」

兎にも角にも、原作キャラとの接触ははやい方がいい。遅いとその分だけ、原作に近づきすぎるからだ。

ということとで、一日ぐらい馬車でゆられたきがして、グラモン邸に到着する。

来るまでに、ゴブリンの襲撃やオークの大群と出会ったが何故か生き残れた・・・・・・・・

「ようやく来たか。ラインバース」

屋敷の奥から、すげー威圧感のある人が出てくる。

この人が元帥か・・・・・・・・

少し納得できるような気がするが、なぜ？息子があそこまで歪んだのかわからない

「そっちは君の？」

「初めまして、アレオス・ラ・ラインバースです。」

俺は猫を被りつつ、あたりを軽く見る。

ギーシュらしき姿はいないか……

「あの、失礼ですけど父とは？」

「ん？酒飲み友達だよ」

聞くと、戦争時に親父は元帥を補佐する役割をしていたらしい。前大戦の終結時に、共に飲み始めてからの付き合いだそうだ。

この、アル中どもめ。

「そうだ……ギーシュを紹介しよう」

俺はすっと目を細める

きたか、今回の俺の目的が。

「ギーシュきなさい」

まだ小さくとも、原作のような金髪の優男って感じた。

若干……違和感があるけど

「ぎ……ギーシュ・ド・グラモンです。」

オーケー把握した。

違和感の原因は、ギーシュ自体がおどおどしているところだ……

なるほど、原作みたいな見栄を張ってない分可愛いいう。

やべ、新しい性癖シヨタ属性が芽生えそうな気がする。

「よろしく、ミスター・ギーシュ」

「ぎ……ギーシュでいい」

うわあ、やめてくれ！可愛すぎると変態なことを考えていたり

「じゃあギーシュ、一緒にどこかいこうか」

俺達は親から逃げるように、立ち去った

その後の親たち

「アレオス君は、いつもあんな感じなのかい？」

「多分、ギーシュ君みたいな同年代の友達がいらないから、張り切っているだけだと思う」

「ほう、なんでだろうね？」

side ギーシュ

僕はおろおろしながら、アレオスについて行く

彼は何故か、終始にやにやしっぱなしだ。

「なあ、ギーシュ。」

何故か、彼は先ほどまでのふいんき（何故か変換できない）違う

「魔法ってどんなのだ？」

「はい？」

魔法が使えない？そんなことが本当にあるのか？

「君はまだ使えないの？」

「んゝ頑張っては見てるんだけどね？」

そういうと、彼は少し詠唱を始める。

途中で爆発音がし、地面がえぐれていた。

「今のが錬金で次は」

次の爆発は、風をはらんで何かをなぎ飛ばさんという勢いだ

「属性魔法詠唱中に、爆発を起こすんだ何故か。んで、その爆発に属性付与が施されている」

彼は苦笑いをしながら、こちらを向いた。

「ギーシュは土系統のドットなんだろう？少し見せてくれないかな？」

side アレオス

簡単な錬金……

俺の魔力と比べてどう違うかを、複写眼で解析する。

なるほど……

この世界の魔法は、分子に魔力が干渉して自然現象を捻じ曲げる

法、虚無は原子に干渉して自然現象を捻じ曲げているわけか……

原子を動かす方が、分子を動かすより魔力がいる。

分子を動かす魔法に、原子を動かす魔力を注ぎこんだら爆発ぐらい起きるわなあ。

つつことはだ。

ある程度、殲滅眼を使って魔力を封殺してやればいいのか・・・

「アレオス？」

「ごめん、ごめん。考え事をしてた。」

大体、コツがつかめたかな？

「んゝ魔法を見せてくれたお礼に、いいものを見せてあげよう」
俺は少しにやりとする

「世界は0と1で構成されている。」

ギーシュはこの世界が見えないはず・・・

俺はふと気づいて、ギーシュを見るとギーシュも0と1に変換されていた。

そこで、俺はティンと来たがまあそれは後日にでも・・・

「ハルバート」

0と1の世界が終わり、俺の手にはハルバートが握られている

「それは錬金かい？でも、魔法は使えないはずじゃ・・・え？」

ギーシュも気づいたのだろう

俺はさっき杖も、媒介となる物体も持ってなかった。

「魔法じゃないよ。創造さ、これは他の人に内緒にしておいてね？」
ばれたところで、なんのがいもないけどな。

それより、魔眼の方がやばめなんだが・・・

「わかった。」

ギーシュともあったし・・・

今日はこれで終わりかな？

第一話：六歳児の場合（後書き）

ノリと勢いでぶった切ってみた
このぶった切り需要がないと信じて

第二話：七歳児の場合（はじめてのおつかい依頼編）（前書き）

作者「七歳児にはじめてのおつかい」

アレ「あの曲が聞こえてきそうだな」

作者「流す？世界観の崩壊が起きるけど」

アレ「大丈夫じゃないか？場違いな工芸品の件もあるし」

作者「（ニヤリ）」

アレ「余計なこと言っちゃったか？」

第二話：七歳児の場合（はじめてのおつかい依頼編）

俺は眼を覚ますと、ベットの横に何かがいた。

「誰だ」

何かはパチンという音を鳴らせる。

「話をしよう。」

俺は神を睨む。

「何か用か？」

「おいおい、おとなしいお坊ちゃまがいきなりそれか？」

わざとらしく頭に手を当てている

「で？話って？」

「君が来てしまったことにより、ルイズの覚醒日がずれたんだ」

な　ん　だ　と　？

「それに伴い覚醒を、阻止してもらいたい。この世界で、理に干渉することが出来るのは君だけだからね？」

イレギュラーにイレギュラーをなおさせるわけか。

「別にかまわないが、俺がいなくなったらいろいろとまずいし、止めるとなると城に侵入するんだろ？」

「魔法でどうにかならないか？」

神はいつてから気づいたのだろう

「虚無か・・・」

「ああ・・・才能封印ってできるのか？」

俺は思いつく限りの方法を言う

「できるが・・・俺がやっちゃまうと、解放が先延ばしになる可能性が・・・」

「なんで？」

「部下に仕事押し付けてきたから、こってり絞られる」

こいつ・・・絞られるの前提ってことは、前にも何回かやってるな？

「人間の生体情報はまだ解読できてないしな」

「プログラムで、自分の体を解読してるのか？」

「ああ人間としての俺の部分は解読できたんだが、流石に魔法使いとしての俺は解読できないよ。」

ちなみにあれ、0と1と言ってはいるがすべてを言語に置き換えることも可能だったりする。

「そうか・・・世界は言語でできている」

慣れ親しんだD言語で書かれた世界が出てくる。

そこに、俺の個体値を入力しコンパイルする。

すると、俺の隣にもう一人俺が出てきた

「やあ俺、しばらく戻らないだろうから、家でのことを頼むよ」

「了解した。マスター」

俺はにやりとする

「こいつは？」

「能力共有はできなかったが、人間として形を持った情報生物だよ」
詳しく言えば、プログラムによる物体創造の延長線上で、俺自身を作ったというわけだ。

ちなみに、こいつは結構優秀で俺に見たこと聞いたことをリアルタイムで送信する。

「さてと、後は俺の体なわけだが・・・創造神レベルなら、人の認識を完全にごまかせる道具とか持ってない？」

神は何かに気付いたようで、ごそごそとポケットをあさる

「変幻自在に姿を変えることのできる指輪」

神が取り出したのは一つの指輪だった

「それは？」

「ああ、読んで字のごとくだね。それにこいつで姿を変えた場合、絶対にばれないと言った保障つき」

素晴らしいねジョニー

「それにおまけとして、これも付けちゃう」

神はネックレスも用意してくれた

「これは？」

「一度だけ世界をほろぼ「マテヤ、コラ」」

「なんちゅう物騒なもん」

「というのは冗談で」

この世界で、主神倒す仲間でも集めようかな……

「止めて、そんなことし出したら喜んでついて行くやつ知ってるから」

ほう、こいつに恨みを持つ者がいるわけか……

『おら、糞主神さっさと戻ってきやがれ。』

神が震えだす

神は別のネックレスをだし、俺に渡す

「透明になれる魔法のネックレス（仮）だ。有用に使えよ？」

これで、潜入道具は揃った

「じゃあ……これから起こることを簡単に……」

俺はすべての内容を聞き、ため息をつく。

しかたない……やるか

第二話：七歳児の場合（はじめてのおつかい依頼編）（後書き）

さてと一年飛ばしました・・・

なんかだらだらするのも、性に合わないの

一気に原作時世まで飛ばして行こうかなと

このままいけば原作ブレイクもあるかもねw

第三話：はじめてのおつかい（出会い）（前書き）

作者「これになって〜」

アレ「なんだ？この写真」

作者「いいからさ〜」

アレ「・・・」

作者「それにこの木箱もプレゼントb」

アレ「ここって時世関係ない空間なのに・・・」

第三話：はじめてのおつかい（出会い）

どうも、王都に來ています。

何やら、すごい嚴重な警備だなあ。

まあ先の誘拐未遂事件があった後では、仕方ないんだけどそれにしても監視がおおい。

王都に近づくのも、サーチの魔法が使われていたから、素性とかもばれるところだった。

殲滅眼で自身の魔力を全部抜いておいて正解だったな。

潜入し難いところに潜入とか……

「いっちょやりますか」

透明ネックスは使えない……

複写眼で解析したところ、こいつは魔力をあたりにまきちらし見えなかったことにする魔法を常時展開する。

つまりは、魔力がサーチに引っかかってしまう

神でもそこまでは考えてなかったのか？

『神様はすべてをしり、すべてのことを見ているのです』

……心を読んだ上に、くだらんことをぬかすなあ創造神

『ひどいねえ。大聖堂のブリミエルだっけ？あれ』

あゝこの世界の神様の存在か……ブリミルね

『あれの像の裏に、王城の地下につながる隠し通路があるから』

そーなのかー

『……怒ってる？』

とりあえず。今魔力を解放するのはやばいから、後にしよう

『何？死神。俺は今、転生者を弄ってあそぼ……』

いきなりプツンという音がし、再び声が聞こえ始めた

『あゝなんと言うか、すまないな。こっちの監督ミスだ。』

先の依頼の時に聞こえた声

「貴方は？」

『死神だ。創造神は私が責任を持って、しば．．．．教育しておく』

「頼みます」

さてと．．．．うるさいのがいなくなったところで、行きますか俺は神からの『有難いお』言葉．．．．．

死神様．．．．あの駄神を沈めという

大聖堂まで来た俺は、像をよく観察する

像の下にあるね。

でもね？駄神。これどう考えても、子供の力でどうこうできるレベルじゃねーだろ。

結局、指輪を使い鷹となって城の頂上から入りこむ

「できるのでは？って考えたけど、本当にできちゃったテへとか．．．」

うわあ、自分で言ってる気持ち悪

城を巡回する兵士に見つからないように、地下の宝物庫まで行くとか何考えてんだろ

とりあえず、何かわからない写真の男になる。

バンダナを巻き、渋い顔をしてタバコが好きそうなダンディなおじさまに変わる

すると、おかしいことに木箱がおかれていた．．．．．
なんだこれ？

それを被って、城の廊下を歩く。

何故だかわからないけど、すれ違う警備兵達は木箱を被って立ち止ると、何事もなかったかのように通り過ぎて行ってしまう。

まさか無能兵？

なんか似たような奴をゲームでやった気が．．．．．

後ろに張り付いていれば、ばれないし。

城の警備ってこんなのでもいいのか？

本気で心配になってきた。

俺は半分まで進むと、適当な部屋に入り落ち着こうと考える。

指輪の変化をとき、部屋の隅に隠れようとした瞬間

「貴方は誰？」

ピンク色がかったブロンドを持ち鳶色の瞳をした、少女がこちらを見ている。

しまったか・・・王城に休める場所がないことはわかっていたが、アレのせいで気が緩んでいたか・・・

しかも、今俺変身といてるし・・・

「あくなんと言えればいいか・・・そう、『イーノック』・・・」
おいこら待て駄神

「トモキだよ？」

俺の転生前の友人であった奴の名前を出す。

「トモキ・・・貴方平民？」

そうか・・・領地の名前か階級の名前をつけないといけなかった・・・

「違うけど・・・わけあって話せないんだ」

「人を呼ぶわよ」

相手は、高圧的な態度・・・で髪の色しかも姫様と同じぐらいの年齢・・・

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールか」
ルイズは俺に名前を呼ばれたことで、少し退く

「すまない・・・」

やべえ、まだヒロインに会う気がなかったのにあっちまった
『すまない。あの創造神を見失ってしまった』

なんかそこらへんにいそうだな

「貴方は何者？まさか・・・」

「ん、君が考えているような、ことじゃないと思うよ？」

「だったら」

俺は手を挙げて降参のポーズをとる。

流石に面倒くさい

「始祖の身内に言われてここに来たんだけど」

「信じられないわ」

俺はため息をつきルイズを見る

「こいつを見てもかい？」

人体の一部を変身させる。

いや追加か

「何よそれ、貴方翼人種？」

俺の背中から、羽が生えた。

「獣人の類ではないよ？僕は神の使い……ここにあるという危険遺物を一時封印に来た。」

ルイズは驚きと恐怖に顔をゆがめる

「警備兵を呼ばないのは賢明だね？自分が死ぬ時に呼ぶつもりだろ？」

俺は目を細める、彼女が強気になっているのは魔法が使えるわけじゃないからだ。

「そんなこと」

「君は魔法が使えない」

俺はにやりとする

「そんなこと……」

「安心しなよ。僕も使えないから」

まあ時が来れば使える。

「しってるわ。平民だものね？」

「正確に言えば、僕は貴族だけど」

ただ静かに暮らしたいだけなんだけどねえ

「さてと……このことは誰にも言わないでくれると助かる。」

俺はそんな都合のいいことを言ってみる

んゝサーチに引っかかるけど、仕方ないか……

「僕は消えるから」

ネックレスの力で姿を消し、廊下に出る。

サーチで忍び込んでいるのがばれたのだろう、兵士が行ったり来たりをしている。

『スネーク、何見つかったんだ？』

うるさい黙れ。

俺は再び、木箱の中を移動しながら進む警戒態勢なのか、なかなか前に進まない。

『やっと宝物庫だね』

だからなんでさっきから監視してんのさ・・・神様

俺は、前回説明を受けた通りに始祖の祈祷書に御札を張り付ける。その御札は、張り付けた瞬間光だし消失した。

これで今回の任務、ルイズがいたずらして水のルビーはめたまま祈祷書触って覚醒するから、先回りして御札を張り祈祷書を一時封印しておいてね？が終了した。

『御苦労さま。』

俺はネズミとなって城から抜け出した。

正直、上まで行く必要なかったんじゃない？

そのころ天界では

「クソ、あの創造神どこ行きやがった」

死神が駄神を探し天界中を探しまわっていた

第三話：はじめてのおつかい（出会い）（後書き）

タイトル本気で間違えていました

本当にすみませんでした。

ゼロの使い魔ファンとして一番やってはいけないミスをしてしまいました・・・

ご指摘いただいた方、本当にありがとうございました。

第四話：やれることは今のうちにやっておこう（前書き）

作者「すまない・・・ついやってしまったんだ」

アレ「何をだよ」

作者「お前のキャラ崩壊」

アレ「ギーシュの時もやってなかった？」

作者「今さら何だけど、お前の性癖設定って全部俺から持ってきてるからな？」

アレ「どうせならその、天上も天下も唯我独走な性格にしてほしかったよ。」

第四話：やれることは今のうちにやっておこう

突然ですが、俺は砂漠にいます。

原作エルフは美人が多くて胸がでかい（キリ）ので、王都へ侵入したついでに来ちゃいました。

まあ本来の目的は、日本刀がほしいから原作で、場違いな工芸品が出る場所を探しに来ただけだ。

『なんかずっと見ているんだけど、お前もアレだねえ』

ちなみに、駄神はおつかいの時からこうしてちよっかいをかけてきます

「なあ、天界ってそんなに暇なのか？」

『いや、暇じゃないよ。ただ、働きたくないでござる。絶対に、働きたくないでござる。』

どこの、二ト侍だ貴様は。

俺はため息をつきつつ、周りの気配を見る。

エルフがいない？ 気づいていないはずはないのにな

「動くな。蛮人」

俺は少し驚く

『完全に、彼ら気配を消していたね。』

面白い……

「おいおい、蛮人の子供を脅すなんて、君等は蛮人じゃないのかい？」

ざわめく声。

「どうせ、この土地を取り戻しに来たのだろう」

「違うね、交渉を持ちかけに来た。」

エルフたちの困惑した顔が眼に浮かぶ

こうなることを予測して、交渉の内容を事前に考えておいてよかった……

俺は翼をはやす。

「亜人ではないよ？君たちが蛮人と呼ぶ人間から生まれた。一応、マギ族の末裔に当たるのかな？」

一氣に殺氣が薄れる。

「何が目的でこの地に来た？」

「さっきも言っただろ？交渉だ。」

なんつうか物分かりが悪いなあ

「長に合わせてくれ」

俺は、目隠しをされてエルフの集落まで連れていかれた。

さっきがピリピリして、心地いい。

んゝ気配的に、女性もいるのか？

ゾクゾクするねえゝ。

『貴方ってマゾ？』

神殺しとか、できないかなあゝ

『ちょ、物騒なこと考えんな』

そうそう、お前少しこっちに出られるか？

『俺を交渉のカードに使うつもりか？』

使えるものは、使うさ。

現にあっちは、対等に話し合う気なんかないみたいだしね？

『だろうな』

エルフと人間の間には隔たりがある。

エルフは人間を野蛮なものと、人間はエルフを聖地を奪い人を殺したものとして見ているためだ。

しかも、両者は洗脳教育までしているから性質の悪いことこの上ない。

眼隠しがほどかれ、俺はその光景に息をのむ。

「どこのアイドルグループの集まりだここ……」

美男子、美女の集まり。

エルフはなんだ？不細工は生まれない種族なのか？

つうか、胸でけえな一般的に比べて

「殺氣での歓迎ありがとう。」

厭味ったらしく、エルフたちに向けて言葉を放つ

「評議会のメンツもいるみたいだし」

エルフは驚いている。

蛮人に自分たちの社会体制を見抜かれたのだから、当然だわな。

「交渉の前提条件として、貴方がたのお名前はお聞きしないことにします。」

無駄に名前覚えるのが嫌いだからであって、別に深い考えもない。
今回の交渉も、情報と物の交換だし

「そしてもう一つ、貴方がたは精霊魔法が使えるが故に、私との話し合いを対等として見ていないみたいだけど・・・」

俺は翼をはやす

「そのうぬぼれは捨てていただきたい」

『うわぁ・・・完全に相手を怒らしていないか?』

殺気が一層強くなる

「私は神の使いとしてここに来た」

「悪魔ブリミルか？」

もうでて来いよ。

「悪魔とは心外だね」

男でも女でも、人間でもなんでもない存在が現れる

パチンと指を鳴らす音が聞こえる

「話をしよう」

「こちら、創造神さん。」

エルフの殺気が強くなった

「蛮人じゃないか」

その言葉に、駄神はいらっときたのか殺気をまき散らせながら、
エルフに変わる。

「落ち着けや。」

俺は殲滅眼を使うが、駄神の魔力を吸いつくせない

「はやく土下座なりなんなり、こいつにしろよ。完璧にキレてて俺の力じゃ抑えきれないから」

数分後

「いやー悪かったな」

悪びれもなく、駄神が言う。

ちなみにこいつをおとなしくさせるのに、エルフ40人が戦闘不能に内20名が重症という素晴らしい結果になった。

流石に、死者は出なかったけど

「……」

俺は目から血を流していた。

まあ力を使いすぎた結果、眼がついていけなくなったみたいだ

「俺のは神力だ。たかが、魔眼で吸いつくせると思うなよ」

もう何も言わんよ。

「さてと、交渉開始だ」

エルフたちは完ぺきに、おびえてしまってる

「ここにある。場違いな工芸品……刀を渡してもらおう」

「交渉という限りは、お前にも渡すものがあるのだな？」

鋭いなこの銀髪エルフ

「俺達が虚無と呼ぶ、悪魔についてだ」

「どういう情報だ？」

俺はにやりとする

「悪魔が今からそうだな……10年後に徐々に覚醒し始める。」

エルフたちがざわめく……

「始まりは……異世界人の召喚から始まるよ？最初の使い魔はそう……ガンダールブ」

原作ルートに沿った話をする。

もちろん名前は伏せておく。

さて、話しが終わり数分後

俺達はガリアにいた。

まあ、駄神の転移神法なんだけどね。

俺の腰には二振りの日本刀がつけられていた

『すげえな……世界の干渉なしでここまでやってのけるなんて』

今回は極力原作を巻き込まないようにするだからなあ

「そうそう、この膨大な神力はどうしようか」

さっき駄神が暴れた時に吸いとった力の一部について考える。

『あゝそれなんだけど、一週間それは使うな』

「なんでさ」

『お前の力になる。虚無の復活まで、虚無が使えないというのはしんどいだろう？』

たしかにな・・・過剰に吸いこんだら殲滅眼が使用不能になるし・・・

それに、殲滅眼を解放しっぱなしで魔法は使えるが、こんな力を吸いすぎて限界が来た時はどうしようもなくなる。

「つうか俺の力になるって？」

『神力が人間の体に適合して、お前の体の中に神力生成機関ができるんだよ。』

なるほどねえ、ある程度は回復できるようになるか・・・
そして、その機関ができるまで一週間てところか・・・

俺は翼をはやし、空を飛ぶ

「止まれ」

俺は国境警備隊を無視をすし、透明化した。

『うわぁ・・・』

なんだそのうわぁは・・・

俺は・・・ラインバースへと進路をとる。

久しぶりに実家でのんびりできるかな？

第四話：やれることは今のうちにやっておこう（後書き）

アレ「今回個人名でなかったね」

神「俺の呼び方を固定してほしいのだが」

作者「出してもよかったんだけど、この時点で勝手に設定決めちゃうと

原作ルートに障害が出てくるから止めた。神の方は人に紹介する時は創

造神で、個人的に呼ぶ時は駄神で固定します」

神「ちょwwおまww」

作者「ある程度古いネタも入れてるから、わからない人がいるかも」

アレ「次回は」

作者「ドキ、水着だらけの「マテ、コラ」」

神「神々の暇つ「いつもしてるからなそれ」」

アレ「魔王来襲」

作者「次回も」

作&p,神「まうまう」

アレ「キモい」

第五話：魔王来襲（前書き）

アレ「なんかさ・・・いやな予感しかしないんだけど」

作者「・・・・・・・・」

アレ「何？その沈黙」

作者「始まるよ」

アレ「ooooooooooooo」

第五話：魔王来襲

屋敷に帰ると・・・婚約者との顔合わせだという。
父上？僕はまだ7歳ですよ？

あれ？つかそれ聞いたの、今日なのですが・・・
え？以前に言った？

俺の分身どういことなの？と聞いてみたところ

「だってその方が、面白いじゃん」

とのこと、誰に入れ知恵されたんだか

『あwそれ俺だ』

俺は頭を押さえる。

「とりあえず。プログラム停止」

俺の分身は消えた

『へえ、自分の記憶の一部にプログラムを埋め込んだのか』
なんで見抜いているんだよ

『忘れたか？バグキャラ。お前に力を与えた者はだれなのかを』

おお、久しぶりに神様らしい発言したなこの駄神

黒髪のかわいらしいという分類に入るメイドがはいってくる

「アレオス様、お支度のお手伝いを」

ああ、逃げられない・・・・・・・・

「シェリ」

はいと自分な名前を言われたメイドが言う

「様付けはやめてくれないか？」

俺はにやりとする

「アレオス様？貴方はこの家の跡取りなのですから、呼び捨てなんてできるわけがないじゃないですか」

「それでもしてくれ、第一俺がこの家を継ぐと誰が言った？もしかしたら、犯罪者として追われてるかも知れないぞ？」

それ以上のことをする気はあるのだが・・・

ちなみにシェリは、俺がこの口調の時を知っていて、あの駄神の存在も知っていたりする。

まあ、昨日帰ってきた時に駄神が肉体ごとこっちに来て喋ってる時に運悪く、彼女が室内に入ってきたのだが。

俺はしたくが終わると、一振りの日本刀を腰につける

前回、エルフたちから譲り受けたものを駄神が神力でチート処理したものだ。

だから、いくら切っても刃こぼれしないし、俺みたいな素人が使っても鉄を軽くきる力がある。

「さて行くか」

「シェリちゃん今暇？ちょっと俺とお茶でも」

「……駄神よ。」

さっさと天界に帰れ

応接室から、いやな雰囲気を感じる。

なんと言うか、入りたくねー

俺は諦めて扉をノックする。

「失礼します。」

扉を開けて中に入ると、親父と親子の貴族が座っていた。

「先ほど言っていたアレオスです。」

「アレオス・ラ・ラインバースです。お初にお目にかかります。」

いやな雰囲気は、誰から出てるのか？

「バルトロメ・ド・ゴールです。こっちは娘の、アルトリア」

紹介された子は黒っぽい茶色のおとなしな髪と瞳を持ち柔和な笑みを浮かべている。

一見してわからないが、いやそうに思っているのが感じられる。

「では父上、私はこれで」

「待ちなさい」

「っち、はためんどくさい

「なんです？」

「彼女はお前の婚約者だぞ？」

だからどうしたというのだ、はためんどくさいことこの上ないじゃないか

「ええ、ですが父上。僕には全くの興味の無いことです」

その言葉に、少女の雰囲気は少し柔らかくなる

「父の言いつけに背くなんて」

「でははっきりと申し上げましょう、僕は遠回しに嫌だと言っているのです。」

子どもとしては最悪のセリフだが、あいにくそんなのを考えている余裕がない。

少しアルトリアに眼を向けにっこりとする

「バルトロメ様」

「何かね？」

「失礼を存じて言わせていただきます。もっと娘をよく見てあげてください」

俺はそういうと、乱暴に扉を閉め室内を出ていった。

side アルトリア

私の婚約者が決まったからといって、無理やり連れてこられたのだけど、私はそんなのを認める気はない。

どこの誰とも知らない相手を、婚約者にする何てお父様は何をお考えなのだろうか？

お父様は、婚約者になる予定のお父様と話している。

何やら話しが弾んでいるようで、婚約破棄は難しいだろう。

そう考えていた時に、婚約者になるであろう人がはいってきた。

腰には奇妙なものをつけ、眼は鋭く眼光だけで人を射ぬけそうな人だ。

その人は、自己紹介だけすると、そそくさと去ろうとする。

何故？ そう思った瞬間、貴族としてはあり得ない行動をした。

「僕は遠回しにいやだと言っているのです」

その言葉の後、私に向かって彼はにっこりとほほ笑んだ。
あれ？心の内を読まれている？

そして極めつけは

「もっと娘をよく見てあげてください」

彼の言葉にはっとしたのか、お父様は私を見る。

「いやだったのかい？」

私はうなづく

「ええ、でも……彼ならいいと今思いました」

ああアレオス様………

side アレオス&アレオス

俺は背筋に寒いものを覚える。

『うわぁ』

なんだよ駄神

『あんなフラグの立て方ありか？強引すぎやしないか？主人公さん
よう』

だから何なんだよ駄神

『リア充は爆発ろってことだよ。いわせんな、恥ずかしい』

何がリア充だこの駄神、お前がこういう風にしたんじゃないのか？

『それもそうだった』

俺はあきれて、自室のドアを開けると刀をそこら辺に投げ、ベツ
ドに横になる。

「プログラム作動」

簡易に俺の分身を作って、俺自身が透明になった

「また面倒くさくなったからってこいつは………」
分身が何か毒づいている

「よいではないか、よいではないか」

俺の意識は闇に堕ちた

俺の本体は眠りについたと………
なにしようかなぁ

『いいのかそれで・・・』

俺は本を開くと読み始める。

本体みたいな魔眼の類はないのだけれども、本を読み知識をとりこむことならできる。

いきなり、ドアが開いた。

本体も驚いたのかびくんと飛びはねる

「なに？ 一体、何？」

「アレオス様」

どう言えがいいのか・・・本体との記憶の共有があるわけだから、さっきのでいいか・・・

さっき、婚約者として紹介された少女がいた。

「あるえ？ おかしいなあ・・・婚約断ったはずなの・・・」
本体も同じことを考えている

『ロリコン（ボソ）』

ちよつとまで、この駄神。

本体はどうか知らないけど、俺は違うぞ。

「私を嫁にもらってください」

「うん、やだ」

俺の口からはそんなセリフが、勝手に漏れてきた。

どうやら、本体が俺の意識に介入したみたいだ

あれ？ 魔法詠唱？

室内で竜巻発生してますよ？

『そうそう、お前の本体逃げたから』

はい？ ちよつと何してるんですか

アッー

ふう・・・痛みをフィールドバックしてみたが、間違いなく直撃もらったら死ぬるなあ

『それに、笑顔でO☆H A☆N A☆S I☆しょ？ 状態だったし』
ねえ、それどこの魔砲少女？

なんで怒ったのか皆目見当がつかない。

『そう思っているのお前だけじゃね?』

そう思っていると、後ろから人の気配がした

「彼が教えてくれたの、ここに貴方がいるって」

俺の分身がボロボロになって、引きずられてくる。

「ちょ……それはやばい」

『あゝそうか、怒りでスクエアクラスの魔法が使えているのか』

ちよつと駄神? 冷静に分析してないで助けて

「少し頭冷やして、私の思い受け入れようか」

もうヤンデレってレベルじゃねーからな?

『そうそう……思い出したアレ、カッタートルネードって言う魔法だわ』

ちよつと待て……

やばい近づいて……

かゆ……うま……

第五話：魔王来襲（後書き）

作者「主人公お疲れ様でした」

アレ「ちょっとマテや強引すぎるだろ」

作者「俺の妄想を全部ぶちまけていいと?」

アレ「それも勘弁してほしい」

作者「真のロリコン覚醒してなくてよかったじゃん」

アレ「お前だったらやりそうだから困る」

俺は諦めて扉をノックする。

入るとまず目に入ってきたのは

おとなしめな黒基調の茶色い眼と髪、そしてまだ、第二次性徴期にさしかかっていない胸、そして人形みたいな手脚。

すべてがパーフェクトといってもいいぐらいに、俺の趣味にあっている。

作者「こんな感じ?」

アレ「頭痛い……」

キャラ紹介

作者「さてと、一拍置いてキャラ紹介」

アレ「作中で語られなかった能力の説明ですねわかります」

作者「ではまず、我らが主人公アレオス・ラ・ラインバース君」

アレオス・ラ・ラインバース

【容姿】

銀色の髪に赤い目をしている。アルビノではなく、肌の色はいたって普通。

【能力】

複写眼…発動時には瞳の中に七色に明滅する涙の形が浮かび上がる。伝勇伝ではライナとして覚醒済みのもの、何もかもを読み解くことができる。

殲滅眼…発動時には瞳の中に朱の十字が表れる。人体や魔法を吸収し力をつけることができる。ONとOFFが可能で、ネタ元の伝勇伝本作のように魔法が使えなくなると言ったことはない。

虚無…四の四とは関係なく独立した虚無が使える。

プログラム…すべてをプログラムに置き換え、プログラミングにより世界に介入できる。複写眼の力で読み解いたものはあくまでプログラム言語や0と1で書かれたものではないので、参照程度にしか

ならない。

神力・殲滅眼で神の力を吸いとった時についた能力。今後どう転がるかわからないが、創造神は使用の仕方を教える気満々である

【アイテム】

姿を変えられる指輪・駄神からのプレゼント、名前はない。念じるだけで姿を変えられる

透明になるネックレス・駄神からのプレゼント？名前はない。念じるだけで姿を変えられる

透明なルビー…まるでダイヤモンドのようなルビー、始祖とは関係ない

始祖の祈祷書…オリジナルの始祖の祈祷書とは別の独立した存在、名づけるなら神の祈祷書と言ったほうがいいのだが、何故か始祖の祈祷書と呼んでいる。

【当人の考え方と性格】

極度のめんどくさがりなのだが、何故か勉強はしっかりするいい子。原作介入に関しては、持ち前の好奇心からしようかと考えているそうなのだが、よくよく考えると面倒くさいから考えるのはその時まで先延ばしらしい。

作者「どうよ？」

アレ「なんか適当だな」

駄神「あれだろ？キャラ固定してしまったら、あとあと大変だから

じゃない？」

作者「言わないで〜つうか、アレさんプログラムって能力時点でチートってませんか」

アレ「・・・世界を構成するプログラムって長いよ・・・
・ざっと十核^{がい}行ぐらい」

作者「つまりは理解できないと？」

アレ「唯一介入できるの、物体生成と人体コピーだけだったからね？」

駄神「何か忘れてると思ってたら、複写眼の設定を変えてプログラム化した奴を理解する能力を追加するの忘れていたわ」

アレ「オイ」

作者「続いてこの方」

アルトリア・ド・ゴール

【容姿】

茶色がかった黒髪に、茶色い目をしている。

【能力】

風のドット

倍加…喜怒哀楽で魔力値やかけれる属性数が変わったりする。

【性格】

通常は内面に自信を隠しているが、主人公にいわくただ漏れとのこと。性格は非常に悪く、黒いらいし（主人公談）

アレ「作者？」

作者「ん？」

アレ「俺になんか恨みでもあるのか？」

作者「ゲート」

アルトリア（以下アリア）「あれ？ここは・・・」

アレ「ぎゃあああああああ」

作者「次は創造神」

創造神

【容姿】

なし

【能力】

すべてを司ることのできる能力（名前？ナニソレオイシイノ？）

【性格】

仕事をしたくない民の一人、働きたくないといって常に主人公のそばでちょっかいをかけている。いないときは、部下というか、同僚に追い回されているときである。

死神「ここに、創造神来ませんでした?」

作者「あゝ逃げたな。お前も苦勞するねえ死神」

死神

【容姿】

黒髪で黒い目をして黒いパーカーを着ている青年。日本刀の方がふりやすいとのことで、日本刀を愛用している

【能力】

死を司ることができる

【性格】

いわゆる上司に恵まれないかわいそうな子。
神の中の唯一の良心

作者「あれ?俺一人になってね?」

アレ「し……しぬ……（ガク）」

駄神「働きたくない……働きたくないでござる」

死神「さっさと入れや」

キャラ紹介（後書き）

本日、『え？なにそれ怖い』を投稿予定。
その後の予定は未定です。

第六話…え？なにそれ怖い。（前書き）

はい、前回アレちゃんが意識不明の重体になったので今日は私一人です。

かなりさびしいですが、駄文をどうぞ。

第六話…え？なにそれ怖い。

前回、悪夢を見た俺は三日間寝込んでいたらしい……
らしいというのは、意識を失った時に起動停止できなかった分身
から聞いた話だ。

駄神は、死神に連れて行かれたらしく珍しく気配がない。

「ハア……平和だなあ」

俺はぼんやりと空を眺める。

腹がすごい音を立てて、俺は腹が減っているぞと主張して来た。

まあ三日間も意識不明で、何も食べなかったら腹もすくわな。

「さてと」

簡単にいつもの服装に着替える。

いつもといっても、あまり服のバリエーションが俺が生きていた
時代の日本よりないので、いつも同じような服装になってしまう。

まあ、ものぐさな俺にはちょうどいいっちゃちょうどいいのだが。

「ん〜」

俺の周りが静かすぎて、あんまり落ち着かない……

今まで、駄神がちよっかい出したりしてくれてたからなあ

自分の部屋を出て、食堂に向かう。

たった5人しかいないのに、食堂はかなり広い……

貴族は見栄っ張りが多いからという理由で、無理やり納得してい
る。

「シェリ」

掃除をしているメイドを呼びとめる

「アレオス様、お目ざめになられたのですか？では、今お食事をお
持ちしますね」

ああ〜なんと言うか、可愛い系なのにしっかりしているっていう
ことに癒されるなあ〜

まあ可愛い系だから、ドジっ子でもいやされただけだね。

雇われメイドにドジッ子属性求めちゃいけないと思うけど。

俺は何かの焼ける音に、そわそわしながら待つ。

ちなみに、作っているのはシェリだったりする。

シェフも雇っているのだけど、シェリの郷土料理が日本の味噌汁に似ているからだ。

今度どこ出身か聞いてみようか？あわよくば、その貴族と交流を持ってグフフフ

「お待たせしました。」

そんな妄想をしているうちに、俺の前に品が並べられる。

味噌汁のようなものに、ライス（まあ味はジャポニカ種にほど遠いが・・・）と焼き魚だ。

質素に見えるが、和食派な俺にとってこれが食えることが唯一の幸せといってもいい。

「それをメイドが作る。・・・キッチンに立っているメイド萌えるぞ」

つつても、何もないんだけどね

おとなしく飯を食うことにする。

「アレオス様、主様が起きたら私の部屋に来るようにとおっしゃられています。」

俺は危うく、味噌汁のようなものをふきだしそうになる。

「親父が？俺まだ寝てることにしておいてくれな「いすね」」
ですよね

つうか、シェリが冗談言ってくれるようになるまで長かったなあ
「ちよっくら、親父のところへ行ってくる」

俺は食堂を出て、親父の書斎に向かう。

途中、姉貴達と出会ったが無視をしておく。

この際だから、家族構成をラインバース家は二歳上の長女、俺、一歳下の妹それから両親の5人家族だ。

ちなみに、俺は本体の状態で姉にあったことは一度しかない。

姉は俺みたいな前世の記憶があるわけでもないのに、頭がいい・

・根っからの天才児だ。

だけでも、人とのコミュニケーションが苦手で、常に自室に引きこもっている形になっている。

まあそんなところで、家族の話はきって妹については原作ルートで話すとするよ。

「失礼します」

親父の書斎についたので、扉をノックしてから声をかけ開ける。
三日前の一件から、顔を合してなかったのだが・・・つうか、俺の場合完全に昨日ぶりなわけだが、親父は腕を組んで椅子にもたれていた。

まるで、この日を待ちわびたと言わんばかりに、悪い意味ですごくいい表情をしている。

「何故、よんだかわかるな？」

俺は微妙な顔をして、眼をそらそうとするが

「こっちを見ろ」

と怒鳴られ、恐る恐る親父の顔を見る羽目になる。

「わかっていますよ、父上」

俺は負けじとにらみ返すが、親父の目が怖い・・・

俺って弱いなあ

「父上の意思の反した言動でしょう？」

親父は違うと言わんばかりに、凄みをさらに利かせる

「お前が、あの程度の魔法でへばったからだ」

あの程度って・・・カッタートルネードが？

アレ一応、スクエアクラスの魔法なんだけどなあ。

「で？僕にどうしろと？」

「今から、風の使い手の元に修行に行ってもらおう」

俺は嫌な汗がだらだらと出る。

「私が騎士時代に仲良くなった人でなあ。あの時は、まさか男装していたなんて思いもよらなかったわ」

頼む・・・オリジナルというか・・・原作に出てきていないキャ

ラを、せめてワルドさんとかワルドさんとかワルドさんとかワルドさんにしてくれ」

「あの方はもう、公爵家の方なのに相談したら快く引き受けてくれてなあ」

「……」

公爵家って言ったら、あの人しか浮かばないんだけど？

つか、もう親父の顔の広さと発言の唐突さに関してはツッコムのしんどい……

「誰です？」

なんか雰囲気的に、昔話に入りそうだったのでそらしておく

「カーリヌ・デジレ・ド・マイヤール様だ。」

……はい、死んだ。今度こそ死んだ。

無理だろあの化け物、サイトでもボロボロになりながら戦ったんだぜ？

そんな化け物のところで修業？

ありえねーだろ

「今からラ・ヴァリエール領に行ってもらおう」

「流石に、お断りします」

それに、我らがアイドルに顔が割れちゃってるしなあ……

「ふむ、ということですよ？カーリヌ殿
え？」

気づくと、扉の後ろにきつい雰囲気を持った桃色がかったブロンドの女性が見える。

……あれ？俺、死亡フラグたてたっけ？

「そうか。残念だが、君の身柄はこちらで預からせてもらおう」
なんかその言葉、おかしくね？

残念だが、諦めようじゃないの？

そのセリフって、つれて行く前提ですよ？

あ……アッー

馬車に乗っている数日間、生きた心地がなかった・・・

とりわけ、途中で宿泊のために立ち寄った村で逃げようとする、容赦なく偏在とカッタートルネードが襲ってきて、俺の精神をじわじわとむしばむ。

殲滅眼がばれてもいいと思って使用したが、使用限界が来たのか眼から血が出るほどに魔力を吸いこまれた。

結局、魔眼はばれなかったけど。

とりわけきつかったのが、馬車から飛び降りて逃げようすると、風の魔法につかまれそのまま引きずられたり。

足腰が立たなくなるまで、エア・ハンマーを使われたことか。

そして俺は、完全な敗北を期すこととなる・・・

「ようこそ、我がラ・ヴァリエール領へ」

俺はリアルOTLのポーズをとり、そのまま引きずられていった。さて、これからどんな悪夢が待っているのだろうか？

第六話…え？なにそれ怖い。（後書き）

移動編はいきなり短縮しました。

とりあえず、今考えている設定を書いておくことにしました。妹に
関しては未定が多いので、書けませんでした

正直、ライトノベルの書き方（仮）を参考にしたのですが、文才の
ない私にはその再現すらできないので^^；

まだ、原作ルートの構想ができていないので、こうしてほしいとか
言う要望がありましたら、要検討の上私の独断と偏見で改悪（文才
的な意味で）して無理やり入れたいと思います。

さてと・・・次回はヴァリエール領？ルイズとの再開（サブタイ
変更有）をやりたいと思っています。

キャラ説明に神二人が紛れこんだ理由？

レギュラーじゃないけどたまに出す。（私のお気に入り二人）
スーパー手直しタイムに入ります。

第七話：そして、物語は加速する（前書き）

はい、次話投稿開始

新規で書き直していた分が収拾つかなくなったので強制終了w

第七話：そして、物語は加速する

どうも、アレオスです。

ヴァリエール領についてから、三人娘と領主に挨拶をすまし客室で死んでいます。

ルイズから逃げるために、透明になって逃げていたわけですが・
・
・

「しぬ・・・死んでしまう・・・」

つくまでの数日間、俺の体はボロボロになり精神がすり切れたのか動く気すらわかない。

原作にはあんまり絡みたくないのになあと、俺は思いながら俺が生まれた境遇をのろう・・・

あれ？この境遇作ったの神じゃね？

俺は神を恨んでおくことにした。

まあそんな戯言の類はどうでもいい

表があわただしく、なっていることに気付き俺はちらりとドアの外を見る。

使用人を一人捕まえ話を聞くと、ルイズさんがいなくなっ
たらしいですよ？

ほとんど俺には関係ないですが・・・・・・
変化して、鷹に変わる。

しばらく空を飛んで、憂さ晴らしと行きますか

飛び立つと、翼に風があたり体全体で風を切って楽しい。

森の中に、小さいピンクの髪を持った少女が見えた。

オークの群れという、おまけつきで・・・・

「まいったね」

俺は近場で変身を解除し、元の姿に戻ると、オークの群れに飛び込んだ。

「やあ、ルイズさん」

軽い挨拶の後、俺はプログラムを実行させる。

「ライトニングクラウド」

俺の体から雷が発生して、オークたちを打ちとっていく
しかし、とりわけ巨大なオークだけは違った。

手にしていたコンボウひと振りで、俺の魔法を消してしまったのだ。

「……………ルイズさん、全力で走って大量に酒持ってきて」

そう……………こん棒になにかしらの力を加えて、魔法をかき消したのがわかったからだ。

「オークは信仰する神なんているのかい？ 族長さんよ」

俺の言葉に、オークは笑う

「何故、俺が人間の言葉を解すると？」

厭味ったらしい笑顔で俺は言う

「あゝここでする会話は内緒ね？ 俺はすべてを知ることのできる眼を持っていたりするのさ。」

俺の目に変化する

「さて、交渉なんだけどさ……………お前、俺のこまになる気はないか？」

オークは意外そうな顔で俺を見る

「なゝに、今すぐこまになれとは言っていない、今からそうだな10年後大きな戦争がおこる。そこで、俺のために戦ってほしいんだ」
オークが吠える。

俺はそれを眼を細めて見つめている。

「面白いことを考える人間だ。装備が整った状態での、人間狩りがお前の提示する条件か？」

静かにうなずき、すっぽりと俺の体がおさまりそうな掌に自信の掌を重ねる。

「契約成立だ」

そういうと、オークは森の中へと帰っていく

そんなとき後ろから、ルイズを連れたカリーヌ（鬼）が都合よく

表れた。

「あれ？オーク鬼は？」

俺は少しいたずら心が働き、にやりとする。

「ちよっと、特殊なおい返し方をしていたので、追い返しました」
俺はそういうと、何事もなかったように、立ち去ろうとする。

「ライトニングクラウドを使ったそうね」

「ち、ルイズさんいらんこと言いやがって

「ですけど・・・ぬあ」

出現したのは、カッタートルネード

またあれなんだ。

「プログラム選択…c u t t e r | t o r n a d o . c p p」

俺はカッタートルネードを、相殺する

「これが、僕が唯一使える魔法ですよ」

sideルイズ

初めて会った時、彼は魔法は使えないと言ったそれなのに、今の魔法は一体？

「『プログラム』といいまして、世界の因果を曲げる魔法です。今回は、カリィヌさんの魔法をコピーしてそれを発動させてもらいました。」

彼はそういうけど、そんな魔法なんかあるはずない
お母様も同じなのか、ポカーンとしている。

「この魔法はどの属性にも、あてはまらなんですよねえ」

ポリポリと、彼は頭をかいている

私はその意味がわからなかった

「まさか、虚無？」

「違います」

彼はきっぱり否定する。

ペンタゴン以外の魔法ということ？

そんなのありえるの？

side アレオス

まいったな、ばれたときのいいわけ考えていなかったや。

「まさか、先住魔法？」

ルイズがそんなことをつぶやくが

「あゝ違うと思いたい。」

俺はそうつぶやき、軽く空を見上げた。

「僕にも、よくわかっていないんだ。」

さて…………説明をどうしようか？

side ???

フードを被った少女と、その隣で立っているボーイッシュな雰囲気
の少女がいた。

「あれが、我が主か？」

フードの少女がそうつぶやく

「我らがですけどね？」

すかさず、ボーイッシュな方がツツコミを入れる

「それにしても、あのモードさん達はどうなったか、聞いています
か？」

「心配ない、代理を立ててきた」

白銀の鎧を着こみ、金色の髪たらこ唇の騎士がいつの間にか少女
たちの隣に立っていた。

しかも、司教風の男までいる。

「彼には物語に参加してもらわないといけないね？」

司教風の男がつぶやく

のしのしと、巨大なオークがその集団に向かって歩いてきた。

「ふむ…………これで本当に、良かったのか？我をまといし風よ、
我の姿を変えよ」

巨大なオークが、一瞬にしてさわやかな青年になる。

「御苦労さま。君の眷属は私がいやしておくよ」

司教がオークにそう伝えると、オークは満足そうにどこかへ行ってしまった。

「さて、我々も行くか」

その場から、一瞬にして全員が消えた。

第七話：そして、物語は加速する（後書き）

かなり強引に、物語を進めてみました。

あれ？プロットも書いてきっちりしていたのに、どうしてこうなったし

ちなみに、ルイズが屋敷を飛び出した理由はまだ、不明です。

しよくもない理由なので、語る気がねえ……………

プログラムに関する詳しい説明を入れないとねえ……………

番外編一話：プログラマーの弟子はハルケギニアで・・・（前書き）

ちよこちよこはさむ予定の番外編

本篇とあいも変わらず駄文で進行します

どうぞ

番外編一話：プログラマーの弟子はハルケギニアで……

金髪の男が喪服を着こみ、葬儀場の前で紫煙をあげながらタバコを吸っている。

その姿は、哀愁が漂っていて……

「なんでだよ」

俺は先日事故で、師であり父であり兄であった人を亡くした。子供を助けようとして、ひかれたそうだ……

なんと言うか、彼らしいというか

俺の頬に涙が伝う

『もし、彼と会話することがかなうとしたら貴方はどうします？』
周りを見渡しても、誰もいないはずなのに声が聞こえる。

『答えなさい神山 命』

俺は自分のフルネームを呼ばれて、ハツとする。

神山は俺を拾って育ててくれた人の名前、そして命は……

「会いてえよ。でも、彼は……」

「もう一つの質問です。貴方を捨てた親を、怨んでいますか？」

俺は声のした方向を見つめる。

そこには、巨大な鎌と白い羽を持ち漆黒の衣服を着こんだ少女の姿をした天使？が立っていた

「怨んではいない……あいつ等に捨てられなかったら、俺は彼に会うこともそれを取り巻く人たちとも、孤児院のみんなとも会うことはなかったからな」

俺は静かに本心を告げる。

「ふふ……大きくなったね。」

こいつは俺のことを知っている？

「あの時、貴方が生まれたことは問題視されたけど、見ためと言葉使い以外まっすぐに育っているみたいで、安心したよ？」

「何の話だ？そしてお前は……」

すると天使は、頭を軽く下げる。

「死神直属天使部隊第1位、クラリスです。以降よろしく願いますね?」

かちやりという、鎌の嫌な音がし俺は軽く後ずさる。

「貴方の出生は、上位生命体が住んでいる場所でも、私はそこまでの案内役として派遣されただけですの」

上位生命体?

「では行きましょう」

少女は、俺をつかむと羽ばたいてどこかへと飛び始める。

ちなみに俺は、生身でしかも初めて空を飛ぶわけで……

「こええええええええ」

と叫んでいた。

意識を失って、寝かされていたのは真っ白い部屋だった。

「ようやく目覚めた?」

クラリスが枕元に立っている。

「ああ、ここは?」

俺はきよろきよると、真っ白い何もない部屋を見渡す。

白すぎて、精神がおかしくなりそうなんだが不思議と落ち着く

「上位存在が住む世界の中にある、貴方の部屋よ」

俺の部屋?

そう認識した瞬間、部屋が俺の自室とまるっきり同じとなった。

「……頭いてえ」

「ふふ、さてと行きましょうか?」

外にいられてでると、そこは大量の花が咲き乱れ心が安らぐような場所だった……

その中に、男にも女にも見えるやつが立っていた。

「久しぶりだね?」

そいつの口から、そんな言葉がリンとした声で聞こえてくる。
久しぶり?

「私は創造神、神達の王でもある。」

「俺は……」

そういいかけた瞬間、神は口元に手を当てる

「言わなくてもわかるよ。私の息子よ」

あ？息子？だれがだ？

「人間と神のあいだに生れた、ハーフそれがお前だ。」

俺は静かに笑う

「あんたはずっと、俺のことを見ていたわけか……神様。」

神は静かにうなづく

「だったら、彼も救えたはずだろ」

俺を捨てたことに関しては、怒っていないんだけど……

彼を見殺しにしたことは、おこっているのだ。

「さてと、お前の言葉次第では彼に会えるよ？」

俺は驚き、神を見る

「君はハーフだからね。それを認識した瞬間、不老不死となった。

そして……君に、世界の旅人としての力と、時渡りの力を上げ

よう。せめてもの、罪滅ぼしにね？」

神は軽く微笑む

「では、彼の元に送るよ？彼本人は自分で探してくれ」

俺はうなずくと、足元が崩れて、落下していく

「ハルケギニアに行ってらっしゃい」

ゼロの使い魔の世界か？

そう思った瞬間、パラシュートなしのスカイダイビングしている

ことに気付き、俺は意識を失った。

気がつくと、木造の家にいた。

俺は軽く頭を左右し、あたりを見渡す。

懐かしいような、子供たちがはしゃぐ声が家の中から聞こえてくる

眼を細め、そのはしゃぎ声に耳を傾けていると、扉が開き一人の

少女が歩いてきた。

「眼が覚めましたか？」

その少女は室内だと言うのに、耳を隠すようにフードを被っている。

「ああ、君が助けてくれたんだね？」

よく生きていたな俺・・・・・・・・

俺はしみじみしながら、軽く窓から空を見上げる

「先ほどは何をお考えに？」

俺は苦笑いをする

「ちょっと懐かしくなつて。ここは何だい？」

「孤児たちを集めた村ですが・・・」

なるほど・・・

「どうりで、懐かしいわけだ。俺も孤児でね？」

「そうだったんですか」

そこで、会話が途切れる。

どうやら、この少女は男との会話をあまりしたことがないようだ
俺は苦笑しつつも、軽くあくびをする

「んじゃ、俺は邪魔になるだろうからさっさと消えるよ」

「あっ」

彼女は杖を構えようとするが、俺はそれより先にどこかに消える。
そして、数キロ離れた草原にて・・・・・・・・

「あれが、ウエストウッド村か・・・・杖を持っていたってことは
あの少女は・・・・まあいい」

あそこがウエストウッド村だとしたらここは・・・・・・アルビ
オンとなるな

下に降りるにしても金ないし、またパラシュートなしのスカイダ
イビングか？

いやだなあと思いつつ俺はアルビオンを歩いて行く、彼を見つけ
るまでどこまでも

番外編一話：プログラマーの弟子はハルケギニアで……（後書き）

師弟が会合う時・・・物語は加速する。

はい、もう一人の主人公を作ったりしてみましたb

入院が決めますたゝw

スコシ、ハンセイシトキマス

第八話：秘密と公爵とプログラム（前書き）

実験的に、オリキャラを動かして行きます

一部キャラをつかめていないため

話し方に、アレ？と思うことがあるかもしれませんがご了承ください

第八話：秘密と公爵とプログラム

side カリーヌ

私は、昨日の相殺された魔法を思い浮かべながら、アレオスの魔法発動を見る。

昨日のアレを使用禁止にしたところ、カッタートルネードどころか、ドット魔法ですら使えなくなっていた。

簡単に言えば、ルイズのように魔法が爆発してしまうのだ。

「うーん・・・やっぱりか」

この子は、その理由を知っているようで苦笑いを浮かべている。

「やっぱり、プロ・・・」「却下」ですよね」

そして、ルイズもそのことに興味があるのか、この子の特訓をずっと見ている。

この子と、ルイズに共通するのは何なんだろうか？

side アレオス

うわあーがん見されてるじゃん。

分身置いて、逃げようと思ったのになあ

「イル・フル・デラ・ソル・ウィンデ・・・ヘンシン、プロキドウ」爆発と同時に、変身してプログラムで分身を作る。

ふつくしいと言えるような一連の動作、『見られているのなら逆に見せればいいんじゃない？』作戦が成功を収めた瞬間だった。

なんとも微妙な作戦名である。

いつもの通りに、鷹に変身した俺は上空に舞い上がり街まで飛んで脱出した。

街は、人の流れこそ少ないものの結構活気づいている。

流石は、公爵家が納める土地ということか・・・

変化をとき、平民に紛れ込んだ俺はゆっくりと歩いて行く、これがまさか駄神に仕組まれた、先のある未来だとしても

「やあ・・・旅人さん？」

黒い髪で、ボーイッシュな少女が俺に声をかけてくる

「『そんなにあわてて、どこ行くの？』」

空間がゆがみ、俺と彼女以外の人が消える。

俺は少し、息をのんだ。

この世界の魔法に、こんな技はないはずだ。

しかも、虚無の使い手は原作四人＋俺だけ・・・・・・こんな術が使える者はいないはずだ。

「お前は一体」

俺は目をずっと細めると、少女を睨む

「おお、怖い怖い。僕は歪み・・・・・・この世界の歪みさ」

少女は楽しそうに、嗤う。

「歪み？」

「あれ？あの神様から聞いていないのかな？この世界には、あつてはいけない歪みがある。数多の『ゼロの使い魔』と呼ばれる並行世界は、転生者が来たことで物語がゆがんでいたけど、この世界では君が転生する前から、物語が歪んでいることを・・・・・・」

数多の『ゼロ使』の並行世界だと・・・・・・

「そういうことか、神はその歪みを修正させるために、俺を送り込んだのか？」

「そういうことになるね？」

今まで必死（笑）に、原作介入から避けていたのに・・・・・・

「故に、君は僕の敵だということだ。ギアス」

俺は、隷属の魔法を殲滅眼で吸収し身体能力を上げる。

いや・・・・ギアス自体、この世界にあるギアスよりかはるかに凶悪なものだったらしく、吸収した途端、身体能力が跳ね上がった。「ふふ・・・・君にとっては魔法は餌なのか、じゃあこんなのはどうだい？『我、契約文をささげ、大地に眠る悪意の精獣を宿す』」

いっしゅんにして、少女の姿が消える。

殲滅眼、複写眼の元となった世界の魔法・・・・確か、脳のリミッ

ターを外し限界まで身体能力を上げるだけだったものはず

けど、彼女の動きはニンゲンの身体能力をはるかに超えていた。

「っち」

魔力吸収で、身体能力が上がっているが、俺のスピードでは追いつけない

「んじゃ・・・『プログラム』指定、C++・・・っち・・・機械語だ・・・逆コンパイル」

すべてのものを、指定した言語に置き換えて表示するプログラムも、少女を解析できないようで少女だけ機械語だった。

逆コンパイルしている途中でも、俺の体には尋常じゃないほどの衝撃が来てじわじわと体力をむしばんでいく

能力をフルで使っても、対処しきれない

アレを使うか、プログラムで脳内の演算がやばいことになってるけど仕方がない。

「ユビキタス・デル・ウィンデ」

偏在の魔法が発動する。

殲滅眼が、ひっきりなしに自分の魔力を吸収していく

「ふふ・・・魔法が使えるんだね？」

過剰魔力により、普通の魔法では爆発してしまう、ならその過剰分を吸い取ってやればどうだ？というのが俺の考えた虚無の使い手用魔法論理『虚無』なんだが・・・こうもうまくいくなんてな

だけどその代償として、力の制御による膨大な演算が頭を圧迫するプログラムの演算もあるから、俺の頭は限界だといわんばかりに頭痛で主張し始める。

「行くぜ」

俺は目を細める

解析が同時に完了して、少女を構成している情報の塊を保存する六人の俺が同時に同じ動作をする

「「「「「爆炎」」」」」

俺の周囲を巻き込んで、爆発が起こる

この魔法において、爆発はあまり重要ではなく、周囲の酸素を限定的に無くし効果範囲の酸素を無くし、効果範囲のなかのやつを窒息させる。

その魔法を自分を着点に、六人同時・・・いくら速からろうと、いくら人間離れしてようとこいつを避ける手段はない・・・

それは自身も例外ではなく、俺は・・・

side アレオス分身

「精神力切れです」

俺は笑いながらそういうと、カリィヌさんはなにかつえをとりだしましたよ？

あれ？

なんですか、そのドS的な笑顔は・・・

「まさか・・・」

エア・ハンマーが飛んでき、俺はそれをギリギリでよける
精神力は心の震えでたまるんですねわかります。

ハハ、まったく手厳しい軍人脳さんめ

「しぬうううううう」

小一時間、追いまわされて、徐々に力尽きてくる。

ふと、本体の生体反応が届かなくなる

「あれ？」

俺はそれに油断して、エアハンマーをもろでくらっていしまう
そして、意識が飛ぶ

俺は久しぶりに、俺個人としての夢を見ているはずだった

「よう、俺」

それは、本体の生体反応が消える前に記録された意思

「カリィヌさんに、ルイズと俺の系統魔法についてはなしといてくれ、ルイズには聞かれないようにな？」

俺は軽くうなづく

最後に残せたメッセージはそれだけなのだろう、それ以上の言葉を彼はつづらなかった。

眼を覚ますと、ルイズがそばに座っていた
軽く、こくんこくんと頭を上下させているところを見ると、眠ってしまっているのであらう

俺は軽く微笑むと、音をたてないように部屋をあとにし、カリーヌさんの所へ向かう

「カリーヌさん、少しお話があります」

先ほどの引け目があるのか、すこしおとなしいカリーヌさんを引っ張りラ・ヴァリエール公爵のもとへいく

「先ほどの事かい？」

カリーヌさんが口を開く

「いいえ、娘さん・・・ルイズと僕のあやつる系統魔法についてです」

虚無について少し説明する

「そんなバカな話があるか」

公爵が声を荒げている

「失われた法をどうやって知ることができる」

やっぱり、はいはいと信頼できることでもないか

「まあ僕の言いたかったことは伝えたんで、どう動くかは貴方たちしだいということ」

信じるか信じないかを相手に任せる

それが今は、一番だろう

少し急ぎ足すぎた気がするが、問題ないだろう
さてと・・・本体じゃないが言わせてもらおう
原作に介入すると（もう十分しています）

第八話：秘密と公爵とプログラム（後書き）

病室で酒盛りしてたら怒られた軍師です

駄神を出そうかな？とも考えたんですが

ここで出しちゃうと面倒なことになりかねないので・・・

そして、相も変わらず駄文でしかも何がやりたいのか目的が見えてこない文章・・・

ちよつと、あたまひやそうかな・・・

第九話：学園編始動、反省は二の次に（前書き）

『キングクリムゾン』

過程をすっ飛ばして結果だけを残す。（残せてない）

軍師特有のスタンドだあ

むしろくしゃしてやった。

反省はしていない

今回は少し短い（いつもです）です

第九話：学園編始動、反省は二の次に

あれからいく年の歳が過ぎて、俺はトリステイン魔法学院に入学する歳となった。

まあいろいろとあったけど、気楽に過ごしましたよ？

あの後、本体は戻ってこなかったけどね？

あの後の生活でわかったことなんだけど、俺は虚無は使えるようだ。

どうやら、前に出現させられた時以降に追加された力らしいが、今のところ産み出された俺でさえ追加された能力に関しては、よくわかっていない

「ちよっと、アレ」

物思いにふけっていると、隣にいたルイズが膨れている。

「ん？何？」

俺は少し焦る

そして眼を上げると、視線の先にオールド・おす……めんどいからジジイでいいや

「すぐく、ワシの扱いがひどく感じたのじゃが」

「気のせいだろ」

あぶねえ、亀の甲より歳のこうとは言ったものだな（まったく関係ない）

「お主が予言したことは、来年からおこりはじめるのかのう」

ちなみに俺はあれから遊んでいたのではなく、いろいろな原作キヤラに会いに行ってこれから起こることなどを事細かに教えていた。

面白いところを除いて……

「さあね？これぞ神のみぞ知るって……」

何を話しているのか分からずに、不安そうなルイズをおいてけぼりにして物語は進んでゆく

side ???

黒い髪が風に揺れて、茶色の双眸が遠くを見つめる
八年前に俺は傷だらけの状態で、見つかったらしい。

見つかったらしいというのは、そのこともそれ以前のことの記憶
もきれいさっぱり消えているからだ。

記憶がないので、帰るに帰れなくなった俺は俺を発見した家族に
引き取られた。

エンピールという名を与えられて、生活している

「エンフィールドか……」

等と訳のわからないぼやきを入れつつ、まきを割る

さてと……

「やぁエル」

自らを神と名乗る男？が、俺に声をかけてくる

「神力は安定しているかい？」

この男、俺がここで生活をはじめ出してから二ヶ月後にやってき
て、メイジとは明らかに違う力を、俺に無理やり教え込んできやが
った。

「ああ大丈夫だ」

「ならいいんだ……」

そういうと、男は立ち去る

正直、何がやりたいのか分からない……

「エル」

おっと……

遠くの方から、走りながら茶色い髪をした少女がかけてくる

「ん？どうした、リン」

リンと呼んだ少女は荒い息をしながら、肩を上下させる
うん……何というかまるやかにエロいね。

「受かったの」

は？

「魔法学院のメイドとして受かったの」

.....

「おめでとう」

「ありがとう。で、さっきの一瞬の間は何？」

「ち目ざとい

「ドジッコのお前が、果たしてメイドになれる時は来るのだろうか」
どじっ子メイド・・・何か売れそうなタイトルだけでも、リアルでいて需要があるのか甚だ疑問である。

「つか、貴族のご子息ご子女に使える仕事で、どじは駄目だと思うんだ。」

「何もないよ。」

リンはジト目で、俺を睨んでくる

「さてと、俺は少し旅に出ようかな？記憶も戻らないとやばいし」
俺はそうつぶやく

「行くあてとかは？」

「んゝとりあえず。ラインバースを目指そうかとね？」

何故その土地の名前が出たのか分からないが、俺はいかなくちゃいけない場所だとは分かる

「ちようど、魔法学園通るじゃない。途中まで一緒に行かない？」
まあそれぐらいならね。

そして、俺達は旅の支度を始める・・・

俺は記憶を取り戻すため、リンはトリステイン魔法学院に行くために

side アレオス？

俺は明日の入学式の準備を終わらせ、軽くあくびをする。

精密かつ巨大な時計を見ると、そろそろ日付が変わりそうだ

「さてと・・・端的にごまかす方法としては、ゼロとか無能とかという設定にしといた方があとあと楽なんだけどなあ」

俺はそうばやきながらも、自分とルイズのことをうまく隠せる方法を考える。

というか、今気づいたのだが魔法が発動できない時点で、無知な連中は無能と騒ぎ立ててくれるんじゃないだろうか？

うわ時間を数秒損した

そんなことを考えながら、夜は更けてゆく

俺の夜は長い

第九話：学園編始動、反省は二の次に（後書き）

ところどころででてくる訳のわからない言葉は、私の日常会話で使っている言葉です。

大目に見なくていいので

おいおい作者何やってんだろって凸ってください

作者は罵られるのがすk・・・・・・・・

すいません遊びすぎました

あwヒロイン候補の存在忘れていた

そしてネット環境あっても入院生活は暇です

第十話：学園編のはずが・・・（前書き）

一人目の主人公…アレオス

二人目の主人公…神山 命

三人目の主人公（笑）…エンピール

第十話：学園編のはずが……

俺は二人分の荷物を、宿に置くと一息つく。

今俺達は、トリスティン魔法学院まで、後一日ほど歩けばつく距離まで来ている。

「なあリン」

俺は幼なじみ？の名前を呼ぶ。

「俺はちよっと、散歩がてら出かけるけど、どうする？」

リンはベッドに倒れ込んだまま動かない

いかないということか……

俺は軽く伸びをすると、宿の外に出る。

宿の外は何故か、少し騒がしく荒々しい雰囲気が漂っている。

村の人を捕まえて聞くと、どうやらオーク鬼がこの近辺に出るらしい。

リンに極力、神力を見せたくない俺としては先にかつとく方がいいだろうと思いい村を後にする。

side アリア

私は、家の都合でとある貴族との会食を行い入学式より前に入寮している組に乗り遅れる。

ラインバース男爵から、アレオスがもうすでにルイズと行ってしまっていることを聞かされて少し焦る。

もう、アレオス達については頃だろう。

ヴァリエール公爵家がライバルになるなんて、思っても見なかったもので、私は少し焦りを見せる。

「もっと速くできないの？」

「お嬢様、これが限界です」

確かに、これ以上出すとウマがへばってしまう

それでも、アレオスを盗られるとなると話は別なのだ。

オークが出るといふ御触れは知っていた。

けど少しだけなら大丈夫だろうという甘い考えで、オーク鬼の生息地域に土足で足を踏み入れる愚かな行為を犯してしまうのが間違えだった。

ウマが嘶きその場で止まる。

「

何かの耳をつくような咆哮が耳に嫌でも入ってくる。

「お嬢様、お逃げください」

逃げようと思っても、四方をオークで囲まれていて逃げられない。オークの腕にもたれたこん棒が私に向かって振り下ろされる。

私はそれをしっかりと眼でとらえ、これから起こるであろうことを理解し悲鳴を上げた。

その瞬間、強い風が吹き私の目の前に、真っ黒い少年が立っていた。

「間一髪ってところかな？」

少年はそうつぶやくと、私達の退路を切り開いてくれる

「さっさと逃げろ。アリア」

何故私の名前を知っているのだろうか？そういった疑問を持ちつつ、近くの村まで退避した。

side エル

しらみつぶしに、森の中を歩いている途中、突然悲鳴が聞こえる。

悲鳴が上がる↓多分オークに襲われている↓探す手間が省けた、俺ラッキーの図式が頭の中をぐるぐると回る。

「神力術式…気まぐれな風」

俺の周りに、馬車と老人、アリアが現われる。

オークはアリアに向かって、こん棒振りおろそうとしているところだった。

俺はそのこん棒を、片手で止めてつぶやく

「さっさと逃げろ、アリア」

俺が殺気をふりまくと、オークたちは少し止まる。

そのすきに、アリアは馬車に乗り、村の方へと向かって行った。

俺は目の前のオークたちをどう片付けようかと考える前に、さっきの少女の名前がわかったことに少し疑問を覚える。

相手はマントをしているところから、貴族だった……

俺が、元平民なら知るはずのないことだ。

考え事をしたせいか、殺気が緩んだのだろうオークは、今がチャンスとばかりにこん棒を振り下ろすが俺には当たらない

気まぐれな風の効果だが……こっちから触れると意識しない限り実態を持たない風となる。

さっきのこん棒を止めたのは、神力を腕に流していたからだ。

神力って便利だね？

等と考えつつ、俺は軽く深呼吸をする

「神力術式…隆起する大地」

とげのようにとがった大地が、相手を貫いていく

20ものオークたちの数は、一気に半分まで減った。

オークも、さっきの殺気といい攻撃があたりないことといい、半数が一撃でやられたことで、ようやく俺の異常性を理解したのか逃げ越しとなっているがもう遅い

それは戦闘というよりかは、殺戮

死という言葉が生易しく見える……ような地獄

俺が腕をふるうたびに、オークの手脚が一本一本切られてゆくだるま状態になって、はうことしかできないオークの腹に腕をねじ込むと悲鳴とも取れる咆哮があたりを埋め尽くす。

めり込んできた手から伝わる、オークの内蔵の感触は最低だった。生き残ったオーク達は、すでに足を切りとられているから逃げようにも逃げられない。

腕があるやつは、自殺しないやつはショック死していく

「ふははははは」

俺は笑い声をあげながら、死ぬことのできない哀れなオークの首

を狩りとった。

時間をおき、少し冷静になった俺は流石にやりすぎたと反省している。

眼の前にはバラバラにされた手脚と、グロッキーな肉袋& a m p, とげに足から脳天まで貫かれたオークがいた。

「はぁ神力術式…清めの水」

俺の周りに水が現れ、服についたオークの血を洗い流してくれる。

「神力術式…暖かい風」

暖かい風が吹き、俺の服が一瞬にしてかわいた

俺はそれを確認すると、村に向けて歩きだす。

ふてぶてしい表情で……

side リン

村の方が騒がしい、私は外に出るとボロボロの馬車が見えた

「オーク鬼が……ですって」

「少年が一人で？ むちゃだ」

「少年は生きてはいないだろうなあ」

「何も貴族さまを、かばうことはないだろうに……」

そんな会話を聞きつつ、エルの姿がみえないことに気づく

こんな時に、真っ先に野次馬来そうな性格したエルがいないということがおかしい

村長と話している、貴族のところへ無理やり行く

「貴方を助けた、少年はどんな感じでしたか？」

「え……」

気圧されたように、貴族が後ずさる

「ひたすらに全身が黒い」

私はそれだけ聞いて、村を飛び出そうとする

「爺や」

爺やと呼ばれた初老の老人に、つかまれて止められる

「はなして、行かないと」

なんかやっているといるうちに、村の外から真っ黒な少年が歩いてくる
「なにやってんだ？リン」

エルはそういうと、軽くあくびをする

side エル

なんなんだ？騒がしい

帰って来たと同時に、リンに抱きつかれ貴族……アリアにつ
かまってしまふ

「あのオークたちは？」

あゝそういや……剣も持ってなかったけ……

「倒したよ？」

俺は正直に話す

「「え」」

二人の声がはもる

「ア・貴族さんはともかくリンお前は、しっとるだろうに」

俺は少しため息をつく

「そういえば、よく竜狩ってくるとか言って、つの持って帰って来
たわね？」

アリアがそれに若干引いている

「私の名前を知っていたのはなんで？平民が知っているはずなのに」

「自分もどこで知ったか分からないんだ。記憶喪失ってやつでね？
知識以外の記憶がすべて消し飛んでんだ悪いけどその質問は答えら
れない」

アリアがショックを受けたようにうなだれる

「さてと……明日はやししリンは寝ろ。俺はそうだなあ」

軽くアリアを見る

リンは俺の言ったとおりに、宿に戻ってくれたので助かる

「あの馬車を直しますか……」

俺の夜は長そうだ・
・
・
・

第十話：学園編のはずが・・・（後書き）

ちよつと壊してみた

反省はしていない

でも後悔はしている（キリ

オリキャラのキャラつかめてないのは問題だよなあゝ

ちなみに今回、アリアの能力は発動しません

恐怖感情で、ドット以下になり下がるからです（キリリ

番外編く俺もハルケギニアで夢を見たいんだく（閲覧しないほうが）（前書き）

番外編の案もないし、自己満足なのを書いてみた。

（いつもじゃね？）

今回は本編になにも影響しません（キリ）

ちなみに今回出てくるアレオスはキャラ紹介の時です
ねんをおしますが、本編とは何一つ関係していません
飛ばすことをお勧めします。（だったら何故かいたし）

番外編く俺もハルケギニアで夢を見たいんだく（閲覧しないほうが）

俺は自宅でJ A V Aプログラミングをしていると、少し違和感を感ずる。

急いで振り向くと、そこには鏡のような銀色の物体が浮いていた。

「ふん」

鼻で息をすると、少し考えV C ++を立ち上げプロジェクトを作成し、E X Eを作る。

めんどくさいので手順を省略中

そのE X Eのショートカットを作り、書置きと名前を変えデスクトップに置いた。

「さて、あとやることは」

俺はP Cの電源を入れたままにして、俺は押し入れにしまわれている鞭という避難や旅行に出かけてもいいようにと荷造りしてある荷物を取り出す。

「行くか」

それらの荷物を持ったまま俺は、銀色の物体に突撃していった。出るとそこには大勢のマントを着た者たちが立っていて、それぞれ何やらけったいな生き物を連れている。

目の前に立つのはピンク色の長い髪を持つ少女。

俺は鞆を放り投げ、軽く息を吸う。

「はじめまして、貴女が私のマスターですか？」

俺は優しい声色で、もも色髪の少女に問いかける。

「あんた……誰？」

俺は肩まで伸ばした黒い髪を揺らし、クスクスと笑う。

「失礼、私は軍師^{ぐんし}。ただの駄文使いでございます。」

「平民よね？」

「ええ」

俺がうなずくと、あたりは騒ぎ始める。

「まさか、平民を呼び出すなんてね。」

ルイズ以外のすべての人が笑う、ルイズは悔しそうに唇をかみしめている。

俺はすつとルイズの隣に立つ。

「貴女は私の主になってくれますか？」

「誰が平民なんかを、ミスタ・コルベール私にもう一度『サモン・サーバント』を」

こっぴげは首を横にする。

「ミス・ヴァリエール、儀式は神聖なものだ好まないからといって再召喚は認められん。」

俺はそれを聞きながら、銀色の髪をもつ貴族に近づいていく。

「やあ、アレオス久しぶりだね？」

俺が紡ぐ物語の主人公に声をかける。

「何しに来た、軍師」

ふむ……何をしに来たか。

「なにも……ただ呼び出されたただだからなあ」

そう、何の因果か俺はこの世界に呼び出された。

アレオスというキャラクターを紡いだからかもしれないし、俺がサイトより適任だと判断されたかもしれないかもしれないし、なんというかファクターがありすぎてよくわからないんだよねあ。

「まあ俺が来たことで、困るのはアレだけだしなあ」

「いまなんていったあああああ」

頭を抱えて叫ぶアレを横目で見て笑う。

話を聞いていなかったからアレなんだがどうやら呪文詠唱まで住んでいたようで、いきなりキスをされる。

俺の左手が異常に痛くなる。

「ふん」

俺は鼻で笑うと、俺は左手をふるう。

「では、私のマスターを侮辱したもの達は前に出る。でなければ全員」

いきなり峰打ちが飛んでくる。

「やめねえか」

俺はそれをよけ、鞭で刀をつかみ敵の武器を奪った。

「まあいい、マスターもお望みではないようだから、私は引くよ」
そう言い残し、俺はルイズの少し後ろに立つ。

「次は俺か」

騒然としている中、アレオスが前に出てくる。

「んじゃまあ、来い」

俺の時と同じゲートが開き、中から黒髪の少女が出てくる。

「ほう影の姫君か。」

「アンタ、何を知っているの？」

俺は首を軽く縦に振る。

「少しね？」

だって俺が想像したキャラだもの。

「それより、マスター私の後ろへどうぞ」

そう言って、前に出る。

さばき切れなかった影の攻撃が俺の身を削ってゆく。

「ま・じ・め・に・や・ら・ん・かあゝ！」

俺は片手に魔力を集中し、一気に放つ。

「軍師貴様ゝ」

アレオスの叫ぶ声があたりに響いた。

ルイズの部屋に移動して、自己紹介タイム。

「先ほど言った通り、軍師です。こことは違う世界から来ました。
貴族の従者としての生活はは初めてですから、至らぬところがある
かもしれません、よろしく願います。」

俺は恭しく頭を下げる。

コンコンと扉をノックする音が聞こえる。

「開けて頂戴」

俺は扉を開ける。

「ルイズ、だまされ」

すぱーん、景気のいい音を立てて扉をしめる。

「それで、私ができることなのですが、何分争いのなかった世界から来たもので、戦闘力はありません。」

「さっきの攻撃は何よ……」

俺は涼しげな顔をする。

こうして、俺の従者っぽい生活が始まったわけだが、むろん数日で飽きるわけで……

「ひまだねえ」

そう、サイトのように講義に参加しない分、暇な時間が増える。

「キューー」

幼竜が空から降りてくる。

確か名をシルフィードとか言ったっけ？

「やあ、シルフィード。元気かい？」

「きゅい〜♪」

可愛らしい声でシルフィードが高らかに答えた。

「そういえば、明日は使い魔と戯れようということで休みか」

「きゅい、きゅいきゅい〜」

俺は苦笑いをする。

「シルフィードは大きさに建物に入れないからなあ〜。」

俺は少しシルフィードの頭をなでた後、どうしようか考える。

朝も何気なく過ごした後、昼からルイズは自室に引きこもってしまった。

仕方がないので、俺は一人で持ってきていたタバコを口にくわえる。

（＊本体は吸えません）

紫煙を漂わせながら、すこしばーつとしていると、怒号が起きる。どうやら、ギーシュが切れたようだ。

「君が香水を見つけないければ、こんなことにならなかったんだろう

が」

俺は振りかぶったギーシュの腕を受け止める。

「はいはい、それはてめえが二股かけてたせいだろ」

俺は少し、嗤いながらギーシュの手を握りつぶさんとする。

「とんだクズだぜ」

その言葉にカチンと来たのか、ギーシュは俺にバラを突き付ける。

「君に舐めというものをしてやろう」

「ギーシュやめろ、そいつはっち聞いていない」

アレオスがルイズを呼びに行った。

「場所はヴェストリの広場でいいのか？」

ギーシュはそれ以上何もいわずに、立ち去って行ってしまった。

「駄目です、貴族を本気で怒らせたら、貴方は・・・」

「ん？大丈夫だ。俺は貴族よりやべえ」

俺はうすくはったためつきをはがすと、にやりと笑う。

そして、進行方向からきたルイズをみる。

「やあ、マスター何か用かい？」

「何か用かい？じゃないわよ。あんた貴族に喧嘩を売るっていう意味を理解しているの？」

ルイズの剣幕に少し引く

「暇つぶしにちょうどいいし（ボソ）」

「うおおおおい、なにぼそっといってんだああああ。ギーシュ逃げろおおおお。」

アレオスがおかしくなったなあ。

俺はため息を吐きながら広場まで歩いていく。

「お前どうするつもりだ？」

「ん、俺の能力『駄文作成』を使わせてもらうさ。あと、使い魔の能力とかね？」

アレオスがため息を吐く。

ちなみに駄文作成とは、駄文を作るために主人公の能力をどんどん増やすことのできる能力である。

広場についた俺は、少し肩をまわす。

決闘だ決闘だと周りが騒がしくなってくる。

そうだなあゝ

「よろしい、ならば決闘だ。」

俺は凶悪な顔をする。

ギーシュは花卉を投げると、ゴーレムが現れる。

「そんなゴーレムで・・・っぷ」

ギーシュがぶち切れて無言でゴーレムをけしかけてきた。

「さてと、破」

俺は軽くゴーレムを殴ると、ゴーレムの右腕が吹き飛んだ。

んゝ意外と力加減がなあ。

俺は煙草を取り出すと、火をつける。

「じゃあこっちから行くぜ。我が力の前にひれ伏せ炎の精よ。焼き尽くせ、火炎放射ゝ」

間拔けな掛け声とともに、俺の手に持ったばこからすごい勢いで炎が噴出される。

ギーシュがさらに六体ものゴーレムを作りだした。

「おいおい、俺も作らないといけないじゃないか」

俺は手を一回たたくと、地面に手をつける。

すると、電気を伴った発光現象と共に地面がえぐれ、刀が現れた。それを手に取った瞬間、左手が光り力がみなぎってくる。

「行くぜ。」

俺は袈裟切りで一体目を切り裂くと、二体目は切り下ろし、三体目は差してから無理やり切り裂くといった素晴らしい倒し方をする。

「ギーシュ・・・ドンマイ」

アレオスが悲痛そうな声で呟いた。

「ギーシュ？俺様にすいませんでしたと言ったら許してやろう」

俺はゆっくりと残りの三体を片づけながらそうつぶやく。

「そうだ、もうネタがないみたいだし、10秒だけ考える時間をやろう」

俺は刀を落とすと、軽く口の端をゆがめる。

「はい、いゝち」

まずは一発目のボディীবロウ

「にゝ」

二発目

「さゝん」

三発目

「しゝ」

四発目

「ストップ、軍師」

俺の首筋に刀が突き付けられる。

「っちきੱちり十発殴ってから、気絶してやがるぜってやりたかったのにゝもういい」

なぜか懷に忍ばせてある杖を取り出す。

「はい、ワールドゲート」

銀色の何かが現れ俺はそれに片足を入れる。

「また遊びに来るからねゝ」

そういうと、現代日本へと俺は帰ってきた。

「何がしたかったんだ？」

とアレオスがつぶやいたらしい

つづかない

番外編く俺もハルケギニアで夢を見たいんだく（閲覧しないほうが）（後書き）

うん今回の話は没案にアレオスと主人公を俺に置き換えて、ことごとくカットしまくって、神からもらうはずの能力を『駄文作成』とか言うのに置き換えてみたりく最後を強制終了しました。

没案になった理由はく………駄神が出ないからですね（笑）
以上予告していた跡地へのおまけです

第十一話：アレとエル（前書き）

お久しぶりです。

自分の体に鞭打って頑張ってみましたb

さてと、今回は時間が空いたので、どういった話しの流れにしようかということを忘れてしまっていたので、いつもより駄文になってしまいました。

では復活して、いきなりな駄文をご堪能ください。

第十一話：アレとエル

お久しぶりです、アレオスです。
今日はアリアが来るそうなので……ここが修羅場とかしそうです。

どこかに逃げないとなあ

side エル

「馬車直しておいたぞ？」

俺は少しあくびをしながら伸びをした。

「へ？」

アリアの間抜けな声に、吹きそうになる。

「さてと……学院まで歩きで一日弱か……」

「貴方もなの？」

軽くうなづく。

「連れの……リンって言うんだけど、そいつがメイドとして働くことになってな。俺は記憶探しの旅のついでに、護衛でもしようかなってね。」

俺は苦笑いし、彼女を見つめる。

「やっぱり、どこか似ているのよね。アレオスに」

アレオス……その名前を聞いた瞬間に、激しい頭痛に襲われその場で倒れ込む。

「ちょっと」

アリアの心配そうな声。

頭に流れる断片的な映像が、それを遮る。

「爆炎」

そこにいたのは、銀色の髪をしたしょうねんだった。

俺はその意味がわからない。

「あ、死んだわ。俺」

そんな軽い言葉を残しながら、少年は炎で焼かれ酸素の薄くなった空間で、意識を飛ばしかけている。

「まったく、仕方ないね。お前が死ぬと、アレが働かなくなるから適当な場所に転送」

鎌を持った、全身真っ黒でローブみたいなフードをつけた服を着て、鎌を持っている青年が、死にかけの少年にかざすと少年の体は、どこかに消えてしまう。

そして……俺の映像もどこかへ飛んだところで切れた。

「悪い……ちょっと飛んでいた。」

今のは一体何だったのだろうか？

まさか、さっきのやつがアレオスだったのか？俺は……

「なあ、アリア。アレオスって、銀髪で赤目の」

「そうよ。」

やっぱりか、なら。

「そいつは今、どこにいる？」

「多分、学院の方にいると思うけど……」

なら、俺の行く先も決まったな

俺はワインを煽りながらにやりとする。

「昼間から……」

そんなアリアのつぶやきに、苦笑いで返す。

「しんどい時は、アルコールが一番だぜ？」

現代日本では、未成年の飲酒は違法なんだぜ？

ここは異世界だから、飲んでいても御咎めはないけど現代日本でやると相当注意が必要だ。

「どこの、中毒者よ。」

「まあとりあえずは、アレオスってやつに会いに行こうかな？」

カレーにスルーし、俺は宿に向かって歩き出す。

side アレオス

ふと一瞬、体に違和感を覚える。

たとえば、今までつながっていなかった神経が繋がったみたいな感覚。

まさかと思い、サーチして見ても本体の生体反応がわからなかった。

いったいこの違和感は、なんなのだろうか？

side エル

「いいのか？」

アリアはもちろんと言うと、俺に笑顔を返してくる。

「ただし、乗れるのはリンちゃんだけね？」

そう、荷物と一人だけ乗れるスペースをかしてもらえたのだ。

「別に荷物なかったら、すぐ着くし」

俺は早速馬車に荷物を積み込む作業をする。

その間に、貴族と平民の垣根を越えた友情が、アリアとリンのあいだにできてる気がするの、気のせいだよな？

「終わったぜ？」

しばらくして馬車がはしりはじめる。

俺はそれを確認すると、追いかけるように走り始めた。

遠ざかっていた馬車が、だんだんと見えてくる。

その馬車と俺は、並走し始めた。

「ねえ・・・エルっていつもあなの？」

そんな俺を見ていたのか、馬車の中から声が聞こえる。

「ええ、残念ながら。」

時間にして2時間がたったところだろうか？俺の体に変調が起きる
「な・・・」

俺はそのまますごい勢いで転び、地面をスライディングしていく
「あああああああああ」

闘いがフラッシュバックする。

これは、なんだ？

俺の記憶なのか？

俺は誰だ？

アレオスは何者だ？

そしてなぜ、俺は記憶を失った？

『プロ・・・グ・・・ラム・・・さ・・・が・・・せ』

プログラム？何だそれは

「エル・・・エル！！」

俺は体をゆすられている感覚で、意識を取り戻す。
今日はやけに、過去の？情報が頭をよぎるな

「大丈夫だ。」

俺はいたむ頭を押さえながら、立ち上がる。

「どこか打ったの？」

「ん？ああ打った傷じゃない」

多分あれは・・・

「記憶が何故か戻り始めているんだなあ・・・」
俺はしみじみと言う。

「ん・・・先に行つてくれ」

俺は軽く頭を抑え込みながら、近くの木に腰かける。

それを見た二人は、馬車で走り去ってしまった。

それから数分たったころだろうか？

頭の痛みも収まり、俺は歩き始める。

人の怒号が聞こえてくる。

俺は仕方なく、声のした方向へ行くと山賊らしき集団と茶髪で黒い服を着、刀を持った青年がいた。

「一人で大変そうだねえ」

山賊たちが、青年を囲んでいたので加勢することにする。

青年は隣に突然現れた俺に驚いたのか、目を丸くしていた。

「驚くのは後にしろ、まずはあいつ等を喰らうぞ？」

俺の腕が光り輝きはじめる。

「喰らえ」

光は膨張していき、ドラゴンの顔にと変わる。

「竜のアギト」

俺の腕が山賊たちの武器をことごとく喰らっていく。

「汝、望みを捨てよ。これから見る地獄は、生半可なものではないことを知れ」

俺の隣で、何やら青年は物騒なことをつぶやいている。

「おいおい……それって……」

「幻想的な絶望」

一気に、山賊たちは倒れ込む。

悲鳴をあげながら……

「久しぶりだな、親父。いろいろな時代を駆け巡った甲斐があったぜ。」

俺は目を見開く。

「未来の俺の息子か？」

そう聞くと、青年は少し考える。

「アンタ、名前は？」

「あゝ記憶を失ってからのでいいなら、俺はエンピールと言う。」

青年は何かを考えるそぶりをし、口を開く。

「地球、パソコン、プログラムと言う単語に覚えは？」

プログラムを探せ……
そこにすべてを置いてきた。

なんだ今のは……

「あるような……」

「そうか。」

やけにあっさりと、青年は答える。

「わりいな命。」

「「え？」」

俺と命の声が重なる。

なぜ、彼の名前を俺が知っている？

「やっぱりあんた……」

俺は苦笑いをする。

「自分のことがわからなくて、ふべんだよね」

「はは……俺は目的も果たしたし、元の時間軸に戻るとするよ。」

さっきの『神術…幻想的な絶望』は、神力を持つ存在にしか操れないはず。

師匠いわくそんな存在は、神か天使、そして俺みたいな特殊な人間だけだ……

「ああ、じゃあな」

俺は考えながら、命を見送った。

さて俺も行くか……

side 命

記憶は失ってはいたが、彼は俺の親父だ。

そうに違いないと確信していた。

なぜなら彼の姿は、俺を拾ってくれた時そのままの姿だから……

side エル

やっと、魔法学院についた俺は少しため息をつく。

「リン？仕える人間間違ってるだろ……」

リンとアリアの出迎えがあった。

「そんなこと言ったって……」

俺はいいわけを無視し、アリアに向く。

「で？アリアはなぜ？」

「私がいないと、アレオスに会えないでしょ？貴方、ここに努めている執事でもなんでもないのに」

俺は顔を真っ赤にしてそっぽを向くアリアをみて、脳裏にツンデレという言葉が浮かぶ。

ツンデレってなんだ？

「ありがとな。」

俺は少し微笑む。

「じゃあ行くか」

俺がそういうと、こっちよと言って歩き出したアリアの後ろについて行く。

ついた先は寮の一室だった。

「流石貴族さまだ……広いねえ」

「無駄に装飾品に凝ってるわね？休日は王都に出るかしか、選択肢がないのに」

俺はにやりとする。

「学園内部で、イチャイチャとか？」

俺は飛んでくる突きを、華麗に避ける。

着地した瞬間、杖を構えられたので大人しくしておくことにしておく

「ごめんなさい、このようなことは今後一切、いいません。」
「便利だよねーすん。」

「どっちなのよ。」

あきれながら、アリアはとあるドアをノックする。

「どうぞ」

アリアの顔があやしく光り、ドアを勢いよく開け飛び込んでいった。

「アレオス」

「な、アリア……ぎゃ」

うん……中に入りたくねえ。

なにが起こっているのか分からない分、特にだ。

「ちよつとまで、ぐふ。ちょ……ゲホゲホ。にゃあああああ
ああ」

あ、壊れた。

「ふう、もういいよ。」

俺は室内に入ると、つやつやのアリアとやつれたアレオスがいた。

「な……」

アレオスは、俺を見た瞬間に眼を見開く。

「お前は誰だ？」

アレオスの言葉に、俺はにやりと笑う。

「さあ誰だろうね？」

アレオスのにらみがきつくなり、俺を射抜く。

「エル、なにを言っているの？」

アリアが不審そうな顔で俺を見る。

「とりあえず。よろしく」

俺がアレオスの手を握ると、俺達二人のあいだに電流が流れたような感覚がし……二人とも倒れた。

ここは？

「俺の意識と、お前の意識が繋がったらしいな」
このこえは、アレオスか。

「ああ、まさかだとは思うけど……ここはお前の中か。」
ん？どうということだ？

「お前は、言葉を口に出していないだろ？」

そういえばそうだな。

「そして、この場所は俺が昔眠っていた精神世界」
「そうなのか？　どういふことか分からないけど。」

「・・・本当に、憶えていないのか？」
「なにをだ？」

「自分の名前だよ。」

「お前知っているのか？」

「アレオス、お前の名前だよ。」

「俺がアレオス？　じゃああんたは？」

「俺はアンタが作った身代わりだよ？　プログラマーさんよ。」

勢いよく目を開ける。

「今日は、俺の部屋に泊って行けよ」

同じく目を開けた俺の分身がそういった。

「なにがおこったか分からないアリアはきよろきよろしている。」
「そうするよ。」

その日の夜、俺は・・・アレオスに戻った。

エルを分身に任せて・・・

第十一話：アレとエル（後書き）

話パートが多いですね

反省点の一つです。

ちなみに前話のスペースで書いたお知らせ文なのですが番外編にさし変えようと思います。

そのため、しばらくはあのまま放置します。

では、更新ペースが遅いとは思いますが軍師復活です。

第十二話：召喚・・・どうしてこうなった（前書き）

うん、相変わらず駄文なのだあゝ

第十二話：召喚・・・どうしてこうなった

トリスティン魔法学院での生活も、一年を過ぎたころつまりは俺が、二年になったときには俺とルイズにはゼロの称号が付けられていた。

「ゼロのルイズはだめです。」

まじめに聞く気もないので、寝ていたらそんな声が聞こえる。

「～やります」

ルイズが意地でやろうとしてる。

俺は眠たいのだが、このまま寝ると巻き込まれるので何気に外に出ようとしているタバサに続いて外に出る。

「貴方はいなくて大丈夫なの？」

そう声をかけられた、タバサが人に興味を持つのは珍しいな・・・

「俺はゼロのアレオスだから、身を守る方法がないし、ルイズにつきあう義理もない」

俺は苦笑いしながらそういうと、嘘とタバサがつぶやく

「実は心配しているってか？やさしいな、タバサは」

俺がにっこりとほほ笑むと、タバサは顔を赤くする。

「貴方は努力している人を、笑わないはず。」

少し目を細めると、何も言わずその場から立ち去った。

学園の端なぜか森みたいになっている地区がある。

俺はそこに足を踏み入れると、首筋に刀をあてられた。

「やあエル」

俺はエルに対してあいさつをすると、刀がゆっくりと下げられる。

「やあアレ」

なぜか二人とも、似たような挨拶だったりする。

「そっちはどうだ？」

「歪みの情報が入っているよ？」

あいつ、やっぱり生きてやがったかと思いき笑いをする。

「調べている最中に、接触をしようとしてきた組織があったから会ってみる予定だ。」

組織？身に覚えがないな……

「どうやら、ミコトもこっちに来ているみたいだしね。」

「俺も、記憶ない時に逢ったよ。」

「駄神との連絡とれないのか？」

俺は少しため息を吐くと、空を見上げる。

「あいつも忙しいんだろうさ。」

そのころ天界では……

「なあ死神さん？ちよつと息抜きしなきゃ死んでしまうんだけど」

「お前、不老不死だろ？」

駄神は少し倒れる。

「ここ数年、仕事しっぱなしだよ俺。」

「サボるやつが悪い」

人口予算案に、転生問題……あゝ

「んじゃ、代わりにアレオスの様子見てきてよ。」

「うちの天使を監視につけてある。俺がいないとサボるだろ？」

「いゝやゝ」

というやり取りがあったりなかったり……

向こうは、向こうで忙しそう（笑）だな。

「んじゃまあ、ミコトの搜索と例の組織との接触を行ってくれ。」

俺はそういうと、軽く笑う。

「わかった、そっちもあんまりアリア達を心配させるなよ？本体は不器用なんだから」

じゃかましいわ。

「つうか、俺から生まれた俺は不器用じゃないの？ねえねえないの？」

「うるせえ」

そういうと、エルはどこかに走り去ってしまう。

さあて、明日はいよいよ使い魔召喚の儀式なんだよねえ。

どんな厨二病を発現させようか・・・
オラ、ワクワクしてきたぞ。

「ん？ギーシュ、今晚もデートかい？」

俺は一年生であろう少女をみる。

少女は顔を赤くして俯いた。

「まったくこんなかわいらしいお嬢さんを、どこで引っ掛けてきたんだか」

「べ・・・べつにアレには関係ないだろ？」

俺は口の端を上げる

「一応、俺も男だぜえ」

「の割には、がつついていっているフリをしているだけって？」

「うち、ギーシュはなまじ長いこと交流があるからそこらへんのことを理解していやがったか」

「はは、馬に蹴られて本性あばかれるまえに、逃げる」

俺はそういうと夜の学園内を走りだした。

翌日の朝まで考えていたわけだが・・・

思い浮かばないねえ」

「あっそのこと始祖さんでも、罵倒しながら召喚の言葉にしようかなあ」

「ん？どうする？」

俺はルイズに話しかける。

「なにがよ。」

なんかルイズのテンションが低いなあ」

「お前、自分なんて・・・と思っているんじゃないか？」

タバサがなぜかこっちを見ているが気にしない。

「お前の努力は必ず実るから、そのない胸ぐらばふああああ」

俺は三回転半周りそのまま自由落下の原理で殴り飛ばされる
「にゅっふ」

俺は何事もなかったように立ち上がると、にっこりと笑う

「その息で行って来い、ほらお前で最後だぞ？（＊まだ俺もやってません）」

「アレ・・・」

それを聞いてか聞かずか、ギーシュがため息をつく

「ん？」

「君もまだだろう」

俺は目をそらし、口笛を吹く

横目でルイズが召喚の言葉を終えたのを確認しぼそりと漏らす。

「ようこそ、ハルケギニアへ。歓迎するよ、平賀 才人」

ギーシュは顔をしかめ首をかしげている。

「平民？」

俺はそんなことをつぶやくルイズの横を通り過ぎ、サイトを引き起こす。

「”やあ、はじめまして”」

「”はじめまして、ここはどこなんだ？何を言っているか言葉もわからないし”」

サイトは困惑した声で、俺に問いかける。

「”ここは、君の世界という異世界だ。言葉が通じないのは、言語文化が全く異なっているからなんだ”」

「”あれ？じゃあなんであんたは？”」

「”少々、事情があってね？今は時間がないからまた後日というところで”」

とりあえずまあ、ルイズを引き込んでサイトとキスをさせる。

「はいよく痛いのは我慢しろ。こんな美少女とキスできたんだ。代価ぐらい払えよ」

俺はきつつい言葉をサイトにかけると、サイトは気絶した。

「さて、次は俺か・・・」

俺はゆっくりと立ち上がると、逃げようとするが・・・

「やっぱだめですかい」

ハゲに捕まった。

「んじゃ・・・」

俺が息を吸うと、あたりがしんと静まる。

俺と同じゼロのルイズが平民を呼び出したことで、俺の召喚する奴が気になっているみたいだ。

「来いよ。俺はここにいる。スケエエエエエエ○」

ゲートが開き、ゲートの奥から獣の咆哮が聞こえ始める。

なに？　こんなんで開くの？

「ぎゅあああああ」

中から出てきたのは、黒いストレートの髪をした少女だった。

あれ？　獣の鳴き声・・・

数人の貴族が悲鳴を上げる、どうやら少女の手から血が滴り落ちていた。

「誰じゃ？　妾を暗き世界から連れ出した者は。」

俺は腕を組んだまま、少女をみる。

「俺だ。暗き闇の姫様？」

「ほう・・・否定する気はないのじゃが、妾は影璃エイリという。」

「俺はアレオスだ。」

お互い名を交わしあう。

「なぜ、妾を詠んだ？」

「使い魔召喚の儀式でなあ。たまたま、俺にふさわしい使い魔が前だったのさ」

ふむと、少女は鼻を鳴らす。

「妾を使い魔にしたいというならば、妾を屈服させてみよ。」

俺は口の端を上げると、腰に差していた刀を抜く。

影が槍の形となり、質量を伴い俺を貫こうとし飛んでくる。

俺はそれをいなしながらかわし、刀を構えなおし影璃に向けた。

「ほう、使い魔というから貧弱な魔法使いと思うておったが・・・なかなかやりおる。」

「おほめいただきで、ありがたく思うよ。」

そうひにくげにいうと、体中に神力をまわし影璃に接近する。

「この範囲は妾の間合いじゃ」

俺の体を影璃から延びた影が包み込んだ。

「っち、プログラム」

保存していた武器プログラムそのソースコードを一斉開放する。

「踊り狂え、我が剣達よ。」

昔組んだ空中で剣を自在に動かすプログラムを走らせる・

その瞬間、俺にめがけて質量化した影がとげのように襲いかかった。

その影は例外もなく、すべて無数の剣によって防がれた。

数千にも及ぶ影のとげが、攻撃をやめると一気に影が引き、土煙が上がる。

「流石は・・・驚いたよ。」

「今ので、なぜ無事でいられる。」

影璃の顔が驚きで埋め尽くされ、俺はそれを嗤う。

「彼らを見て、俺の力量は測れないさ。なんせ・・・」

俺は神力で真っ白な羽を形作る。

「幾分か前に人間をやめたからね。」

「光の・・・神族か！！面白い」

影が幾重にも重なり、まるで俺が手にしている刀のような形をとる。

影璃はそれを振りかぶり、俺に切りかかってくるが、俺はそれを片手で受け止めた。

「ふむ、やはりか。」

「だねえ」

「「力が拮抗してる（おる）」」

光は闇に闇は光に勝つがゆえに矛盾が起きる。

その矛盾はやがて光は闇に勝てず、闇は光に勝てないといった真理に収縮する。

「ならば大技で決着を受けるとしうか」

俺はゆっくりうなづく

「我、まばゆい光より生まれ出で」

「我、漆黒の闇より生まれ出で」

「眼前の愚者を」

「眼前の聖者を」

「「葬り去らん」」

「ホーリーヘブン」「カオスヘル」

光と闇がぶつかり合い、互いに相殺してゆく

初めは影が押していたのだが、光が徐々に強くなり始め押し返し始めた。

あのさ……いま思っただけど、なんで使い魔召喚でバトってるの？

明らか、おかしいだろこの状況……と考えているうちに光と闇の奔流が消え静寂が訪れた。

見た感じどちらにも、傷がないと思った瞬間、いきなり影璃が笑い始めた。

「妾の負けじゃ」

つーと、影璃の腕から血が滴り落ちてくる。

「妾の身は主がために……」

俺はコントラクトサーバントを終わらせると、あたりがざわついていすることに気づく

「やば、逃げるぞ影璃」

影璃は承知と呟くと、黒い鳥……カラスに変化する。

俺は翼を出しっぱなしなので、そのまま飛んで逃げることにした。

「なんだったの？今の」

アリアの言葉に全員がさあと答えたらしいのだが、俺とは関係ないこと？なので知らん。

第十二話：召喚・・・どうしてこうなった（後書き）

実はこの第十二話、二つあるんです。

というのもP Cブレイクしたときに消えたと思われていた十二話と十五話が奇跡的にU S Bにコピーが残っていたのです。

でも、せっかく書き直したからそっちを採用。

書き直したことにより十三話と矛盾がががが

まあそれはいつものことなので置いて（マテ）

では、みなさん次回の投稿までノシ

第十三話：決闘（前書き）

全然決闘していません

第十三話：決闘

「ん……」

神力の使い過ぎで、体に限界が来てしまったのか、サイトのドタバタ逃走劇を見逃してしまった。

「ようやく起きたか、主よ。」

俺は窓辺に止まっているカラスをみる。

「そーいやお前の処遇をどうしようか……一応、女の子だしなあ。」

しんどかったので、そのままだったが……

「妾はべつにかまわんぞ？」

あー俺が構うんですけど……

「さてと……飯行きますか」

俺はそういうと、厨房に向けて歩き出す。
なぜかって？

俺はルイズじゃあるまいし、人間？にスープとパンだけで過ごせ
て言うつもりは毛頭ない。

下手するとアレ、うちの領地の平民ですらないような食事なの
だ。

まあ、親父にエルが平民に対する処遇を見直してくれといったら
しいのだけど……

「やつほー、マルトーのおやつさんいる？」

「貴族のお坊ちゃんが何の用でい」

マルトーは魔法学院で働いているにもかかわらず、貴族嫌いな
だ。

「影璃、元の姿に戻れ」

俺の隣に漆黒の姿の白い透き通る肌をした少女が現れる。

「金は払うから、こいつになんか作ってやってくれないか？他の使
い魔と同じ扱いは、俺にはできないからさ」

俺がそういと、マルトーは目を見開く。

「貴族は皆偉そうにしているかと思ったが、気に入った。作ってやる」

がははという笑い声が聞こえてきそうなほど豪快な声に、俺は安心する。

「あんたがいい人で助かったよ。それとパンをくれないか？少し急ぎの用があるのでね？」

俺はパンを受け取ると、影璃を置いて空に飛び立った……

side 影璃

流石に、主の言葉に妾は驚いた。

今まで、妾を屈服させ従者としてきた主達と全くと言っていいほどに違うのだ。

妾を人間扱いしてくれたのは、あの人以来じゃったからのう……

懐かしさで、目から涙が落ちる。

「いい奴だったな。どこの貴族だ？」

「ラインバースというところらしいです。」

一人のメイドがマルトーと呼ばれた人物にこたえる。

「道理で……」

何か一人で納得しておるのう……

「貴女がアレの使い魔さんね？私はリンっていうの、よろしくね？」

「妾は影璃じゃ。よろしくたのむ」

リンは主のことを知っておるのか？

「アレは？」

「主なら、用事があると言ってパンをかじりながらどっかに言ってしまったぞ？」

side アレオス

「我が名において、世界に命じる。彼の者のもとに我を連れて行け」

俺が一瞬にして消え、どこかわからない場所に飛び出す。

そこには、エルと俺のもとの世界の騎士の格好をした青年、そしてミコトがいた。

「やあはじめまして、私がプログラマーだ。」

威圧感を出しながら、一歩前に踏み出す。

「久しぶりだな？ミコト」

ミコトは驚きに目を見張る、それも当然だろうな……
なんてたった、エルを俺だと思い込んでいるみたいだし。

「では、解り合おうか？」

俺がそういうと、騎士がたらこ唇をゆがませる。

「では、私から。私は『神の代行者』という組織に属している剣士だ。」

「ほう、大方は理解した。神が残した予言だな？」

「そうだ」

実は、こいつらについての情報は一年間で大方集め終わっているのだ。

なんせ、転生者が虚無を使い『歪み』を滅ぼし、王として君臨するという予言を信仰している組織なので、異端者として情報が豊富に流れ込んで来る。

「俺は……」

ミコトが口を開こうとする。

「お前の事情は大体わかるさ、大方あの駄神に俺が生きていると聞かされ会いに来たんだろうに……」

俺は少しため息をつく。

「ったく……『神の代行者』。『歪み』を消滅させるまで力を貸す。俺に出来ることはそれだけだ。それとミコト、しばらくはエルと行動を共にしてくれないか？」

俺の言葉にミコトはうなずき、エルのそばに立つ。

「以上だ。」

俺は短く告げると、その場から転移した。

何しに俺は言っただろうか？
さあ？（作者）

小会議を終え、俺は魔法学園に戻るとちょうどサイトとギーシュの決闘だった。

「あれ？ 全くどこに行ってたのよ。」

アリアが俺のほうを向き、怒鳴る。

俺はどこからともなく出した瓶のふたを開けると、内容物をあおる。

俗に言うラッパ飲みである、ワインのだが・・・

「んで？ サイトが二股暴いて、ギーシュが逆切れなうってところか？」

「あたりよ。」

俺はため息をつく。

あいつは妙にプライドが高いからなあ、ヘタレのくせに。

俺は仕方なく、サイト達に近付いていく

「アレ、僕を止めに来たのかい？」

俺は口の端をゆがめて、嗤う。

「止める気はないよ。サイト君、手加減ぐらいはしてあげなよ？」

俺はそう、サイトに言い聞かす。

「な・・・彼は平民だぞ？」

ギーシュは驚きを隠せない様子で俺に言う。

「うちの使い魔筆頭に、普通の人間が使い魔になるとでも？」

俺はそれだけ言って、少し離れる。

「アレ」

ルイズが叫び声をあげる。

「貴方、止めるために行ったんじゃないの？」

「よく見ておいてやれよ？ アレが・・・お前の使い魔だ」

ギーシュの出したゴーレムに腹を殴られ、蹴られ顔をけり上げられボロボロになっているサイトの姿があった。

「……前言撤回」

俺はため息をつく、声を張り上げる。

「ギーシュ、それぐらいにして謝り自分を下等な生き物と認めるかどうか聞いてみれば？」

俺の言葉に、周りの貴族たちがざわめく。

有事の際には、王より平民を守るとまで言われているラインバースの者が平民を下等生物と言ったからなのだろう。

「ふん、アレに免じて謝れば許してやる。」

俺は少しにやりとして、刀を投げサイトの目の前に突き刺す。

「追加で、謝る気がないんだったら、その刀を手にとるといいよ？」

俺はニヤニヤしながら、腕を組む。

ルイズがひっきりなしに説得しようとしているようだが、無駄だ。

「下げたくない頭は」

「「下げられねえ」」

俺とサイトの言葉がリンクする。

サイトは刀を抜き放つと、迫ってきたゴーレムをたたき切る。

一応、刀での斬鉄は師範代クラスなんだけどなあ……しかも、

あの厚さは……

「ふむ……流石は使い魔になれるだけのことはある」

俺は顎をなでながら、太刀筋などをじっくりと観察してゆく

すばやく振られた刀には一切の無駄がなく、斬線をとらえ刃をかけさせないように切っている。

しかもだが、本人は全く無意識にこの行動をとっている……

「俺の敵だなあの力は……」

早々に対処の方法を……

そんなことを考えているうちに、刃はギーシュの首元にあてられる。

「アリア」

「ん？」

「サイトを俺の部屋に運ぶ準備をしておいてくれ」

俺はそういうと、サイトのほうに歩いていく

「この刀はなんだ？もった瞬間からだが軽く・・・ああ、それは君の力だよ。この刀は普通の刀さ。」

俺が刀を受け取り、サイトが手を離れた瞬間、ゆっくりとサイトの体が傾き、ルイズの上に倒れこんだ。

「まるでこうなることが知っていたみたいね？」

神力を流しサイトを強制治癒させ終えた俺に、アリアが声をかける。

「あゝどうだろうなあゝ」

俺は目をそらす。

「別にいいけど・・・一人で抱え込んでないで、少しは私たちを頼ってくれても・・・」

さびしそうなアリアに微笑むと、俺は頭をなでた。

俺もさびしそうな顔をしながら・・・

第十四話：王都にいこう（前書き）

駄文です（キリ

しかも、原作の日程をかなりはしょって歪ましています。
はしょりすぎはいけないなあ

次からは頑張る

第十四話：王都にいら

俺はサイトが目覚めてから、数日がたったところに彼を人気のないところに呼び出した。

「何か用か？」

俺は少し、苦笑いをする。

「君には言っておかないといけないと思ってね？」

俺は珍しくあせているのだ。

これからのことを考えて動かないといけない、あの少女じゃない『歪み』も観測され始めているし……

「まず、俺はこの世界の人間であり、この世界の人間でない。」

これだけ言っても、理解はできないだろう。

「地球からの転生者それが、この俺だ。」

「そんな気はしてたけど……あり得るのか？」

神様のことは伏せておいたほうがいいな。

「俺がその事例だ。これは憶測だが、前世の魂は君より先の未来を生きていたりする。」

地球と同じ名前の世界という説も考えられるのだけど、ここは先延ばしにしておく。

「ということは、こっちと地球じゃ時の流れは違うってことか？」

うーん、そうだとはいえにくいんだよなあ。

「そうだとしたら、俺はお前の世界の未来から来た事にはならない。まあ大方、俺が過去に飛ばされた理由がつかめつつあるのだけだね？」

嘘ではない、嘘ではないからこそ俺は……

「まあとりあえず、俺の身の上話はこんなところだ。質問は？」

「あの刀……日本刀だったよな？アレがここにあるってことは、お前は俺が元の世界に戻るすべを知っているのか？」

なんだ？このサイト、馬鹿じゃない。

「ないことはないが・・・今はまだ、普通の奴は誰も使えない魔法だからな。」

たぶん、教皇ぐらいしか使えないだろうからなあ。

「使える人間がいると？」

「いるけどその場合、お前もルイズも宗教の象徴、戦争の道具として扱われる。」

サイトが息をのむ。

大方、戦争というものを知らないのだろう。

俺も知らないままでいたかったのだが。

「俺はそいつが大っきらいでね？できれば顔面を殴り飛ばして、無神論をくどくど語ってやりたいくらいだよ。」

あの生き方には賛同するけど、どうにも好きになれない。

完全に同族嫌悪です。

「ハハハ」

サイトが力ない笑みを浮かべる。

「そうだ、こっちに來た祝い？として剣を買ってやるよ。今度の虚無の日、王都へいこう」

それから、サイトの周りが騒がしくなり近づいたらルイズの怒りが飛び火するので、おとなしく部屋で本を読んでいると扉をノックする音が聞こえる。

「どうぞ？」

俺は扉を開けた人物を見て少し驚いた。

「どうした、タバサ」

「貴方に聞きたいことがある。」

俺は少しため息をつく。

「却下、俺はそんなにやさしくはない」

ここ最近、タバサが俺をやさしいと錯覚しているようだが、全然お門違いだ。

「光と影について教えて」

明確に却下したのに、俺に向けてそのようなことをいうか

「教えたところで、エルフにさえ使えないし、俺にメリットがあるとも思えない。」

そう冷たく言い放つと、タバサは俺に杖を向ける。

「何をしてる？ 決闘や明確な意思で傷つけることは禁止されていたはずだが、何を焦ってる？」

こいつは、前世の俺なんだ。

ただ、焦りと怒りの感情が先行してしまう。

無表情に見えるのは、こいつがその唯一の感情さえも抑え込んでいるせいなのだろう。

この状況をみる限りでわな。

「とある世界に、理想を抱いた少年がいましたとき。彼には助けたいものがあった。」

「なにを」

俺はタバサに微笑む。

「それがゆえに、彼は無茶なことをし周りに敵を作ってしまった。

いつの日か、彼の守りたかった者達が惨殺されていたそうだ。」

そう、これが俺の前世、偽善を行うために悪を行使しその結末のために大切なものを失った。

目から涙がこぼれる。

「急ぎすぎでは、ことを仕損じるぞ、タバサ。」

なんで、こんなことを言っているんだろうなあ。

全く因果だぜ。

どこからともなく、鞭の音とサイトの悲鳴が聞こえる。

「その人はその後・・・」

「ん？ 名も知らない少年を助けて、死んでしまったよ？」

そして俺がいる、まあ今の心情としては護る気もさらさらないんだけどね？

しょんぼりと落ち込むタバサを見て、俺はいつの間にか頭をなでていた。

「まあ、俺のほうが落ち着いたら聞いてやるよ。それまで待つとけ」
つくづく俺も甘いなと思いつながら、腰につけっぱなしにしていた
刀を置く。

「変わった形の刀杖」

そうタバサがつぶやく。

俺は少し苦笑いして、外を見上げた。

虚無の日になり、俺はにやりと空を見上げる。

快晴だ~~~~~

「ってなんでルイズとアリアもいるんだ？」

おかしい、俺はサイトだけ呼んだはずなのにこの最凶コンビが付
いてくるなんて。

「私はその馬鹿犬が粗相をしないようにについて行くだけなんだか
らね。べ・・・べつに・・・」

「アレが妾に逢いに行くと、ギーシュから聞いたから監視のために
ね♪」

ルイズはもうかわいいなあ・・・

それに比べてアリアは・・・

「おい、アリア今だれに聞いたつつった」

「ギーシュ」

OK、あいつに俺に逆らう気が起きなくなるまでの恐怖を与えて
ある。

俺の魔眼が火を吹くぜ

「サンキューフフ・・・フフフ」

「笑い方が怖いぞ」

サイトがドン引きしている。

「はい、馬の頭数が実は足りませ・・・」

「そんなこともあるかと、馬車を用意しておいたよ」

「はは、アリアさんはなんでこんないらぬ気をまわすかなあ
「何とかならないのか？」」

「あきらめろ、アリアが絡んだ時点で俺の行動パターンすべてつぶされたに等しい」

俺たちはがっくりとうなだれる。

キングクリムゾン

ぐったりして、馬車から降りる男たち。

「サイト……」

「なんだ？」

俺はさめざめと泣きながら、サイトをみる。

「強く生きよう」

「ああ」

ここに、異世界同盟が結ばれた。

などと馬鹿な話をしているあいだに、メインストリートに入る。

「狭いなあ」

はじめてきたサイトにとっては、狭く感じるだろうな？日本が日本だし

「何言ってるの広いじゃない、ここがメインストリートなのよ？」

「サイト文明レベルの違いだ。」

俺たちはあきれながらそういう。

「文明レベル？」

アリア、そこは聞き流せ。

「ん？いやこいつの服を見て、何とも思わないか？こっちの布より軽く温かく、そして丈夫だ。ということは、ここよりはるかに技術力が高い世界から来たと推測されるわけだ。」

「ロバアル・カリイエ？」

東方か……言ったことがないからわからないが……

「たぶん無理だ。エルフの技術……おっとこれは禁則されてたな」
俺の言葉に彼女たちが身構える。

「エルフ？」

「ああ、そういう種族がいるんだ。恐ろしいとされているね？」

「恐ろしいのよ。現実……」

俺は少しため息を吐く。

「現実にしたことがあるのかよ？」

まあ異端審問にかけられても、おかしくはないのだが俺は続ける。
「むやみやたらに怖がるから怖いんだ。」

「そういうものなのか？」

まあ俺たちには、異世界人の考え方なんて・・・あ、俺はわかるか。

「ルイズこの人に何言っても無駄よ。この人、怖いもの知らずだから。たまに、遊びに言ってくるとか言って成体の竜狩ってくるぐらいだから」

リアルモンスターハンターってね？あ、遊ぶなってか？

つうか、エルの奴そんなことしてたのかよ。

あいつには虚無があったとはいえ、まだ覚醒していないはずだしなあ。

刀にも刃こぼれはなかった・・・どういうことだ？

「怖いもの知らずってひどくね？俺にも怖いものぐらいあるよ」

「へえ何？」

ルイズが聞いてきたので俺はにやりとしながら、はっきりと断る

「アリアがキレた時」

その時、憲兵達を驚かすほどのカッタートルネードがおこったのはまた別のお話。

ボロボロになりながら、小汚い路地にある武器屋に入っていく

「貴族様がこれらなんて珍しい。」

かなり俺たちの表情をうかがいながら、商いをする店主が出てきてため息が漏れる。

「ゆっくり見させてもらうよ。あと、ここでオーダーメイドとかできるか？」

「はい、できますが。」

俺は日本刀を取り出し、店主に見せる。

これの少し短目なのを作ってくれ。

「わかりやした。」

俺は軽く笑い、いろいろな剣を見ていく。

んゝいいのがないなあ

「この金ぴかのかっけえゝ」

サイトが本筋の通りにあの金ぴかな何かを指さす。

「お目が高、これは彼の有名な・・・」

「あれは実用性皆無の儀式剣だ。」

俺は見向きもしないで、そうつぶやいた。

「ん？」

俺はそうつぶやくと、樽の中に固められ放置されていた一本の剣を手に取る。

「こいつは・・・」

俺は剣を抜く、さびだらけの刀身だが間違いはない。

「ほう、貴族のもやしっ子と思っていたが、お前さん呼吸の仕方、剣の持ち方どれも達人級だ。気に入った、お前さん「君を使うのは彼だよ？」」

俺はサイトに持たせる。

「おでれーた、使い手か。なるほど・・・」

「んじゃ店主これくれ」

「いいんですか？そんなボロで。」

俺は笑う。

「デルフリンガーがボロなら、俺の刀なんかゴミだぜ？」

「お前さんなんでおれの名前を知っている。」

俺はデルフと刀を見比べる。

ごめんよ刀、ゴミとか言っで・・・

「まあとりあえず金貨500枚だ。」

「へえですが」

軽く睨みつけると、店主は何も言わなくなる。

「さてと、サイト、ルイズ、アリア。俺の金で何か食うか。そこに

いる二人もね？」
タバサとキュルケも回収しないとね？

第十四話：王都にいろいろ（後書き）

今思うと、前世の記憶は伏線ですらなかったのに、伏線ぽくなってしまった・・・

そして最近、魔眼設定入れたのに全く使わなくなってるし・・・魔眼の使い道を考えないと

まあいいや。

ようやくバトルできるぜ次回予告 サイト争奪せ・・・あれ？なくなっただけ？

ちなみに次回はかなり短くそしてオリ主とルイズ達は出てきません

第十五話：創造神が見ている（前書き）

かなり短く

不評な創造神さんが出てきます。

番外にしようかな？と考えていた奴なんで

おっしゃ俺は見るぜっていう方のみ見てください。

注意書きは以上です。

第十五話：創造神が見ている

「あんた私を呼び出したのは。」

暗闇の中で、フードをかぶった女性がもう一人の女性に話しかけている。

「そうだよ。土くれのフーケ」

もう一人の女性は、ボーイッシュな声でそうつぶやいた。

「君に契約を持ちかけに来たんだ。呼び方は『歪み』でいいから」
歪みは闇の中でほくそ笑むと、見えないはずのフーケを見えているようにふるまう。

実際には、見えているわけなのだけど

「契約？」

「君は孤児を守るために、泥棒をしているようだね？」

フーケの動揺が、手に取るように分かり歪みはさらに晒し始める
「そして、貴女は今、破壊の杖を狙っているが、扉や外壁が丈夫で抜けることができない」

「その通りさ」

いきなり襲いかかってきたゴーレムのこぶしを歪みはいともたやすく受け止めた。

「ひどいなあ、僕はただ貴女のお手伝いがしたいだけなのに。」

ゴーレムをはじき、少し距離を置くと歪みのこぶしが光り始める。
その光は鈍く輝き、辺りを照らす。

「今からやることを見ていてください。」

歪みがそうつぶやくとゴーレムに殴りかかる。

こぶしがあったった瞬間、ゴーレムはまるで力を無くしたかのよう
に倒れこみ、ただの土くれへと戻ってゆく。

「なんだい、この魔法は」

「これは魔法じゃないですよ？魔法を歪ませただけです。」
そういうと、歪みは土くれに触れる。

その瞬間、ゴーレムが再構築されてゆく。

「明かりをつけましょうか」

そういった瞬間、あたりが照らし出される。

照らし出されたゴーレムは、フーケの予想と一変していた。

「何と禍々しい。」

「これが魔法を歪ませた結果だよ？ 貴女に受け入れる気があるのかな？」

フーケはまるでとりつかれたように、ゴーレムを見上げていた。

「気に入ってもらえてうれしいよ、マチルダ・オブ・サウスゴータ」
本名を呼ばれていないところに気づいていないのを見ると、歪みは笑い転げそうになる。

「あゝあ、早くものまれちゃったか。まあ計画に変わらないから、いいけどね？」

そうつぶやいた瞬間、フーケははっとし歪みをみる。

「契約するわ」

まるで、そのことが決定事項だったかのように歪みは彼女の体に触れる。

その契約はまるで快樂、フーケのあえぎ声が闇を切り裂きまるで、それをもっと欲するように聞こえる。

それを聞き歪みは送る歪みの量を増やしていく。

「さあ……始めようか、アレオス。君と僕と主のための物語をね？」

そうつぶやいた瞬間、契約は終わりフーケは息を荒げながら倒れこむ。

「んゝ彼が負けるとは思えないけどね。」

駄神がいきなり現れて、空中を浮遊している。

「止めに来たのですか？」

「止めてほしいの？」

駄神がそういう歪みは少し、嫌そうな顔をする。

「そんなに嫌がらなくても、したくてもできないって、この世界は

歪みによって消滅する運命だし」

「え？」

「そういえばこの者は神だった、神がゆえに運命をゆがめることができる。」

「そういえばってなんだよ。作者」

メタんな。それでなくとも、歪みのためのモノログなのに

「それなら、アレオスとかいう転生者も・・・」

「彼にはただ転生しただけ。ゆえに運命は歪まない」
すこし驚いた顔をする歪みを軽く見る。

「ならなぜ。」

「可能性だよ、彼の。少し昔話をしよう」

「そういった神は楽しげに笑う。」

「とある世界に、その日死ぬ運命の少年がいました。だけどその少年はその日死ぬはずがなかった彼が助け、新たな運命が・・・そう生きるという運命が記載されたんだ。」

神は友人の息子を墮天してまで助けようとしたことを思い出す。

墮天すれば運命捻じ曲げることが出来るから・・・

「その彼はどうなったのかな？」

「生きる運命を残して、死んでしまったよ。」

歪みは息をのむ。

人の力が、神でも変えることのできない運命を捻じ曲げたと聞いて・・・

「それで生まれたのがアレオスですか。」

「そういうこと、力は与えたけどこの世界の運命まで弄った覚えはない。まあ彼が動くように仕向けたけどね？」

十分、運命をゆがめていると思うと喉まで出かかったが、飲み込むことにした。

「さあ始まるよ？世界が助かるための運命が」

そう宣言する神は楽しそうで、生き生きとしていた。

第十五話：創造神が見ている（後書き）

次回は前、後篇に分けたいと思います。

中途半端なところで区切って・・・いやなんでもないですよ？
書き忘れていたんですが、今年の更新は今日で最後？です。

？の部分はあまり突っ込まないでください。

それではみなさんよいお年を

第十六話：土くれの・・・（前）（前書き）

新年明けましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いします。

2011年1月1日 自室より

第十六話：土くれの・・・（前）

今日はルイズが珍しく俺のところにサイトの件で、相談に来てい
る。

「要約するに、キュルケをあきらめさせる方法か」

「何かない？」

うーん、面白くする方法ねえ。

そういえば、剣のことでもめてないはずだから・・・

「お前、爆発の制御法知りたいか？」

俺はにやりとして、ルイズをみる。

これは楽しそうだ。

「ちよつと広場に行こうか」

俺は広場で、かるく腕を伸ばす。

珍しく腰には刀をさしておらず、杖を片手に持っていた。

「さて、俺たちは魔法を爆発させてしまうわけだが。魔法が使えな
いわけじゃない」

ルイズは少し俺のことをにらむ。

「使い魔召喚の時のあれはなんだったのよ」

「神力だ。魔法じゃなく神法な？ 神力術式ともいう。」

「神法？」

俺はため息をつく。

「それに関して話すと、長くなりそうだからまた次回」

タバサの視線をどこからか感じているしね。

「さてと、魔法はイメージ力が大切だ。」

「ちゃんとイメージしてても、爆発してるじゃない」

俺は少しため息をつく。

「爆発する原因は知ってるが、面倒だから省く。いいか？ 爆発する
なら爆発するイメージをする。」

俺は手近な石をつかみ、放り投げる。

「エル・プサイ・コングルウ」

すると、石が爆発する。

「で、こうなると。」

啞然としているルイズをみて、してやったりという顔をする。

「離れた場所を爆破するイメージを持つただけだ。な？ かんたんだろう」

「盲点だったわ、こんな方法。」

ルイズのそばに立ち石を遠くに投げる。

「エル・プサイ・コングルウ」

いやそれはまねんていいって……

石のそばが爆発する。

「んゝまず止まっている対象からやってみるか」
以上ルイズの修行でした

「なんで俺、こんなことになっているんだ？」

サイトのつぶやきに、俺はにったりと笑い親指を立てる。

「なんか楽しそうだったから」

「答えになってねエエエエエ」

サイトの悲痛な叫びを聞きつつ、俺は腕を空高く掲げる。

「第1回、チキチキサイト争奪決闘をかいしまゝす。」

ルールは火の塔に簀巻きにしてつってあるサイトのロープを切り、
下にたたき落としたほうの勝ち。

ね？ 簡単でしょ？

「私から行くわよ。ファイヤーボール」

ルイズはうまく爆発を操れているようで、ロープギリギリで爆発する。

サイトは逃げようとして、振り子のように動き始めた。

「器用な奴だ。」

「ファイヤーボール」

さらによける。すごい勢いで揺れている。

「ふむとりあえず・・・二順目行こうか。」

結局、48順目でようやくロープが切れた。

勝ったのはルイズ。

魔法の使い方を教えただけのことだけある。

「さてと・・・」

ルイズ達は集中しているようで気付かなかっただろうからな。

「影璃、そっちはどうだ。」

『主、こっちは接触で来たぞ』

ふっと笑うと、巨大なゴーレムが現れる。

「ルイズ、オスマンに連絡しろ。」

ルイズ達が去ったのを確認すると、サイトの縄をほどく。

「てめえ」

俺はパンチを軽く避ける。

「サイト、そんなことをしている場合じゃない。」

俺は軽く頭を上げ学長室まで走る。

「ジジイ、フーケか？」

「そうじゃな」

俺はエロジジイをにらむ。

「おっとクズ教師共は責任の押しつけ合いをするなよ？それよりか、誰か手柄を立てたい奴はいるか？」

スケベジジイはセリフを取られて涙目になっているが、まあ相手する手めんどいので相手をしない。

「クズとはなんだ。無能のくせ・・・」

一番プライドが高そうな、ギトーが叫んだ瞬間、影が彼を壁にたたきつけた。

「影璃、やめろ。こんなクズでも一応教師だ。」

影が収まり、あたりがしんとする。

「で？いないの？何、フーケに負けて名声が下がるのが怖い？」
一斉に俯く。

「そこの年がら年中色欲ジジイが動けないのを当然として、教師が

動かないなんてな。やってらんねえ」

そこまでいって、ルイズが手を上げる。

「私が行くわ」

続いてキュルケ、タバサ、そしてアリアが……ん？

「アリア、いつからいやがった。」

アリアが小首をかしげる。

「ん？『ルイズ、オスマンに連絡しろ』ぐらいから」

……ほぼ、最初のほうからじゃねえか

「とりあえず、俺も行くし。で、フーケの居場所などは分かっているのかい？」

「それなら、ミス・ロングビルが。」

こちら辺の内容は、原作と一緒に。

なるほど面白い。

「では行こうか、皆。」

俺たちはミス・ロングビルの操作する馬車に乗り込む。

「寝る。」

俺はそう言い寝たのはいいのだが、なぜかデルフリンガーに起こされてしまう。

「お前さん、なんであそこであんなことを？」

俺は片目を開け、かちゃかちゃ言っているデルフをみる。

「んゝ動かないくせに、偉そうなことをいう奴が気に入らないんでね？貴族とか」

おまいさんも貴族だろうにという突っ込みを流しておく。

到着後、すぐにアリアを連れ出す。

「お前にはすぐばれると思うから、ごめんな？」

そうつぶやき、アリアを殴り馬車に再び放り込んでおく。

女の子を殴るとかどうと考える以前に、身の危険を感じるのは俺だけだろうか？

「プログラム」

あらかじめ、ある操作をして置き俺は腰に刀をさす。

来たか。

巨大なゴーレムが現れる。

「影璃、影渡りで俺を運んでくれ」

影渡りとは影と影を結ぶ道を用意して、一瞬で移動する術のこと。おもに影璃の術なのだが、移動がめんどくさい時など影璃に頼んでしてもらっている。

「サイト!!」

俺はそう叫ぶと、サイトが答えるようにゴーレムの腕をたたき切った。

「アレ、こいつ切っても切っても再生するんだ。」

「ゴーレムは魔力で作った核を中心に動いているだから、その核を吹き飛ばさないと破壊は無理だ。」

原作では、破壊の杖を使ってだな。

んゝこの中でこいつを破壊できそうなのは、タバサだけなのだが。「主、流石に妾でも抑えきれぬ。なんじゃこの奇怪な生物は、つぶしてもつぶしても復活しおる。」

影璃でも駄目か……

ルイズが飛び降りてくるのが見える。

「馬鹿しんだろどうするんだ。」

サイトが受け止めて、ラブコメやっているうちに、俺は時間稼ぎと行きますか。

「損な役回りじゃな。」

影璃が同情するが、俺は気にしない。

「これでも結構楽しんどるから、問題はない」

そう、サイトがロケランを打つ準備をしている。

「影璃、影に隠れてろ」

俺はそう叫び離脱する。

サイト達から放たれたロケランはまるで吸い込まれるかのように、ゴーレムに直撃して破碎した。

そして、その場には……

第十七話：土くれの・・・（後）（前書き）

新年早々はしやぎすぎた・・・
だっぶくん（お約束の掛け声）

第十七話：土くれの・・・（後）

ゴーレムが崩れた後に出来た、土の山の反対方向からいきなり声がした。

「今の轟音は」

俺は姿を現したロングビルを見つめると、少し人とは違う違和感を感じる。

「プログラム」

聞こえないように、小声でプログラムを始動させると、ロングビルを解析していく。

ん、異常はないのか？

「あそこにフーケがいるわ」

ルイズがそう叫ぶと、タバサを含む三人が土くれを探しに行ってしまう。

タバサはすでに事の真相を理解していたのか、行く前に俺に目線を向けていたが。

「お疲れ様」

放心状態のサイトから、ロケランをロングビルが奪い取った。

「サイト、っち」

俺はわざわざルイズ達を護るように立つ。

サイトが少しジト目になっているが気にしない。

「なあ、ミス・ロングビル。いや、フーケさん？」

俺が厭味ったらしく言う。

「気づいていたのかい？」

俺はにやりと笑う。

「話は簡単だ。杖と剣を捨てな。」

俺たちは言われたとおりに、剣と杖を捨てた。

『影璃、いざというときはルイズ達を頼む』

『主よ。演技が過ぎるぞ？』

こいつも見透かしていたか。

「なんで、こんなこと・・・」

「大方、そいつの使い方がわからなかったからだろう？」

フーケは少し驚いたような表情をする。

「そうさね。そうかあんたが『歪み』の言っていた異質なものなのかい」

まさか、歪みが接触していたなんてなあ。

つうか、接触した個体は本当に歪みなのか？

「さてと、お話はこれまでさね。」

フーケがスイッチを押すが、何も出ない。

「ハハハハ、ナイス演技だろ？ サイト」

「ああ」

サイトは折れた剣をつかみ、原作道理に剣の柄をフーケの腹にめり込ませようとした瞬間、フーケがにやりと笑う。

「サイト待て」

剣の柄が何か固いものをたたいたような音を出す。

「へ？」

影璃の影が、フーケから無詠唱で放たれた石の槍ロック・スピアを防ぎ、ルイズ達のそばに転移させる。

「ナイスアシスト。」

俺はにっこりと笑うと、フーケをにらむ。

「歪みの奴、世界を歪ませこの世界以外の魔法をこいつに教えたな？」

フーケはゆっくりと杖を取り出すと、詠唱を始め先ほどのゴーレム・・・いや、目は赤く光り体はとげとげしいく禍々しい雰囲気を出すゴーレムを生み出した。

「アレ」

ルイズの叫び声。

みると、うつすい影がルイズ達を遮断するように膜を張っている。
「大丈夫だ。タバサ、もしもの事が起きたら皆を頼むぞ？」

タバサがこくりとうなずくのを確認して、俺は刀を転移させ手元に戻す。

「さあ行くぜ『土くれの』。魔力量の貯蔵は十分か？」

その戦いを言葉に表すには、あまりにも濃厚で俺の余生をすべてつぎ込んでも描き切れる気がしない。

それほどに長い時間を戦っていた気がしたんだ・・・

「まじめにやれ」

俺はそう叫びながら、刀で岩を切り裂きゴーレムの腕を切り落とす。

「主。」

影璃はフーケ本体からの攻撃はすべて影璃がさばいてくれていたりする。

「おい影璃、使い魔なら役割変われよ、そっちのほうが、うわ火を吐きやがった。」

ねえ？土系統のゴーレムって火を吐くものなの？

「カムイ」

俺の身体能力が向上し、ゴーレムの上を駆けまわる。

「はああああああ」

ゴーレムのでっぺんから、俺は刀を振り下ろし、真っ二つにする。これでも、まだ回復しようとするゴーレムを見つめながら、俺は息をすう。

「我、光りと共に歩み、眼前の愚者を握りつぶさん」

光で形どられた巨大な手がゴーレムを握りつぶした。

「影璃、戻っていいよ？」

「最近、妾の扱いがひどいと思うのじゃは？」

「影の中に待機させられて、あまつさえ、久しぶりの出番だと思っ
ておったら、セリフもあんまりなく」

それは・・・まあ作者にでも・・・

冷汗をだらだら流す、こんなところで影璃があっちに加わったら

勝ち目がない。

俺は飛んできているロックスピアを刀でいなしながら、影を切り裂き懸命に悩む。

「あぁつんだわぁ」

俺の体に岩や影が突き刺さる。

ぼふ・・・俺はフーケの胸に手を置き、プログラムを始動しこの世界で使われている普通の魔法しか使えないように、手を加える。
うゝん柔らかい

「最高だなフーケ」

俺は遠ざかる気の中、そうつぶやいた。

「おきて」

俺は重い瞼を開ける。

そこには、目にいっぱい涙をためたタバサの姿・・

「・・・」

声は出ないか・・・

体を見ると、何か光の粒子みたいなのが出てきて透けてきている。

「大丈夫なの？」

俺は少し首を横に動かす。

正確には、動かそうとしたのだけど元の位置に戻す力がなく、だらりと垂れてしまう。

目線の先にいたのは、いまだ意識を失っているアリアだった。

「る・・・い・・」

「何？」

ルイズが俺の手を握りながら、反応する。

「あ・・り・・あ・・には、・・・すぐ・・かえる・・って・・・
・・」

そこまでいって力尽きる。

体は粒子となって空に昇って行った。

そして、ルイズ達の鳴き声が空に響いた。

それを聞きながら俺は、馬の上でほくそ笑む。

あの子の話なのだが、俺が情報を書き換えたときにフーケの精神が耐えられなかったようで、意識を失った。

影璃は俺の影の中で寝ている。

「まったく、いい役者だよな。」

俺はその一団の近くから立ち去っていく。

数十分馬を走らせたところにいる、歪みのもとへ走る。

「これがはじまりかい？」

ボーイッシュな少女は少し驚きの顔で俺を見た。

「まさか、僕が歪ませた力をなかったことに再び歪ませるなんてね？」

俺は苦笑いをする。

「俺自身が歪みになることで、歪んだ結果をさらに歪ませ歪んだ事象を元に戻す。」

「いつ歪みの力を理解したんだい？」

少し考え、歪みをみる。

「お前と相打ちになった時だよ。」

「流石に、そこまでとはね？正直、僕も驚かされるよ。」

歪みは笑っている。

「お前が生きていて安心した。」

「僕を歪みの呪縛から、解き放ってくれるのかな？」

自然体の笑顔を浮かべながら、俺はその問いに答える。

「時が来たらな。すべての物語は、俺の手の中ってね？」

そのまま、馬にまたがりトリスティンに戻る。

side アリア

「ん？あれ？」

ゆっくりと意識が覚醒してゆく。

目を開けた私の眼に映ったのは、縛り付けられたロングビルさんだった。

「ルイズ、どうなったの？」

「ミス・ロングビルがフーケだったの、それでアレが倒して捕まえたの。」

「そうだ、アレは？あいつ、私を昏倒させたあと……」

ルイズがつらそうな顔をしているに気づく。

「アリア、落ち着いて聞いてね？アレは遠くに行っちゃったの。」
その言葉の意味を、理解をする。

「それで、彼からの伝言なんだけど、『すぐ、帰る』って……」
周りを見渡すと、タバサが涙の跡を残し眠っている。

サイトが茫然とした顔で手綱を握っている。

「え？嘘よね？どこかにかくれていて、やっほーって出てくるよね？」

ルイズが目をそらす。

私の目から、しずくが垂れ落ちていく。

私の知っているアレなら

「うらめしや」

とこんな風に……あれ？

振り返っても誰もいない、彼と離れたくない私の耳が聞かせた幻聴か……

そう思うとさみしさで、余計に涙があふれ出した。

第十七話：土くれの・・・（後）（後書き）

次回、一区切りのエピソード的な位置の雑談回です（いつもじゃね？）

第十八話：前の話とまとめればよかったと反省しても時すでに遅し（前書き）

短め&駄文です。

第十八話：前の話とまとめればよかったと反省しても時すでに遅し

俺は寮の自室に帰ると、壁伝いにルイズの部屋へと移動する。

落ち込んだ表情のルイズとサイトが入ってきたので、幽霊のポーズをとった。

「うーらーめーしーやー」

ポカーンとする二人を見て、俺はしてやったりという表情をする。「生きてたのかよ。」

サイトはゆっくりと呟く。

「そう簡単に、くたばれないからな。」

俺はそういうと、ルイズに吹き飛ばされた。

「ぐふっ、マジで死ぬ」

ルイズの顔を見ないように立ち上がると、窓を開けながら俺はつぶやく。

「そうだな、面白いことをしようか？」

俺はにったりと笑い、サイトに詰め寄った。

「さあいたずらの開幕だ。」

サイト達に話し終えた俺は、今オスマンのところにいる。

「今回の事の顛末は、サイトから聞いた通りだ。」

オスマンが頭を押さえる。

「『歪み』とは本当にあったんじゃないな。」

俺はうなずく。

「俺はこれで接触は二回目なんだけどな。」

「お前さん、『神の代行者』についても何か知っているじゃろう。」
オスマンの一言に少し驚く。

一般の人間は、異教徒としか教えられていないはずのあいつらの呼称を知っていたからだ。

「どこで聞いた？」

「王都に少しつてがあつてのう。まさか、かかわってはいないじやろな？」

俺は少しため息を吐く。

「『歪み』の存在を認識している時点で、信心深いブリミル教の皆さんから見れば俺もあいつらとかわらねーよ。」

オスマンは少し目を伏せる。

「これからお前さんはどうするつもりじゃ？」

そのままの姿勢で、オスマンは俺に問いかける。

「とりあえず、『歪み』を狩りとる。一応はね？」

この世界を少しでも永らえさせるために、俺は戦うさ。

そのためなら、『歪み』を我が身に受け入れる。

そのためなら、光にでも闇にでも染まろう。

すべてはそう・・・俺が出会ってきたすべての人のために。

「それが、お前さんの決意か？」

このエロジジイ、シリアスの時だけマジになりやがるな。

「頼み事いいか？」

俺は少しにやりとする。

「なんじゃ？」

「」

オスマンは自分のひげをなでる。

「了解した。そのように言っておこう」

アルヴィーズ食堂には、落ち込んだアリア、ギーシュがいた。

ギーシュはこんな時にここぞといわんばかりに、ナンパしまくる

のだが今日は落ち着いている。

おおかた、俺が死んだと聞かされてんだろうなあ。

俺は少し笑うと、ゆっくりと足音を消し優雅に歩いていく。

落ち込んでいるアリアに近づくと、片手を伸ばす。

「お嬢さん一曲いかですか？」

俺の声に驚きの顔で答えるアリア。

「いったろ？戻るって。それとも、俺がくたばると思うとでも？」
衛士がルイズの到着を声高らかに告げる。

「頑張れよサイト。」

ルイズはそのまま、奥にさびしく一人でいるサイトのもとに歩いて行くだろう。

そこでは、たぶん……

「一人でさびしく飲んでいるあんたが可哀想だから踊ってあげるわ。」

」

「はあ？てか踊れねえし」

「教えてあげるわよ。助けられちゃったしね？」

などというやり取りがあるんだろうなあ。

さあてどこっちも本腰入れましょうか？

「いくぜ？」

たんという音を俺の靴が奏でる。

俺は白いドレスに身を包んだアリアの手を引き中央まで躍り出る。

「恥ずかしいよ。」

「ん？胸を張ってろ。そして見せつけてやろうぜ？」

俺は啞然としているタバサに、キュルケに、ギーシュに目を向ける。

まあサイトとルイズ以外に教えてないから、驚いていても仕方ないか。

「うん、わかった。」

アリアの頬を赤らめはにかんだ姿に、俺も頬を赤くする。

ああ、なんだかんだって言ったって、俺はこいつのことを好きなんだなあ。

気づかないフリをもう少ししているか……

ルイズ達がぎこちないステップを踏みながら踊っている。

俺たちはそれを眺め笑いながら、優雅に踊っていく。

第十九話…ちょっとした暇を見つけて

ついにこの時がやってきてしまったか……俺は空に手を掲げる。

「消えゆく魂は、いずこへと導かれるのか」
そのままこぶしを握り締めた。

皆が夢見る間に俺の夢の続きを。

「もうすぐで、つきますよ」

手綱をもつ金髪の美女が声をかけてくる。

「すまないね？代行者と関係ないことに巻き込んでしまった」

俺は彼女にそう声をかける。

「いいえ、代行者の使命は『歪み』を狩りながら王を守ることです
ので。」

少し目を細め、そうかと呟く。

とある牢獄がある場所であり、衛士に声をかける。

「御苦労さま。報告は届いていますね？」

「はい、貴方がアレオス・ラ・ラインバース様ですね？」

少しうなずいて衛士に羊皮紙を渡す。

「こちらです。」

俺はお辞儀して、衛士についてゆく。

某牢獄内でフーケと呼ばれた人間がため息をついている。

魔法に使えるようなものも、杖もない状態で、魔法で固められた牢獄に入れられた瞬間、フーケは自分の人生の終わりだと感じていた。
「ロングビルでろ」

衛士がフーケの牢獄前で止まり、そう声をかける。

フーケは仕方なくといった調子で、衛士についていくと一つの部屋の前で衛士が止まった。

「入れ」

フーケは言われたとおりに部屋の扉を開けた。

扉のドアがゆっくり開いてゆく。

「やあ、ミセス。」

俺は入ってきたロングビルに声をかける。

「アンタがなんでいるのさね。」

「まあ話は長くなるから省くが、俺が引受人になって、お前が釈放されたというわけだ。」

持ってきていたトランクをフーケに渡す。

「これに着替えて、表の馬車まで来てくれ。」

そういうと、俺はいち早く馬車に戻る。

「お帰りなさいませ、王。」

俺は少し苦笑いをした。

「いらっしやい早かったね？」

ロングビルに声をかける。

「なんなのさ、これは」

俺が用意したのは真っ赤なドレス、似合わないとわかっていてもなぜかゴスロリ使用という・・・

「気に入らなかったかい？まあしばらくは我慢してくれ」

俺はそういうといちまいの羊皮紙を取り出す。

「本物のフーケがつかまったんだ、つうことでお前は釈放な？」

「あんた、何を・・・」

俺はにやりと笑う。

「自由になったお前をスカウトしにきたのさ、引き取り人も兼ねてね？」

実はこのまま放し飼いにしてもいいとも思うのだが、また盗みでもやって釈放するためにいろいろやったからそれがばれそうなので飼いならそうと思って話を持ちかけた。

「どういう意味さね？」

「お前の諜報能力がほしくなったからとあんたに死なれると、寝覚

めが悪いからなあ」

俺は金貨の入った袋を投げる。

「孤児達とエルフの少女の悲しむ顔は見たくないんだ。」

そういうと、アルビオンのほうを見る。

「もう驚きはしないよ？」

軽く舌打ちをし、真顔に戻す。

「じゃ？受けてくれるかい？」

ロングビルがうなずくのを見て俺は満足した。

さて、原作にはどのような変化が起きるだろうか？

すぐに学院に帰った俺はそのまま食堂へと足を運ぶ。

「おはろー、アリア、ルイズ？」

俺の指定席といってもいい場所の周りには、アリア、ルイズ、ギーシュがいつも陣取っているはずなんだが……

「あれ？ギーシュは？」

「あそこよ。」

モンモンニずっと謝っているギーシュをルイズが指さす。

「また浮気だって？そうだ、アレは今朝がたどこにいったのかな？」

アリアのすごみに、俺の額から冷汗が滝のように流れてくる。

「えーと、仕事のスカウト？ちよっと、俺の家の隊を編成しようと思ってる？」

ルイズが少し首をかしげる。

「戦争がくるとでも？」

俺はすこしため息をつく。

「さあな？王城派の貴族にはわからないとおも……」

「貴族派？」

アリアが俺の話をぶった切る。

「どっちでもない、俺は可愛い娘のみかたさ。」
ジト目で見られた。

「反省してますん。だから、そのジト目はやめ・・・ん？かわうい娘ちゃんの香りが近づいている」

ルイズに椅子から蹴り落とされる。

「つて、ちょっとしたジョークだよ。」

俺は席に座りなおす。

「まったく神聖な食堂で人に蹴りをくらわすなんて」

澄ました顔で、食事を終わらすとギーシュに近づいていく。

「ギーたん？浮気は男の性だよ？」

ギーシュは助け船を出されると、生ぬるい考えを持っていたみたいで、茫然としている。

その姿を目に焼きつけながら、講義室に行く。

講義室には誰もいない。

皆が来るまで数分あるので、俺は少し深呼吸をし目を見開く。

「アルファ・ステイグマ」

久しぶりに魔眼を喚起する。

それにこたえるかのように、魔法学院の壁に仕込まれた魔法の解析が始まった。

「速度は鈍っているが、あんまり気にする必要はないなあ」
目を閉じ、元の状態へ戻す。

「ん？」

タバサが俺をずっと見ていたことに気づく。

「んゝみていたなら仕方ないけど、みんなには内緒ね？」

それからしばらくして、授業が始まった。

「私は皆が知っている通り『疾風』の二つ名を持つ。」

俺は顔を伏せ、睡眠体制に入る。

「諸君らは最強の系統を知っているのか？」

「虚無ですか？」

キュルケがそう疑問気にこたえたと、ギトーが馬鹿にしたように鼻で笑う。

「そんなおとぎ話の中でしか出てこない系統なんかではなく、現実

的な答えを聞いているんだ。妄想をするのはいいが、私の授業には・
・」

俺は手元にある羽ペンを投げつける。

「だりいよ。クソさっさと済ませろゴミ虫」

ギトーは俺のことをにらみつける。

「ミスタ・ラインバース、君は最強の系統魔法を知っているというのかね？」

「俺という系統が最強だ。反論すると思うから言うが、俺の使い魔にやられるようなやつに否定権はないぞ？」

ギトーは唇をかみしめる。

「君は無能だった・・・OK、ゴミ虫、久しぶりに魔法を使ってやるよ。」

魔眼のことがばれる？何それおいしいの？

俺の目に紅の十字が現れ、周りからは小さい悲鳴が起こる。

「選ぶ系統は・・・火だな。行くぞ？」

すっと魔力が制御されていく。

「ウル・カーノ・ジエーラ・テイル・ギョーフ」

俺の杖先から炎の蛇が現れる。

あのコッパゲは出てくるなよと注意しながら放つ。

「ウインド・ブレイク」

風で吹っ飛ばそうとしたのだろうが、その考えは甘い火は風を受け激しく燃え盛る。

ギトーは防げないと知り、目を閉じた。

「しかたない、ウォーター・シールド」

火はみずに当たり、消えた。

「最強は火でしたね？いやこの場合は水になるのか？」

俺が後ろを向いた瞬間、危ないという声が響いた。

予想通り、怒りに我を忘れたギトーがエア・ハンマーを打ち込んできたのだろう。

俺は魔眼を閉じ効果を無くし、直撃した。

意識が一瞬飛びそうになるが、俺は意識を手放さなかった。
まあタイミング良くハゲが入ってきたので、意識を失っているふりをしているが。

第二十話：姫さんは疫病神（前書き）

作者まさかの失踪？

ただネトゲに時間かけすぎて・・・・・・ゲフン

今回は姫さんのセリフはあんまりありません。

あとめんどく・・・げふん

どう書けばいいかわからないところがあったので秘儀『省略』を使っています。

この間にも俺は3回もゲザっているんだぜ？

第二十話：姫さんは疫病神

やりすぎたと反省しながら医務室で目を開ける。

そこには涙を目にためたアリアが俺のことを心配そうに見ていた。

「おはよう、アリア」

俺は痛みの取れた背中に負担をかけないように、ゆっくりと起き上った。

「もう、心配したんだから」

俺は苦笑いをする。

そういえば、こいつが素直になるのは久しぶりだなあと思いつつ、その後どうなったかを軽く聞く。

「へえ、姫さんが来ているのか。」

「へえって・・・姫様よ？ なにかこう・・・」

俺は首をここに振る。

「権力が伴わない姫様だろ？」

有力な貴族たちからは、ただの駒として扱われつつも、毅然とした態度で指揮している姿は称賛に値するが・・・

「権力をもってしても、敬わないと思うよ？ 俺は・・・」

そう・・・姫さんが持ちかけてくる問題を知っているだけあって、敬おうとも思わない。

「さてと・・・どこでサボる？」

「サボるのは決定事項なのね・・・」

にやりとしながら立ち上がると、俺は医務室を後にした。

外に出ると、あたりが騒がしく少し嫌気がさしてくる。

「おおかた、家の連中に姫さまに取り入ることができたらとか教えられているんだろうなあ？」

実に可哀想だ。

俺？ 教えられても、忠誠を誓うのはただ一つ、俺の意思だけだ。
「コルベール先生なんか、浮かれ切って・・・すごいかつこう」

あれ？あの人・・・まあいいか・・・

俺らは今、塔に登っていたりする。

「ん？来たようだな」

馬車が到着し、結構胸のある・・・げふん、可愛い少女が出てきた。

「どこ見てるのよ、言うかこの距離でなんで見えているのよ。」
うお、俺のよこしまな考えばれてーら。

「な・・・何故ばれたし、こいつはアレだ・・・うん」

「どうせ、何も考えてないんでしょ？」

俺は少しうなだれる。

サイトではないのだけれども、俺もおっぱい星からやってきたおっぱい星人なのだ。

「出迎える気がないのに、なんで見てるのよ。」

「んー一応、姫さん本人を見ておきたかったからな。」

人となりと雰囲気を見極めるために・・・

今は大層猫を被っているが、その奥は普通の少女か・・・

「なあ、アリア。」

「何？」

「一緒にさ、アルビオン行ってみないか？観光じゃなくて、戦闘だけ。」

俺がそういうと、微妙そうな顔をする。

「さてと、俺は行くよ？」

「ちょっと待ちなさい、さっきの魔法のこと・・・」

俺は聞き終わる前に、塔から飛び降りる。

着地した俺は、姫様の馬車に近づいていき・・・

「お久しぶりです。ワルドさん」

まるで見知ったかのように、子爵に声をかけた。

「君は・・・」

「ラインバース家のアレオスですよ。」

「おお、大きくなったなあ」

ちなみにルイズの家に遊びに行った時、現在のエルが接触したので、記憶をたどりながら会話をする。

「いえいえ、それにしても、グリフォン隊の隊長ですか。」

ほめたたえると、ワルドは少し苦笑いをする。

「そうでもないよ。あれ？それは・・・」

俺の腰にある刀に気づいたのか、少し頭をひねっている。

「これですか・・・刀ですよ。杖刀より長いのは、もともとこれで打ち合うためのものだからです。」

そう言いながら、刀を抜き放つ。

「ほう・・・綺麗な刀だ。」

光を反射して波が綺麗に輝いている。

「あら？そちらの方は？」

俺は軽くお辞儀する。

「はじめまして、姫さん。俺はアレオス・ラ・ラインバースだ。」

「あなたが・・・ルイズからお話を伺っておりますわ」

ほう、姫さんに何言ってるんだろうなああいつ。

「ちよつとドラゴン狩ってくるのか言って、本当に狩ってくる御仁だと・・・」

・・・いまだそれが謎なんだよね・・・

虚無を使えるようにしといても、詠唱長いから生殺与奪まで行く以前に発動しないし、ほんとどうやって狩ったんだろうね？

「ちよつとそこらへんの記憶があいまいなんですが・・・」

「ほう、何か武器や特殊な魔法などを使ったのかね？」

興味深そうにワルドが質問してきた。

「当時は刀も持っていなかったし、魔法も使えなかったから・・・たぶん素手。」

驚きに見開かれた目を見て、俺はケタケタと笑う。

「それでは、俺は予定があるので」

「・・・・・・・・姫さんのあの、ルイズと行った時の優しい目を見て、少し対応を改めようと思う。」

しかし、戦争とは難儀なものだよなあ。

「主よ」

影から影璃が這い出てくる。

「ん？」

「先ほど話していたワルドとかいう奴・・・」

心配そうな顔の影璃の頭をなでる。

「わかってるさ、歪みだろ？」

あいつの周りの空間が少し歪んでいた。

しかし、敵が俺だと聞かされていないあたり、歪ませたのはあの少女ではないだろう。

「ところで主よ、歪みとはなんなのじゃ？」

あり、こいつには言ってなかったっけ？

「『歪み』とはこの世界の文字通り歪みなんだよ。この世界にあるはずもないものが原因だったりする。今、『歪み』と名乗っている少女は、それを埋め込まれた状態のただの人間なんだ。」

「へえ」

俺はにやりとする。

「そしてその一部、もしくは複製を埋め込まれたらさっきのワルドみたいな状況になるわけだ。」

この間のフーケの件を見ても、歪みが大きくなっているのがわかる。

「主も持っておるのだろうか？主は何故そのような力を？」

俺はにやりと笑う

「それが必要となり、現にそれに救われているからだ。」

虚無、魔眼、魔法、神法そして劣化歪み。

それらは皆、歪み本体を倒すためのものだ。

だが・・・・・・

「これだけでは勝てるかどうかわからん」

「それ以上やると、神域をこえそうじゃなあ」

全くだと相打ちを打ち、軽く苦笑いを浮かべた。

そして俺はルイズの部屋にいる。

サイトのドキドキお着替え＆おっぱい体操などはまことに残念だがみていない。

見れていたら、全力で交じりにいったのになあ。

ちなみに、みれなかった理由はアリアに追い回されていたからである。

ドアがノックされ。

サイトがドアを開けると、頭巾をかぶった少女がそこに立っていた。

ん？ディテクトマジックか・・・探知系の術式の目をかいくぐるのは面倒なんだよなあと思いながらなんなりと回避する。

「姫殿下」

ルイズがあわててひざまずき、サイトは・・・まあいつものことなのだが、ボケ顔を披露していた。

「お久しぶりです。ルイズ・フランソワーズ」

俺はその声に耳を傾けながら、少しほくそ笑む。

その後の、はたから見れば芝居がかったやり取りがあったが、俺は見なかったことにした。

とりあえず、要約すると、ゲルマニアの皇族と結婚することになったでござる。

だけど、アルビオンの貴族たちはそれを破談させようと何とか材料を探しているでござる。

アルビオンの王族に送った手紙が、材料になりそうだからそれを回収してきてほしいでござる。

それを聞いたルイズが自ら行きますと言ったでござるの巻き（まあとりあえず・・・ギーシュが転がり込んできたところから。

ルイズはまるでギーシュを汚物でも見るかのような目で見ていた。「僕がみ目麗しい姫様の跡をつけないわけじゃないか。」

「そうだな、流石はギーシュ。」

壁に背を預け立っていた俺を知覚したのか、ルイズとサイトそして姫さんが驚きの表情を浮かべる。

「アンタ、何時からそこに」

ルイズが怒鳴る。

「ん〜ドアがノックされた時ぐらいかな？」

そうそっぽを向きながら答えた。

「あの話は・・・」

俺は少し息を吸う。

「はつきり言わせてもらう、ルイズ・・・中途半端な気持ちでやるのはやめとけ、俺が全力で妨害するぞ。」

「な・・・何を・・・」

「戦争がどんなものか知らないようだな、姫さんも姫さんだ、どうして・・・どうして、そんなに無邪気にルイズに話をふれる」

その目はとてつもなく冷たいものだったのか、いつも調子に乗って助けようとするギーシュが黙っている。

「現実を見る、王宮の中からでなく外に出て・・・」

そこまで言って、さてとと腰をおろし無理やり笑顔に戻す。

「今の話を踏まえて、ルイズはどうする？」

ルイズは先ほどまで目に光が宿ってなかったが、まあやったのは俺だが・・・

そんなことを除いて、ルイズの目に強い意志が宿る。

「それでも行くわ。」

「うん、わかった。」

周りが一斉にずっこける。

「んじゃ、明日の朝な？」

「へ？」

「おやすみ」

軽いノリで、俺は窓の外へとダイブした。

第二十話：姫さんは疫病神（後書き）

誤字と素晴らしく重いミスを修正いたしました。

第二十一話：アルビオンへ行こう（移動編）（前書き）

前からなんだけど、なんか書かないといけなところ大幅に削って
いる気が・・・

番外編としてエルのこと描きたいんだよねえ

第二十一話：アルビオンへ行こう（移動編）

朝もやの中、ルイズとギーシュそしてサイトの三人がたたずんでいる中、一匹の鷹が舞い降りてくる。

その鷹は光始めると、一人の人間へと変わった。

「やっほーとんでも人間どうでshow!」

となぞなテンションで俺が出てくると、三人は目を丸くしたままため息をつく。

「もう、アレが何をやっても何も言わないぞ。」

サイトがそうつぶやいた。

「ちなみに、ギーシュてめえの使い魔は連れて……」

俺は少し考える。

「まさかギーシュ。ヴェルダンは馬とおんなじ速度で地中を掘れるか？」

ジャイアントモールは確か地中を猛スピードで掘り進むことができる。

「出来るとは思うけど、体力が……」

俺はプログラムを始動させ、歪みを起動する。

「魔力による身体強化……そのパスをつなげてやるだけでもいいな……行ける、呼んでくれ」

ギーシュはうなずくとヴェルダンデと大声を出す。

地中からは大きなモグラが現れた。

「よし、ちよいとね？」

『疑似魔力バイパス生成』……『完了』

『疑似魔力出力口生成』……『完了』

モグラに触り、俺は再び思考を巡らせる。

『疑似魔力入力口生成』……『完了』

『疑似バイパス接合』……つく

少しチクリとしたが『完了』だ。

「出来た・・・我ながらなんてことをしてしまったんだ。」

「え？」

意味がわからないようなので、俺は少し解説をすることにする。

「俺とヴェルダンドの間に魔力の流れを疑似的に作ったんだ。そいつに強化や治癒を発つけた魔法を流してやるとどうなる？」

「・・・・・・つまり、アレの精神力が尽きない限りヴェルダンドは動き続けることができる？」

そうそうと俺は笑いながら言う

「ただし、魔力を使うときは、バイパスを切らないといけないけどね？」

皆の目が？に代わる。

「膨大な魔力が流れるから負荷に耐えられないんだよ。ちょっと発動形体が特殊だしね？」

特殊ってなんだよって聞こえてきそうなので、それは却下。

気づくとモグラはルイズに襲い掛かっていた。

「ちよつと何、きゃ・・・」

ルイズの指に鼻をこすりつけて、のしかかっている姿はとて・・・げふん

「サイト・・・・」

「ああアレ」

俺たち二人は固く友情を確かめ合う。

「ちよつと、たすけなさいよおお」

サイトを軽くたたく。

「動くなサイト」

その瞬間風が舞いあがり、モグラが吹き飛ばされる。

「誰がやった」

ギーシュが激昂する。

ヴェルダンドは幸せ者だなあ。

長身の貴族がこちらに向かって歩いてくる。

「昨日ぶりだな、ワルド子爵？」

俺がそういうと、ワルドは驚いたように目を見開く。

「まさか君だったとはね、ルイズの協力者というのは」
にやりと笑いながら手を差し出す。

「とりあえず、命預けるから信頼のしるしに」

ワルドが俺に触れた途端、オリジナルを複製した歪みと俺の劣化歪みが共鳴し合う。

殺せ・・・壊せ・・・滅ぼせ・・・

五月蠅いよ。

ワルドも感じたのか、少し嫌そうな顔をしている。

「彼は誰なんだ？」

怒りを隠しきれないギーシュが俺に問いかけた。

「んゝグリフォン隊の隊長で、ルイズの婚約者・・・だよな？」

「なぜそこまで、知っているのか疑問だがそうだ。そうか、君の使い魔だったのか、ルイズが襲われていると勘違いしてしまってたね？
すまない。」

ギーシュはしぶしぶ了解したのか、少し下がる。

「さて行こうか」

そう言い、ワルドがよく通る口笛を吹いたとたん、どこからともなくグリフォンが現れた。

ルイズは何故かワルドに抱きかかえられ、グリフォンに乗っていたが

「さて行こうか」

俺は目を細めながらワルドをみる。

実はさっき握手を求めた手は左手だったわけだが・・・

どうでもいいし、行くか。

アンリエッタは学院長室から出発する手紙回収の使者一行を見下ろしていた

「どうか、彼女とその御友人に始祖ブリミルの加護があらんことを」
隣では、変態ジジイ（オスマン）が鼻くそ付きの鼻毛を抜いてい

るが・・・

何やってんだ。

「見送りは・・・なさらないのですか？」

そうアンリエッタが変態に問いかけると、変態は。

「ワシははなげを抜いておるのでな。それに、彼等が付いているし
のう」

「彼らとは？あのギーシュとワルド子爵のことですか？」

変態はゆつくりと顔を横に振り。

「ルイズの使い魔の少年と、ラインバース家の長男のことですよ。
ほっぽと変態は笑うと、アンリエッタは訝しげな顔をする。

「平民と、名声もない貴族じゃないですか。」

世間一般から見てというよりは、王宮から見てラインバースは
名声も何もないただの一貴族に見える。

だが、現当主とアレオスの謎の人脈は大きいものがあつた。

有名どころに取り入りたいのなら、ラインバースを取り入れると
言われるぐらいに。

変態は笑う。

彼は謎の人脈の一人なのだから。

「ところで姫様は『ガンダールブ』を御存知かな？」

「ええ・・・はっ、ではあの使い魔が？」

「えーっと」

そう変態が調子に乗って言い過ぎたという後悔が来る

「『ガンダールブ』なみに・・・ぐばあ」

その言葉を遮るかのように、俺が乱入した。

「お主、ついて言ったのではなかったのかい。」

「彼は、異世界の腕の立つ剣士だったんだ。それがルイズとの契約
で筋力、反射能力を劇的に上がった。疑似的に『ガンダールブ』の
ような戦士を作ってしまったわけだ。」

USO800W

「わかりましたが、貴方は何故ここに？」

「ああ本物じゃないからね？これは」

アンリエッタは風の偏在のことを思い出しながら、目の前のアレオスを見つめる。

「ちなみに魔法でもないよ？完全に独立した一個体だからね？」

「ったく、よくもいけしやあしやあと俺にこんなことをさせやがってと、生みの親が旅立っていった方向をにらむ。」

「ちなみに俺のことはエルって呼んでくれ。」

そういった瞬間、俺の髪は黒く染まる。

「黒髪の・・・異端者？」

姫さんが驚愕の顔をする。

「顔のお触れ書きまで回っていたとはね？」

苦笑いを浮かべるその表情は、どこか楽しげに見える・・・

「正直、俺は遊びに來ただけなんだけど・・・少し、遅かったかな？」

俺はそういうと変態に羊皮紙の束を渡す。

「『歪み』の出現ポイントと感染した人間の名前が載ったリストだ。親父に渡しておいてくれ」

「ん・・・ワルドじゃと？」

俺はそれを聞きつつ、その場から消えた。

「え？」

一つの驚きの身を残して。

「ワヅドガルラギディボド」

「いきなり何よ。」

うーん、少しネタばれしてみたんだけどなあ。

馬がつかれたみたいなので、休ませている。

「ん？たぎる情熱が俺に叫べとつぶやきかけているのさ。」

ただ、オンドウル語を使って遊んで遊びたかったただけなのだけど。

「アレ、馬も調子を取り戻したみたいだ」

ギーシュが声をかけてくる。

「やれやれ、港までノンストップで行きたかったのだけど」

「だったら、龍でも連れてきやがれ。」

俺はぴしゃりと言い切ると、サイトとギーシュが馬に乗ったのを確認する。

え？お前はなんだって？

馬で疾走するよりか、オオグンカンドリに変身してとんでいったほうが早く、また神力による体力強化によって常に最高速度を維持できたりする。

「ニャッフー」

最初に変身することにツツコミがあっただが、ついにツツコミがなくなっている。

「なんかさびしいよなあ」

と俺はギーシュの乗っている馬の尻に降りる。

「アレは飛んでいくってなかったかい？」

「疲れた。お前のヴェルダンデに魔力供給もやっているんだぜ？」
カチカチとくちばしを鳴らす。

「時にサイト、さっきから喋らないじゃないか」

「あれじゃね？自分の気持ちに素直になれない、思春期の男の子だから。」

「ししゅんき？なんだいそれは」

そんな会話をしていると、サイトが馬を俺らに近づけた。

「おい、アレ。」

「まあご主人様が好きなサイト君はやきもちを焼いているのでした。」

「サイトが俺を捕まえようとしたので、軽く空を飛ぶ。」

「ふふふ、まあ応援してんよ。」

「てめえ」

元氣を取り戻したであろうサイト（笑）は、俺を追いかけていくように馬に速度を上げるように命令した。

山岳地帯に入り込むと、サイトがねをあげたのか、ぐったりとし

ている。

「なんで港がやまにあるんだよ。」

「ああ、アルビオンってところは、浮遊大陸なのだよ」

サイトの肩に止まりながら俺は、説明する。

「君はアルビオンを知らないのかい？」

「ギーシューこいつは東方の出身だぜ？すでにこっちの情報がなくなっている可能性もある。」

俺は眼鏡をかけながら、無論鳥のままですがそうギーシュに言う。
「ん？・・・バイパス排除」

俺はワルドの前に出て、人型に戻ると刀を抜き放つ。

瞬間、いくつものたいまつが投げ込まれ、轟々と燃え盛り始める。
驚いた馬は歩みを止め、そこを狙ったのか、無数の矢がサイト達を狙う。

妙だな・・・ワルドが射程外だなんて・・・

そう思いつつも、刀ですべての矢をたたき落とす。

一步も動かずにだが・・・

「山賊・・・夜族の類か」

ワルドの言葉には何かを知っているような含みがある。

全く、隠すの下手だなあ。

「アルビオンの貴族が襲撃をかけてきたのかも」

「貴族なら・・・」ああ、その可能性は否定しきれない。だけどね、
まずは身内を疑ったほうがいいぜ。」

結構な距離があったはずなのに、そばにいる俺に驚いたのか、ワルドが押し黙る。

第二波がきた瞬間、矢は見当外れの方に飛んでいき、カッター
トルネードが敵をなぎはらう。

遅れて、後方から翼の音が聞こえてきた。

「シルフィードと・・・ヤバイ・・・」

俺は逃げようとする、フライの呪文で急接近してきたエリアに
捕まる。

「ごちゃごちゃ言ってる連中を置いておいて、俺はアリアに説教を受けていた。」

「戦闘ってこれのことを言っていたの？ 全く、なんでこんなことに首を突っ込んでいるのよ。」

「怒って、いるのか？」

「怒ってない」

「あのーそう言いつつ殴るのやめてもらえませんかね？」

「ん……涙目か……」

「悪い、心配掛けたな」

「俺はそう言いながら、アリアを抱きしめる。」

『ほうほう、なかなかどうして。主も隅に置けないのう』

「アレは何ラブコメやっているんだい？」

「ギーシュが暇になったのか、こちらに来た。」

「んーちよつとね。」

「影から影璃が這い出てくる。」

「主はこのように駄目人間じゃが、これからも支えていってくれな
いかのう」

「そう、さびしそうにアリアに話す影璃の姿は寂しそうで……」

「ん？ 目を覚ましたか……」

「俺は少し、捕まえた賊の頭を引っ張る。」

「あーなんだ？ 宿には先に行っておいてくれ」

「去っていくワルド一行を見送った後、闇の中で少し晒う。」

「さあ、物取りか……貴族相手に？ 誰に雇われた。」

「聞いても、賊は何も答えない。」

「仕方がない……」

「10」

「ポキと景気のいい音が聞こえ、賊が悶絶しているのが見える。」

「まあ俺が手の指を折ったからなのだが。」

「9」

「二本目が折れる。」

「8」

「わかった言う」

傭兵はこれごときでは何も言わないのだが、俺の冷たい声と容赦ない行動に恐怖したのだろう。

「うち0までカウントさせろよ。次の拷問ができないじゃないか。」

傭兵の顔が化け物を見るような顔に変わる。

「俺等を雇ったのは、仮面をかぶった風の使い手だ。黒いマントをしていたから貴族だろう」

俺はそうかと呟くと、プログラムを作動させ馬を作り出す。

「今は見逃しておいてやる・・・次、俺に敵対行動をとると・・・わかってるよね？」

傭兵が真っ青になって失神した。

「主はえぐいのう」

俺はいきなり出てきた影璃に微妙な顔をする。

「指と爪の間に釘打ち込むより良心的だと思うぞ？」

「それをしようとしておったのか？」

首を横に振る。

「気絶されたらめんどいから、指の骨を折るだけにしておいた。バリエーションとしては爪剥ぎとかかなあ。」

影璃が何故かしやべらなくなったけど、まっいっか。

さあて、サイトたちに追いつこうか。

第二十二話：決闘、戦闘、捕虜？（前書き）

今回も果てしなく中途半端です。

そして遅くなりすみません。

言い訳でしかないのですが大学のテストが今週末まであるので執筆速度が落ちています。

あと、dead space 2 がそろそろ発売するので、それやりたいなあゝって（え？ちよつとぎゃあああああ）

アレ「dead space 2 のディスクを執筆せずにやっていたらたき割っておきますね？」

影璃「なかなかえぐいことするのう、主は。それより、その肉塊は生きておるのか？」

軍師「な．．．なんとか．．．」

第二十二話：決闘、戦闘、捕虜？

どうも、闇プログラマー（―は略してはいけない）のアレオスです（暗黒微笑）。

光プログラマーとの対戦のせいで、怪我覆った俺は数年間地下にもぐるのであった。

「何をやっているんだ、主よ。」

「んゝ暇だから、過去のネタをモノログってた。」
ジト目で影璃に見つめられるが、苦笑いしかない。

「それにしても、主と二人きりというのは久しぶりじゃないかのう」
「そうだなあ」

寝る前に、アリアの襲撃とか俺がサイトのところに遊びに行った
りとか……

「主、今回の件じゃが……」

俺はうなずく、ワルドに『歪み』がある以上、レコンキスタカト
リステインのどちらかに『歪み』の力が及んでいると考えたほうが
いい。

だとすると……

「俺の敵は、最低でも、国一つと考えたほうがいいな」

「最低？」

ああと返すと、馬の速度を緩める。

どうせラ・ロシエールで二晩（笑）を明かすらしいから時間はた
っぷりとある。

「両方……と言いたところだがレコンキスタに肩入れしてい
る国も含めると、3つとなるわけだ。」

さっさとタバサの母親を助けられないとなあ……エルフ領にまた足
を踏み入れるか。

今回は偽装術式を組まないと国境越えられそうにないなあ。

「ということは……」

「変化のマジックアイテムがあるからと言って、容易に『歪み』狩りが出来るわけじゃなくなったと……」

「まったく、心労でハゲそうだぜ。」

「まあ、何があってもお前は死なせないさ。」

「あるじ……」

俺は照れくささからか、少し苦笑いをする。

「全員で未来をみるために……」

「はたして、主の全員に主は入っておるのか？」

痛いところをつかれたなあ」

正直『歪み』との相対で前回はたぶんだが、神の力添えで何とか生き延びた。

しかも、プログラムという能力の欠陥まで見つけてしまった以上……無傷で勝てる見込みがない。

瀕死の重傷を最低でも負うだろうなあ。

「死なない程度には頑張るさ……」

ラ・ロシェールが見えてくる。

「山岳地帯に港とは……はじめてくるが、なかなかユニークなジョークじゃないか。」

俺がいた時代には宇宙港なんてものがあつたからなあ」

「滑走路もなく船が浮くんだから、驚きだなあ」

「主の出身世界では、魔法はなかったのか？」

「そうだなあ……」

「表に出てくる魔法はなかったな、裏にはあつたらしいが。俺は使えなかったけどな。」

「ぬ、ではこの世界に来てからということになるのか……」

そういうことになるのか……いや、魔法事件にもあらかたかわったような気がするが。

「だねえ、しかも数年は記憶喪失で魔法にかかわらなかったから……」

「それでもあれか、妻の500年がたった数年に負けようとは……」

・
」

落ち込んでいる影璃の頭をなでると、少し抱きしめる

馬の手綱を話しているが、問題はない。

俺の力で生み出したものだから、俺の命令を無意識で受け取っているのだ。

「主は優しいのじゃな」

当たり前だろ？ 相棒。

宿屋に到着するなり、ギーシュとサイトが窓に張り付いているのが見える。

俺と影璃は冷めた目で見つめる。

「あゝサイトがつき落とされた」

「こ……殺す気かよ」

俺はニヤニヤしながら、それを見ている。

「な……なんだよ。つうかつしていたのか？」

「ああ今着いた、そしたら窓に器用にへばりつく芋虫みたいなクズが……」

窓から、ワルドが身を乗り出して俺をみる。

「どうだったんだい？」

「ああ金で雇われた傭兵だったよ。軽く拷問したら湯水のごとく情報を出してくれたたよ。」

「な……本当に傭兵なら普通の拷問で吐かないはずなんだが。」

俺が普通じゃないからなあ。

「あの時の主、鬼か悪魔かと思ったからのう。」

失礼な。

「失礼だが、そちらのレディは？」

「ああ俺の使い魔。いつもニコニコ俺の影に這い寄ってるから気にするな」

親指を上げぐっとマークを作り、満面の笑みを浮かべる。

「さあて、今日は楽しめたし、夢見もいいだろうなあ……ニヤリ」

俺はそうワルドに言った。

さてと、動き始めるか・・・

早めに寝たので、朝早く起きることができた、ちなみに体が楽でとてもすがすがしい気分だったので、夢見がよかったのだろう。

「快眠・・・っておい」

いつの間にか、アリアが俺のベッドにもぐりこんでいた。

いかんいかん、起こしたらどうなるかわからん。

俺は、窓から外に出る。

「おつきろくサイトとその他」

ドアを突き破る勢いで、サイト達がいる部屋に突入してゆく。

「うわあ」

ベットから落ちる二人をウケケと笑いながら見る。

「さてと」

ノックがされ、ワルドが入ってくる。

「よろしい、ならば決闘だ。」

俺はそう高らかに宣言する。

腕を胸元でぐるぐる回しながら左右に体を揺らせる。

「決闘は、ワルドとサイトで」

それをやめ、くると一回転する。

「介添え人はルイズ。」

人差し指を天高らかに突き出す。

「そして、任務前に怪我されたらたまらんから危険になったら俺が止めるよ。」

「ふむ、あのフーケをとらえた使い魔君と決闘か。」

俺はにやりとする。

「どうだい？面白そうだろう？サイトも、いろいろとね？」

二人の眼の色が変わったか・・・

「ちょっと待て、相手は・・・」

ギーシュが何故か一般人として止めようとする。

「少し、準備があるから時間をくれ。そうだな・・・一時間ぐらいかな？」

俺はギーシュを連れ、宿の人氣がなさそうな場所を目指す。

「アレ、何故君は・・・」

「振った理由は、サイトが暴発しそうだからと、ワルドという人間を見極めようとしたからだ。」

静かに、ただ静かにそう伝える。

「まあ、気にするなってことだよ」

俺はルイズの隣に座ると刀に手をかける。

「昔、このあたりを治めていたフィリップ3世がいてね？その時代ここは貴族の決闘を行う場所だったんだ。」

「よくしているな、若いのに。」

ワルドが感心したようにそうつぶやいた。

「若いから知識がないと思わないでもらいたい、魔法以外は有能で通っているのね？」

それが俺、アレオス・ラ・ラインバース伝説の幕開けとなったわきやねーだろw

「それじゃあ双方準備はいいか？」

軽くうなづく二人を見て、俺ははじめと宣言した。

サイトが、ワルドのもとまで一気に詰め寄る。

流石、ガンダールブの力といったところか、詰め寄った速度を乗せた剣戟がワルドを襲う。

ワルドは一瞬、防御の動作に見える杖の動きをする。

「魔法衛士隊のメイジたちは杖の動きさえも詠唱と化す。」

エアハンマーがサイトの体を押し返す。

「がっ」

サイトの体が壁に当たり、地面をバウンドする。

「たて、サイト。」

俺の冷徹な声、サイトはデルフを杖に立ち上がる。

「君では私に勝てないのが……」

「うおおおおお」

力がたまっているのが俺でもわかる。

動きが飛躍的に上がり、再度詰め寄るが……

横から来たエア・ハンマーに再び吹き飛ばされて、サイトは動けなくなった。

まあ剣を落として、その前にワールドが立ったからなのだが。

「勝負あり、勝者ワールド」

余裕そうな顔で、ルイズに対してサイトじゃだめだみたいなことを言っているワールドを横目で見ている。

「何故、負けたのかわかるか？ サイト」

俺はサイトに手を差しのべながら、そうつぶやいた。

「解らない……解らないよ。」

技術と戦略の差だと言いたいところだが……技術は正直、ガンダールブの力があるので五分五分、戦略の差であそこまでひどい結果が出るわけがない。

「意識の差だよ。相棒」

デルフは見抜いていたのか、そんな言葉を発する。

「ワールドは勝ちに来ていた。お前はそんな相手に、ギーシュに勝つたからと安易な気持ちで、戦ったんじゃないだろうな？」

心の内を見透かされたショックからか、サイトは押し黙る。

「さてと……俺は行くぜ？」

そんな言葉を残して、サイトを放置して俺はどこか休める場所を求め歩き去った。

「主……主、起きよ。」

夜、寝ていると影璃に起こされる。

心労がたまっているから寝過ごしたのか……

「襲撃だな？」

「解っておったのか。」

俺は少しうなずくと、荷物を整理し影璃と共に影に押し込む。

柄に手をかけたまま、窓から飛び降りた。

「俺が相手だぜ？」

敵は黒いマントに悪趣味な仮面をかぶった6名のメイジとこの間襲ってきた傭兵の残党……

まあまあ、大量にいるねえ……

『主、サイト達は棧橋へと向かったようじゃ、妾もついて行っておる』

解った。

「ちよつと、何やってるのよ」

キュルケとタバサ、ギーシュが俺に合流する。

「そのメイジ一人頼む、俺は残りの五人＋慈悲をかけやったのにもかわらず、俺に剣を向ける不屈き者を狩る」

そう言った瞬間、傭兵たちは蜘蛛の子を散らすように、逃げて行った。

「っち、せっかく洋梨とか親指締めとか用意したっていうのに……
「で？ たった5匹で何をしよう？ 見ているんだろう（……………」

……」？

俺がゆっくり刀を抜き終えた瞬間、そこに存在していたはずの俺が移動し始める。

周りには見えていないのか、ゆっくりと辺りを見回しているのが見える。

しゃあない、刀を振り下ろし鞘に戻す。

「まったく嘆かわしい」

俺がそう言葉を放った瞬間、俺のことを認識したのか一斉にこちらを向いた。

「遅いんだよ。」

五匹のメイジの首がゆっくりと落ちていく。

まったく、拷問できない奴に興味はないんだっつーの。

『主よ……考えがどんどん凶悪になってないか？』

うるせえ。

「・・・強い。」

あのくタバサさん？無表情でそんなこと言っても、あんまり強いと感しないからね？

ほら、もつとりアクションあるでしょうに・・・

「こっちは終わったのに、なに手間取っているんだ？」

俺は激戦区の中、攻撃を徒歩でよけながらそういう。

「ちよつと、終わったんなら手伝いなさいよ」

キュルケの悲鳴に近い避難を受けながらも、俺は涼しい顔をする。

「ふむ・・・切り刻む」

俺がそう言い放った瞬間、最後の一人の四肢がばらになる。

「ふ・・・本体に言っておきな。俺を連れていかなかったことに後悔しておけ。」

刀を眉間に向けて振り下ろした。

「ふん・・・脆弱な・・・」

消えてゆく死体を見て、何も感情を表さない。

「後についてこい、俺は今すぐあいつらを追う」

そういうと、俺は思いっきり走り羽を生やし風をとらえた。

「来るぞ相棒」

ライトニングクラウドがサイトを直撃しようとした瞬間、妾はサイトの目の前出る。

「『影よ』」

影が壁となり、雷を防いだ。

「影璃？」

「なれなれしく、妾の名を呼ぶでないうつけが。」

そういうと、サイトは苦い表情をする。

「今のは一体？君は。」

「ふん、矮小な存在には解らんじやろうな。」

「ああ、アレの・・・使い魔。」

ワルドが驚くような顔をする。

ふむ、やはりこ奴……。主の言っていた通りの人間か……。船に乗り込みしばらくすると、海賊？ いや空賊か……。まあ、どっちでもいいのじゃが、そいつらが襲ってきた。

「ふむ、サイトよ。先走るではないぞ。」

妾は先持って忠告をしておく、ワルドにやらせるよりかは負担がないはずじゃからのう。

なんで、妾がこんな気を使わなくてはならないのじゃ。

「ふゆー、上玉が二人もいやすぜ」

「なるほどね……。そういうわけか。」

我が主のその言葉で、一同が顔を上げる。

「どうやって……」

そう……。ワルドがつぶやいたような気がした。

第二十二話：決闘、戦闘、捕虜？（後書き）

誤字修正なう 1 / 25

第二十三話：『歪み』はどこにいる（前書き）

めちゃくちゃ&いきなり展開回

書いていて、私も

「これはないわあ」

と呟いたほど

今考えると、いつもつぶやいていたような・・・

第二十三話：『歪み』はどこにいる

「やあ、ウェールズさん？」

俺は一人通された船長室でくつろぎながら、椅子に深く腰掛ける。

「君は何者だ？」

「失礼、アレオス・ラ・ラインバースです。」

俺は深々とお辞儀をする。

「姫さんからの密令でこちらに足を運ばされました。」

ウェールズは苦笑いをする。

「君には王族を敬う気がないのかい？」

「ええ、モード公を粛清した王族と、親友を戦地に送り込むような王族に下げる頭はあいにくと持ち合わせてはおりませんので。」

俺の周りにいた賊に扮した側近たちに、剣を突き付けられる。

瞬間、風が起こり剣が根元からぽっきりと折れていく。

「これで、ルイズ達の素性は明らかになった。さてと……これからの話だ。」

ウェールズは目を細める。

「一応、ここまで来るまでに俺は貴族派の裏切り者をボディーガードとして連れてきたわけだ。」

全員が息をのむ。

「そいつは王子の命と、うちの姫さまがあんたに宛てたという手紙の回収」

「何故そんなことを」

剣がなくなったら、つかみかかってくるのか……

俺はひらりとよけ、再び座りなおす。

「それがなかったら、俺等は死んでいたよ。どこぞのおてんば姫のおかげでね。」

「そうか、紙きれのためだけに、迷惑をかけたね。」
ウェールズが頭を下げる。

「話はそれだが、とりあえずウェールズは生き延びてくれ。」

「そうすれば、戦火はトリステインに・・・」

もう遅い・・・

「内乱で、儲ける人間がいるか？あんな大人数を雇って金が持つと思うか？いくら貴族でもね？」

各国の貴族が、手を合わせているが所詮は内乱、傭兵を雇っているならなおさらだ。

なんせ、貴族には金にがめつい人間ばかりだからな、絶対に元を取り戻そうとする。

「ばれないように、家でかくまおう。」

「部下たちはどうなる。」

「家政婦やメイド達には仕事のあっせん、官僚たちは我が土地の財務管理をしてもらう。」

ウェールズは安どしきった顔で俺をみる。

「死体でばれないかい？」

「それなら心配しなくていい、何も考えず独断で動いたわけではない。」

俺はにったりと笑うと、船長室を出た。

入れ違いで、ルイズ達が入っていく。

「主よ。何故、追いつけたのじゃ？」

影を見つめる。

「ああお前の『影渡り』と同じ原理だよ」

影渡りは、影を渡り目的地までたどり着くための技、俺が使ったのは光を渡る光渡りという技だ。

「寿命が極端に縮まるから、やりたくなかったんだけどねえ」

「光の力は、人の身では重すぎるからのう」

人間の本质は闇だ。

それを知ったのは『歪み』を理解した時だが・・・

「まあいいさ、ついたみたいだから行こうか・・・」

俺はルイズ達と離れて、用意された客室に引きこもるように見せ

かける。

「さてと……転移魔法陣を描くだけでいいとして……代理はプログラムでも書きますか。」

俺は見晴らしのいいところに座り、自分だけの世界に入っている。

そう……文字と処理だけの世界に……

「彼はいったい何者なんだい？」

私は気付いた時にはもうすでに、彼の使い魔だといわれていた少女に話しかけていた。

「妾の主じゃ、それ以上でもそれ以下でもないのう」

少し嫌そうな顔をしながらも、返してくる少女に驚く。

この少女は、彼の周りにいる人間（ルイズの使い魔君を除く）には礼儀正しいと思っていたのだが……

「妾のことを値踏みしていたようじゃの。大方、人型の使い魔同士、ライバル視していると思ったのかのう」

見透かされている。

そう感じた時は、すべてが遅い気がした。

「小童ごときに、妾と主は倒せんよ。」

その目には私のみた『歪み』よりも深い闇をたたえるような色を宿していた。

「な……」

俺がウェールズの部屋に入ると、ウェールズは少し絶句をしていた。

「俺だよ。」

声色は変えないままそういうと、ウェールズはほっとしたような顔になる。

「君か、アレオス。驚かせないでくれ」

「すまないな」

大雑把に椅子に座ると、大げさにため息をつく。

「仕込みは終わった。後はあんたらが逃げるだけだ。」

「君が、その姿だというのは……」

俺はうなづく。

「心配すんな……この城は消えてなくなるかもしれないけどな
俺は残念そうにつぶやく。」

「どうしてだい？」

「んゝアレだよ。死体を完全に消滅させないと、行けないからね。
ついでに貴族派巻き込むけど。」

ぼそつと言った言葉に、ウェールズは苦笑いをする。

「今後の予定だけどね……」

俺はルイズの結婚式をニヤニヤしながら執り行うことに決めた。

「どこか君は楽しんでるんだね？」

ばれていたか……

「さっさと船に乗って、逃げてくれ。護衛は呼んである。」

俺の隣に立っていたのは、久方ぶりの登場のエルとミコトが立っていた。

「久しぶり、親父。」

ミコトが俺にそういうと、再びウェールズは絶句した。

「急に呼び出してすまない二人とも」

「で？そこのウェールズさんを護衛すればいいのか？ラインバース
まで」

話が早くて助かる。

「神の代行者から来ました」

ロングビルを迎えに行った際について来てくれた金髪の美女が俺
の前に出てくる。

名前はエイミというらしい。

「君は本当に何者なんだい……」

神の代行者に知り合いがいることを言っているのだろうか？
苦笑いしか返せないのだが……

なんかやる気が出ない俺であった。

ウェールズに化けさせた俺を配置しているからといって、本体が暇だったら意味ないべえ」

最初は本体が変化していたのだが、途中からあれ？俺殺されたら動けなくね？と思ったので急遽一体分身を作った。

まあめんどくさいことにルイズが渋りだしてるからなあ・・・
長期戦になりそうだな。

「何故だルイズ、私とくれば栄光が手に入るんだぞ。」

「いやよ!!!」

「なら仕方ない、君のことはあきらめるとするか。」
ようやく本性を現したか。

「君の目的はウェールズの命と、その手紙だろう？」

俺は変装をとき、ワルドを見据える。

「彼らと一緒に逃げたのでは？」

「『神の代行者』はあいつ等の護衛用に呼び寄せただけさ」
なるほどとワルドは納得する。

その瞬間、鋭利な氷の槍がウェールズの胸を貫いた。

「殿下!!! ワルド・・・貴方、貴族派だったのね？」

ルイズの悲痛な叫びがこだまする。

「知らなかったのか？ルイズ」

俺はポカーンとしながらルイズに問いかける。

「へ？」

「サイトを攻撃した仮面の男も、こいつだぜ？」

俺がケタケタと笑うと、ルイズが愕然としている。

「人を見たらまずは疑えってね？」

俺はウェールズの死体に手を置く。

「さて、彼の最後は見届けたし・・・何をしている？」

気づくと、周りをワルド達に囲まれていた。

「君たちにはここで死んでもらうよ。本当に残念だ、ルイズ。」

ルイズは目をつぶる。

「ルイズー！ー！」

サイトが飛び込んでくるように間に立った。

俺は少し目を細める、おかしい……。『歪み』の気配はあるのに……

「疾」

俺は刀を抜き、距離をとる。

「お前等だったのか……なるほどなあ」

そこにいたのは、遍在ではない完全に存在しているもう一人のワルドだったが。

「ワルドの存在の一部を核にして、かけらが自律行動をとっているのか……」

俺は迫りくる風をいなしながら、詰め寄る。

「久しぶりだねえ」

背筋が、ぞわりとする。

目を見開き目の前の異質な存在へと目を向けた。

「サイト……。そっちは任せる。流石に余裕はない。お前が意識を乗っ取れるってことは、それは……」

「御察しの通り、本物の歪みのかけらの一部だよ？」

ざっと世界が『歪み』始めた……

俺はプログラムで自分の時間を早くする。

ゲームの1秒が一分とか言うアレだ。

「甘いよ。」

俺の人たちが、ブレイドの魔法ではじかれた。

「とっさに、歪ませたのか……」

俺は距離をとる。

あいつは、『歪み』を使い俺と同じ条件まで自身を歪ませている。となると……

「プログラム『劣化歪み』」

俺は、歪んだ部分を歪ませて修正する。

つか、これしかできないんだけど。

「『カッタートルネード』」

トルネードが出現し、俺と『歪み』の間に少し間が生まれる。

「あの時の君を見せてくれないかい？」

「ほう・・・お主が妾の主を倒した輩か」

影璃が出てくる。

「主よ、切り札の準備をせい。時間は・・・」

キッと影璃が、『歪み』をにらみつける。

「妾が稼ぐ。」

そういうと、幾重もの影が『歪み』に襲い掛かる。

持って、数分か・・・

あいつがやるって言っているんだ、止めたら何が起きるかわからない・・・

「仕方ない・・・ぶっつけ本番だ。『世界は1と0でできている。』

我、その理に従い神とならん』」

この世界の魔法と、影が渡り合っている。

傷つきながら戦う、影璃の姿をみると俺の心がズキンと痛む。

「『我が遺志は世界に反映され、世界と我は一体とならん。』」

アイスニードルの針が、影璃の体に吸い込まれていき、貫いた。

平常心をたもて、俺。

「『プログラムEOW1〜EOW13まで起動待機』」

肩で息をしながら、影璃は影と影の間を駆け抜ける。

「準備で来たぞ。ありがとうな影璃。」

俺は吹き飛ばされてきた影璃を受け止める。

「ゆっくり休め。」

「あれ？もう終わりかい？」

俺がうなずいた瞬間、世界はキーンという音以外の音がなくなり、そして・・・色がなくなかった。

身体活動だけ、思考をまわせタイミングをとらえろ。

『閃戟』

居合の要領で抜き去った刀から、幾千もの斬戟がはなたれる。ただの、剣戟ならすぐに止められてしまうが……

確実に、『歪み』を切っていた。

氷の矢が俺を貫こうと、大量に放たれる。

その一本一本を、刀でいなし始める。

ピシ……。灰色の世界に黒い物体が写り込む。

それは、俺の腕から出ているようだった。

筋肉の限界か……

「『光の檻』」

灰色の世界に音と光が戻る。

その瞬間、『歪み』の周りを光が取り囲んだ。

「まさか、刀に魔力をまとわせて、魔法を切るなんてね。」

「驚いたか？」

「いままで最後というわけではないんでしょう？」

俺はうなずく。

「影璃が作ってくれた時間だ。『プログラム』」

一気にプログラムが展開されていく。

「これが俺の切り札、神力術式とプログラムの合わせ技だ。『始動』」

」

地面が揺れ始める。

「『始点…エンド・オブ・ワールド』」

激しい光の奔流が起こり、『歪み』をのみこんでゆく。

その光が収まったとき、そこには首だけしかなかった。

首だけって……。なんかグロいな……

いきなりその首の目が開かれる。

「ふふふ、弱体化しているとはいえ、吾輩を倒すとはなあ」

今までの『歪み』じゃない声で、その首が話しかけてくる。

「ほう、お前が神のよこした、この世界の最終防衛ラインか」

「何者だ。」

「失礼、我が敵よ。吾輩の名は『ルシファー』」

暁の子・・・地に落とされた者か・・・

「かけらの一部、回収しにまいりました。」

いつもの、『歪み』・・・ボーイッシュな女の子が現れた。

「追いかけてこなくてもいいのかい？」

俺は少し、斜め上を向く

「首一個消滅させるなら簡単だったんだけど、流石に今は部が悪い」
こいつと戦おうと思うと、アルビオンが下に落ちる可能性がある。
「いいことを教えておいてあげる、『歪み』の最後の一つの封印は、
ここにある。」

俺は神力を自分の体に流し、強制治癒をする。

「我からも一つ、この戦争の終わりが我らが初めて相對する場となるぞ。」

珍しく、俺は舌打ちをした。

その時見たのは、ボーイッシュな少女の涙だった・・・

「今は時期じゃあないか・・・」

「主・・・」

影からボロボロな影璃が出てきた。

「『治癒』」

治癒術式を発動して、ゆっくりと傷を治していく。

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃ、主こそ大丈夫か？アレは、精神にダメージが行くからと・・・」

「全力で後、3発が限界。あくまでさっきのような始点を使わなければだけど」

さっきのアレは、始点、中点、終点があり、それぞれ俺にかかる負担が変わってくる、

「全力で打ったらこの世界が減びるけどな（笑）」

絶対笑いながら言うことじゃないよね？

「あっちも終わったみたいじゃのう？」

見ると、ワルドの腕が宙を舞った。

「っち」

そう舌打ちした後、ワルドはどこかに去っていく。

「終わったな」

俺はそうサイトに言う。

「ああ、これからどうしよう」

そうなんだよねえ、逃げる方法も、ないし

「正面突破は・・・無理だな体力的に考えて」

俺は一般論を持ち出す。

『嘘をつくでないわ。主なら、突破できるじゃろうて』

地面に穴があき、モグラの顔が出てきた。

「ギーシュ、遅かったな」

「一体どうなっているんだい？」

俺は苦笑いをする。

「ワルドが裏切って、ウェールズが殺された。」

「そんな」

後から入ってきたキュルケが、そう漏らした。

俺は指輪をサイトに渡す。

「そいつを、姫さんに持って行ってやれ。形見だ。」

俺はそのまま刀に手をかける。

「どうするつもりだい」

ギーシュのその言葉に、俺は笑いながら返す。

「え？ 敵の大将に宣戦布告さ」

にったりした笑顔を返すと、俺は穴の中にあいつ等をけりいれた。

大方、シルフィールドが外でスタンバっているだろう。

「さっさと逃げろよ」

さてと・・・俺もやりますか。

絵をとってきて、俺は穴に入りながら穴をふさいだ

第二十三話..『歪み』はどこにいる（後書き）

ネタ切れ&スランプ&時間がない&単位取れた気がしない&バイト
やらないきや金がない

後半二つ関係なかったですはい

ウェールズを生かしているのは.....

ウェールズの家臣達目当てだったりします。

第二十四話：すべての終わりに向けてのプロローグ+@（前書き）

今回は短めでふ

というのも、今ストックないのでジェバンニしました。

体調も悪いのでご勘弁を・・・（言い訳乙）

第二十四話：すべての終わりに向けてのプロローグ+@

戦いが終わるまでに、二日はかかった。

食料はプログラムで自作したからいいが、動かないというのがここまでこたえるので、穴から出たり入ったり、別のところに隠れたりしていた。

ちょうど傭兵が入ってきたので、俺は傭兵に扮する。

「余の『虚無』とくと見るがよい」

「んゝクロムウエル、死体を再利用させないよ？」

その言葉にいち早く反応したのは、ワルドだった。

「ふふふ、久しぶり？になるのかなワルド。」

やはり、クロムウエルから『歪み』の残滓を感じる。

「何しに來た、ここには軍が。」

「ハリボテの虚勢に張り付いた物が軍ねえ」

俺はクロムウエルの指輪をみる。

「とりあえず、死体は全部かたづけさせてもらおう」

指をパッチンとならす。

すると、死体が光を伴って消えてゆく。

その光景はまるで、魔法のように見えた。

「そなたは、何者だ。」

クロムウエルの言葉に、俺は笑いながら返す。

「6人目の『虚無の担い手』だ。」

ワルドと、クロムウエルが息をのむ。

「んじゃあゝ俺はここら辺でゝ」

そういうと、穴の中に飛び込み一気に落ちていく。

あ、ちよつとまで？この下、空だよね？

俺何もしていない状態でヤバくない？

そう思った俺は殲滅眼を使う。

「I can 『フライ』~~~~」

フライの呪文で俺は空を飛べ……なかった。

え？あ……

そうか、アルビオンの周りは無数の風が回っている、フライの魔法をもうちょっと強化しないと安定しないのか……

「つうかこの風って、魔法的なものだったんかよ……」

仕方ない……地上付近でもう一回やり直すか。

あれ？つうか俺って、虚無使えるよね？

「『ワールドドア』」

俺は目の前に出現したドアに落ちた。

ちなみにさっきの奴は『プログラム』で詠唱していた分をTXTに書き込んで保存し、それを読み込ませこの世界に表示させ、発動に必要な呪文を短縮させたわけだ。

いわば『プログラム』と『虚無』の合わせ技というわけだ（チート過ぎね？）。

簡単なC言語で組まれているから、皆さんもぜひやってみてください。

「到着……」

寮の自室のベットに横たわると、深いため息をつく。

「さて……監視者いるんだろ？」

俺のそばに、つややかな黒い髪を持った天使が現れた。

「はぁ……君は？」

「クラリスと申します。」

クラリスはそういうと、頭を下げた。

「駄……創造神と連絡が取りたい。」

「解りました……」

そういうと、クラリスは懐かしの携帯電話のようなもので話し始めた。

「死神様……え？聞いていらしたんですか？では、あの駄神を、ええ解りました」

そういうと、携帯をしまってしまう。

つうか、天使にも駄神扱いかよあいつ終わってんな。

「えーと、クラリスちゃん？これは何かな？」

いきなり出てきた駄神に、クラリスは目にもとまらぬ速さで首輪とリードをつけた。

「逃げないようにと、死神様がおっしゃられたので、対神用捕縛術式を使わせてもらいました。」

何それ……

それできる意味ないよね？

「いえ、対駄神用の間違えでした。」

思いつきり、自業自得臭がする……

つくったのは大方、死神だろう。あいつも苦労してるなあ

「そんなことを置いておいてだ。」

「『歪み』のことだろう？」

俺はうなずく、正直予測でとどまっていたほしいが……

「ああ、あれはこの世界に住む人の願望だな？」

駄神は少し考えるようなそぶりを見せ、何かを決意したかのように俺を見つめる。

「正確には人々の願望を媒介にルシファーが受肉したものだ。かけらは受肉する際に、俺がルシファーの精神体をばらばらにしたことによって生まれた。」

やっぱりか……

「では、あの少女は？」

「彼女は……この世界の人間だよ？」
え？

俺は耳を疑った。

「ただし、彼女が生きていられるのは、歪みのかけらをその身に内包しているからだ。」

俺は一気に落胆する。

「そのかけらの力は『不死』」

やべえ、割れるほど頭がいてえ

「……なあ勝てるのか？相手は神に近いものだろう？」

「一ついい話だ、俺も昔……人間だった時に神殺しをしたことがある。死にかけたけどね？」

マジかよ……てか、神ってもともと神じゃなかったことに驚きだよ。

「ああ、俺の場合は特殊ね？」

その特殊な理由を説明しろよ。

「それと君が真に聞きたがっていることだけど、彼女の名前は『イズミ』という。」

俺はそれを聞き満足する。

「じゃあ俺は戻る。帰らなかったら死神に狩られるし」
そういうと、何やら扉を墮して戻っていかうとする。

「そうそう、お前の虚無には制限がかけてないから、呪文でもなんでも作れるよ。」

俺はため息をつくど、椅子に座り込んだ。

「俺から呼んだとはいえ、疲れた……」

「私もそろそろ」

クラリスもどこかに消えていった。

俺はそのまま考え込む。

時間ならまだある。

「さあはじめるか、世界を変えるために……」

〵ミコトのアレオスの実家訪問〵

「つきました。」

俺は降りると、親父と同じ顔をしたエルをみる。

屋敷から人が出てきた。

マントをつけているところを見ると、貴族だろう。

「君がアレオスの言っていたミコト君だね？ 話は聞いているよ？ さて、アルビオンの方々も中へ」

「亡命の受け入れ感謝します。」

マントをつけた男は、少し笑う。

「トリステインとしての正式なものじゃないので、その感謝はしなくてもいいですよ?」

その言い方に、俺はぞくりとする。

生前の……親父にそっくりだった。

「失礼ですが、何故彼等を受け入れに?」

「我が息子が、使えると判断したからだ。私もそれに同意した。なんせ、王宮で金の管理をしていたもの、政治的な手腕を持つものもいるしな。」

確信した、この人は親父と同人種だ。

子が親に似るとはよく言うが、あんな子供が生まれた親が同じ性格をしていたなんて……

それとも、あんなのが生まれることが確定していたから、親の性格もねじまがったのか……?

「使えるものはなんだって使う、たとえ神でも悪魔でも、王族でもね?」

ああ高笑いしながら言っていた。

『使えるなら何だって使うさ、たとえ神でも悪魔でも……俺自身でもな。』

という言葉思い出して寒気がする。

「さて少し中に入って、お茶でもしようか? 君には興味がわいた」

え? 何この死亡フラグ……

エル? え? 何そのすがすがしい顔は?

つうか、一応、親父の記憶引き継いでいるんだろうが

「本体なら、面白がってこういうだろう『逝って来い』」

言いそうだけどさあ〜こんちきしょ〜

俺はそう思いながら、客間まで引っ張られていった。

「ミコト君は、今は何をしているのかね?」

「『歪み』というものを探しています。」

その言葉に、伯爵が目細め口元をゆがませる。

怖、正直その時そう思った。

誰だよこんな人をペーペーの貴族って言ってたやつ。

その時、魔法学院では、

「ヘックシュン」

アレオスが大きくくしゃみをする。

「風邪？」

そんなアレオスを、心配そうな顔でアリアが見ていた。

「大丈夫、たぶん誰かこのかっこよくて運動ができ、さらには頭がよいという三拍子そろったイケメンの噂をしているんだろう？」

といったやり取りがあった。

「ほう、アレオスと同じことを言うんだね？」

「お・・・アレオスとは仲がいいですから。」

あぶねえ、親父と言いそうになった。

「はて？ただの平民とは、あいつは仲良くはならないはずだが？」
俺は少し顔をひきつらせる。

「残念ながら、なんの力も持たない、ただの平民です。」

「ほう・・・なら、私の性格を見透かしているような感覚はなん
だ？」

もう、心臓バクバクなんですけど・・・

やだ、なに？この人怖い。

「・・・似た人が知り合いにいますので」

「ワインでもどうだね？」

やべえテンポが相手のテンポだ。

「ちよっと、ワインの味を知らないんで。」

いや、ワインあんまり、飲みなれていないんだあ・・・

日本酒とか焼酎とかおいしいよねえ。

「ふむ、珍しいな。ただの平民ではないはずだから、ワインの味ぐ
らいは知っていると思っていたが。」

「飲み慣れてないものを飲んで、潰れるようなへまは犯したくあり
ませんので」

まあ潰れる心配はないと思うけどね？

「ですが、味がわからなくてもいいというなら、お付き合いします。」

「おおそうか、では秘蔵のを開けるとしよう。」

そういうと、伯爵は軽く手をたたく。

「シェリ、例の物を」

「解りました、ご主人様。」

シェリと呼ばれた、メイドがいつの間にかそこにいた。

「驚いたかい？ 彼女はアレオスが気に入っているメイドでね？ いつの間にか、超絶技巧を会得したんだ。」

いや超絶技巧ってアンタ、今の完全に気配消していたぞ？

「お待たせいたしました。」

うお、死角からきやがった。

「では飲み明かそうか？」

親父だけが、おかしいわけじゃないようだ・・・

俺はため息をつきながら、ワインに口をつける

第二十四話：すべての終わりに向けてのプロローグ+@（後書き）

風邪を治したら、もうチヨイ長くなるかも？

七人目じゃなかったでござるの巻きゝ

修正加えマスタ

第二十五話：あきらめた主人公は・・・・・・（前書き）

だっぶくん（何故か気に入っているw）

風邪治りました！

これで執筆できるよ。

やったねタエちゃん♪

とフラグ立てw

第二十五話…あきらめた主人公は……

「あの後、何してたのよ。」

先日の疲れをとるために、ベッドの上でゆっくりしていると、いきなりアリアが飛び込んできた。

「何もしていないよアリア」

「つか帰ってきたことを誰にも言っていないのに、どうして俺がいることがわかったし。」

「あの後どうなったんだ？」

王宮であの姫さんにウェールズが死んだこととワルドが裏切り者だったことを伝えたことを聞いた。

「王家はもう終わりかもしれないなあ」

「へ？いきなりどうしたの？」

俺は少し苦笑いをする。

「いや、王政とか貴族とかはもう古いかなって思い出してね？」
アンリエッタみている限り、滅びたほうがいいと思うけど。

姫さん好きな皆さんから、刺されないように気をつけないと

「不敬罪で処刑されるわよ？」

俺はハイハイと苦笑いを浮かべる。

こいつの、説教が始まると長いからなあ

「どこに行くの？」

俺は刀を持つと、外に出ようとする。

「散歩に行かないか？」

アリアが少し考え、いくと短く答えた。

夜風が体をかすめてゆき、少し心地よい。

前世の時、お前は風だと友人と言われたことがある。

理由は、風のように勝手気ままでもどこにでもふらっと現れるからだそうだ。

まったく、懐かしいことを思い出したもんだ。

「たまにね……たまに、アレが遠くにいつてしまいそうに思うの」

俺の服を握っているアリアに少し微笑みかける。

「大丈夫だよ。俺はここにいるし、どこにも行かないさ。」

そう……この世界にいる間は……護りたいものを護ってもいいよな？

なあ……神様？

ルイズを怒らしてしまったサイトは、一人でせつせとテントを建てていた。

ん？あれは？

俺はまだ帰ってきていないと思っていた、その姿をとらえる。

「散歩か？」

その雰囲気は異質で、まるでここ数日で消えてしまいそうな気がする。

まあ邪魔するのもアレだし、後であいさつにでも行くか。

「ほお、ルイズとでもけんかしたのか？」

アレオスの使い魔の影璃様が俺の隣でわらっている。

「なんでわかるんだよ。」

様付けじゃないと殺されかけるので、様付けにしている。

「ルイズのところに行ったからのう」

本当にこいつは自由だよなあ。

「あゝあ、召喚されるにしても、もうちつと物分かりがいい奴に呼び出されたかったよ。」

影璃様が鼻で笑う。

「ルイズも、愚民を呼びだすのなら、もっと物分かりのいい愚民を呼び出したかっただろうさ。」

なんつうか、なんでこいつはこんな言い方をするんだ？

「本当に愚図じゃのう……ルイズが可哀想じゃ……」

えゝなんで俺攻められているのさ。

「ていうか、なんでこっちに来てるのさ。」

「いくら鈍感な、愚図だとしても気づくはずじゃが？」
みると、アリアとアレが抱き合っている。

「主は不器用じゃからの」

そういう、影璃様の横顔は、どこかさみしげな顔をしていた。

まるで・・・まるで、アレがよくする顔みたいに。

「妾に何かあったときは、主とアリアを頼むぞ？」

俺はその言葉に苦笑いをするしかなかった。

俺は図書館で、昔の文献を呼んでいた。

『歪み』の発生原因はわかったので、過去に同じことがなかったのか調べてみる、

この世界は、魔法至上主義だ。

ゆえに、願望は腐るほどあるはずなんだ。

そこらへんのこと、駄神に聞いとくべきだったか

「ぜんぶ、始祖関係かぁ・・・ありえねえ」

平民の間に言い伝わる話じゃないと・・・か。

エル？

『なんだ？ここに連絡入れるなんて珍しい。』

いまだこだい？

『ラインバース領だけど？』

ふむ・・・『歪み』に関して調べてほしいものが。

『何かわかったのか？・・・ん、こういう理由か。』

俺は軽く首をまわす。

「解った。過去に出現していないか調べておくよ。」

サンクーじゃあなあゝ

さてと・・・それじゃあ・・・

「やりますかゝ『プログラム』」

手に取った刀を俺は腰に差し、まっすぐ前を見据える。

俺はそのまま、オスマンの部屋に乗り込む。

「何事じゃ。」

俺は口の端を上げる。

「明日から、期間はわからないが休みたい。」

「何が目的じゃ？」

目的とかいやだなあゝ

「ただ、場違いな工芸品『破壊の杖』とかのようなものが、片田舎の村にあると聞いてね？」

オスマンは少し考えて、俺をみる。

「そういうのに、興味があるのかね？」

「ああ・・・そういうことだ。たぶんキュルケとタバサ、ギーシュも一緒だと思うしそいつらの分も」

そういうと、あきらめたようにオスマンがため息をついた。

「わかった、手続きと各先生方への通達はしておこう。」

これで、お仕置きフラグは回避されましたと・・・

この世界には一応パイプがあるので、俺はそれに火をつける。

「ふうゝ」

本当は紙巻きタバコのほうが好みなのだが・・・

一応、ガムベースが作れたので、タバコの葉に似た成分を持つ奴を混ぜて噛んでみたのだが、あまりおいしくなかったのでやめた。

噛みタバコとして販売したら、領地内で馬鹿売れしたからよしとしよう。

「おや、お坊ちゃんとしては珍しいのう」

俺は少し苦笑いをする。

「俺は体は餓鬼でも、精神は30代後半だからなあ。」

オスマンにはいろいろと、しゃべっているので気兼ねなく話せる。

「んじゃ、俺は準備しに寮に戻る」

そう宣言し、俺は寮に戻っていく

「全く、嵐のようなやつじゃのう」

殺気に充てられたのか、冷汗をかきながらオスマンがそうつぶやいたのは、また別の話。

「やつほらっしゃ（何を言っているのかわからない）サイト」
テントを見つけたので突入していくと、モグラに抱きついて泣いているサイトと、そのモグラをいたたまれない目で見ているギーシュがいた。

「お邪魔しました。」

俺はそういうと、テントの外に出る。

「ちよつとアレ？ サイトを止めないのかい？」

いやだ、止めたくない・・・酔いどれてモグラに抱きついてい
る人間なんて、近づきたくない」

つかまれ、俺はギーシュに押し倒される形になる。

「何やっているのよ、あんたたち」

俺はギーシュの腹をけり上げ上からどかす。

「で？ キュルケはどうしたんだい？」

出来るだけ冷静を装いながら、どうして来たか尋ねる。

「ちよつとね。ダーリンに話を持ってきたのだけど。」

「宝探しか？」

キュルケが少し驚いた顔をする。

「どうして？」

「んゝ商人から地図を買い集めていたら、誰だってわかるよ。」

俺は少しあくびをする。

「貴方も付いてきてくれるの？」

俺はうなずく

「俺はもう準備は住んでるし。」

「おっばい見せろ」

「そうだよ」

キュルケが発火の呪文で、二人を折檻する。

「おゝ燃えてる燃えてる」

俺はそんな二人を、巻き込まれないところで傍観する。

数分もすると、正座したサイトと、準備を整えたギーシュがいた。

「さて準備もで来たみたいだし。はい、我らの食糧供給係のシエスタさんどうぞ。」

メイド服に身を包んだ黒髪のシエスタさんが俺の影から出てくる。「ちよつと待って、平民を連れていくの？」

俺は軽くため息をつく、いつの間にかタバサもいるし・・・

「飯はどうするんだ？下手したら、野宿だし保存のきく食料は、そろえていないんだろう？」

そういうと、皆は解ってくれたようだ。

「さて、爺さんに許可取ってあるからさっさと行くべ？」

「一体、いつの間に・・・」

ギーシュが苦笑いをしている。

廃墟の寺院で、俺たちは息をひそめる。

「まったく、オーク鬼の住処だとはね？」

ん？・・・なんか見たことある、オークさんがいますよ？すっかり忘れていたけど。

「お前等、ここで隠れとけ。」

俺はそういうと、オークの前に飛び出していく。

「久しぶりだな？」

グルルルと一体のオーク鬼以外は俺を威嚇する。

大方、恐れを抱いているが、人間に恐れを抱く理由がわからないのだろう。

「お前は・・・ヴァリエールの時の・・・」

そのオークは周りに合図を出し、下がらせる。

「そういえば契約の人狩りだが・・・」

オークは思い出したように話を持ちかけてくる。

「ああ、それならあと数カ月後というところだね？」

「つか、今まで居場所が分からなかったから、連絡どうしようかと悩んでいたのだが。」

「アレ・・・大丈夫なの？」

物影に隠れていた連中がこっちに来る。

「大丈夫、こいつは俺の友達だ」

「友達ねえ。」

オークは苦笑いをうかべる。

「ユニーク」

あのく？タバサさん？ユニークってなんですかユニークって。

「信用できるの？」

キュルケは心配そうにつぶやく。

「信頼？何それおいしいの？」

「へ？」

サイトが間拔けな顔で言う。

「確かに、俺以外の連中は虎視眈々と、あんたたちのこと狙っているからなあ」

みると、じーっとオーク鬼達がこちらを見ているのがわかる。

「今日はここで泊るか、見張りは俺がする」

「可哀想だが、それがいいだろう」

ねえ？オークさんは、何を指して可哀想って言っている？

「そういえばさ、あんたの名前聞いたことなかったんだけど？」

「ん？そういえばそうだったな。俺の名前は、オルトレウスというんだ。」

やだ、レウスなんてなんてかっこいい名前でしょう。

「んじゃ、よびなオルトな？」

「「「まてい」」」

だってさ、レウスって呼んじゃうと空の王者（笑）思い出しそうじゃね？

「皆どうしたのさ？」

「いや・・・その・・・何考えてたさっき？」

はて、口に出しただろうか？

「気のせいだろ？」

俺はそういうと、軽く欠伸をする。

「サイト、俺ちょっと仮眠取るから、皆が寝るとき起こして」
そう言って、俺は意識を落とした。

見張りをしていると、タバサが起きてきて隣に座る。

「もう睡眠はいいのか？」

みると、彼女の額には汗が付着している。

気温は決して高くはない、湿度も高くないので寝汗は書かないはずだ。

どうやら、悪夢でも見たみたいだな。

「いい。」

短く答えるいつも通りの彼女の声も、今は弱弱しく聞こえる。

「悪夢でもみたのかい？ ガリア王家の元お姫様？」

いきなり鈍重な杖をつきつけられる。

「どうしてそれを・・・」

「あれだけ焦っていたら、俺じゃなくても君のことを調べるさ。」

少々、無茶をやらかしたけどね？

つつても、エルが魔法学園の個人情報載っている書籍を探し出して、屋敷の位置を探り。

俺が侵入して、乱心されたタバサの母にいつの間にかあってきただけなんだが。

「葉を盛られて、半幽閉状態、母を人質に取られて、騎士として働かされているか・・・」

「そこまで・・・」

タバサの驚きをよそに、俺は饒舌に語る。

「ガリアの無能王と呼ばれているらしいな？」

「ええ・・・」

一気に、タバサの顔が陰しくなる。

「正直、あれがなんで無能と呼ばれているのかわからん。」

調べていてわかったんだが、情報統制や政務に関しては有り余るほどの才能を持っているな。

「・・・・・・」

「さてと、夏ごろにお前の母親を治す薬を受け取りに行つてこようと思う。」

タバサが息をのむ。

「出来るの？」

いつもなら、復讐しか宿っていなかったその青色の双眸に希望という名の強い光が宿る。

「出来ると言い切りたいところではあるが・・・・・・」

流石に、それは保証しかねるなあ・・・・・・

「心配なら、夏と一緒に行こうか？サハラへ」

「砂漠・・・・もしかして、薬をつくれるのはエルフ？」

気づいたか・・・・

流石に気づくよなあ。

「まあそうだな」

俺は紅茶を入れると、タバサに渡す。

「ありがとう・・・・でも、どうして急に？」

「あゝそうだな？俺は年内中に死ぬ。だから、自分にできることは終わらせときたいんだ。」

これが俺の本心、いくら力がチートだろうと、死ぬときは死ぬ。

つうか、かけらの時点で死ねたんだから、本体と戦ったら確実に死ぬ。

「死ぬとわかっていて、逃げないの？」

「では、お前の盛られた薬をお前の母は飲まなかったのか？」

そう、いとしいものを守るためなら人は自分がどうなろうが関係ないのだ。

「貴方が逃げると、貴方のいとしい人が死ぬの？」

「んゝ少し違うな、この世界か俺の命かを天秤に掛けたただけだよ？」

少し体がぶれる。

俺を構成しているプログラムが安定していないなあ。

本体が（・・・・）冷静になりすぎて、プログラムが過剰反応し過

ぎているのか？

「今、体が」

「あゝ今見たことと、話した内容は皆に内緒ね？」

俺はそういうと、タバサに寝るように促す。

さてと、本体はうまくいっているかな？

第二十五話：あきらめた主人公は………（後書き）

サハラに到着したアレオス
そこで行われた密会の内容とは？

次回

【サハラに咲く一輪の花】

フラグを建てろガン〇ム

軍師「とかどうよ？」

アレ「まてい」

軍師「待ちたくない」

アレ「読者のみなさん先ほどの嘘予告ですよ？軍師が血迷っただけです」

軍師「そういうことにしておくか「そおい」」

第二十六話：プログラマーはサハラで出会う（前書き）

すいませんでした。（土下寝）

第二十六話：プログラマーはサハラで出会う

どうも、今日は身一つでサハラに来ています。

実は、いつの間にか分身体置いてこっちに来ていました（テヘ）
というのも、タバサの必要としている薬について、動ける時間を
考えると、チャンスは今回しかなかった。

夏の休暇を使ってもよかったのだが、嫌な予感がひしひしとする
ので、タバサを連れて薬を受け取りに行くだけにしたいのだ。

「蛮人が何故ここにいる。」

人の住む場所から一番近い、エルフの集落に到着した。

到着した瞬間、囲まれたが・・・

「え・・・エルフ……！」

俺は普通に驚いておくことにする。

「あ・・・貴方は！」

ん？

同じ年ぐらいの、綺麗なエルフの少女がこっちを見て驚く。

「数年前に、ネフテスにきていた蛮人の方ですよね？」

俺は少し苦笑いをする。

なれたとしても、少しいらっとくるな・・・

「そうだけど、あのときあったことが？」

「おじい様が昔、評議会にいて遊びに言ってるときに・・・」

なるほど、あの場にいたと。

「大人からは、みに来てはいけないといわれていたろ？」

「私、蛮人と呼ばれている人に興味があったから・・・」

真っ赤になってうつむく、彼女を眺める。

「なるほどねえ。あの時、君は俺のことをどうみた？」

「正直、評議会のほうが蛮人に見えたわ。」

なるほどねえ。

「友好的な貴方に、殺気を放って貴方を・・・」

俺はにやりと口の端を上げる。

「君の眼に映った俺と、あの時の俺の考えは違うかもしれないよ？」
少女はまっすぐな瞳で俺をみる。

その瞳は完全に俺のことを信じ切っている瞳で……

「俺の負けだ。」

ため息をつき、少女以外の大人が精霊魔法を使おうとしているのを感じて『プログラム』を起動する。

「な……精霊たちが話を聞いてくれない。」

精霊魔法は、精霊たちに魔力を渡しお願いして発動する魔法だ。

その精霊たちに、俺のことを精霊と認識させると、俺に対する魔法攻撃はとんでこなくなる。

「なあ？何をそんなに焦っているんだ？」

「悪魔め！」

どうやら、俺のことを『虚無』だと思っているようだ。

まあ『虚無』も持っているわけだから、間違いではないが……

「『我、雷をまとう格闘家なり』」
いかずち ストライカー

俺の右腕が電気をまとい、バチバチと音をまきちらす。

「精霊……」

少女の驚く声が聞こえる。

『神様に似てる。懐かしい感じ……僕達、貴方に力を貸す。』

俺の周りに集まった精霊たちは、神力を知っているのか俺にそう囁きかけてくる。

「蛮人……お前は一体……？」

軽く深呼吸して、いつもの笑顔に戻す。

「俺も、精霊魔法使えることは驚きなんだけど。」

いよいよ、チートも極めてきたよなあ

しみじみとをう思うわ。

しかし……集落にしてはやたらと技術が発展しているように感じる。

建物に関しては、俺の目で見た限りは魔法を使わずに強度がある

という状態だし……

「とりあえずまあ、どこかで一泊させてくれね？」

エルフたちの殺気が、一気に穏やかなものとなる。

なるつつつても、あきれているだけかもしれないが。

「ありがたく泊めてもらうわけだが、あいにくと自己紹介していなかったな。」

俺はそういうと軽くお辞儀する。

「俺の名はアレオス・ラ・ラインバース。君たちが蛮人たちの村をまとめる……まあトップのようなものだ。」

「私は、エリー。貴方、結構な身分なのね？」

「ただの張りぼてさ。」

俺は苦笑いをする。

しかし、照明にガス、水道までそろっているなんてなあ。

「ふむ、エルフと共にあるあり方もいいかもしれないな？」

おっと、考えが表に出てしまったようだ。

無言というのは、つらいなあと思っただ話のネタに爆弾投下したわけではないよ？

「ブリミル教で私たちのことは、悪魔ってことになっているんやなかったかしら？」

よく知っているな、このエルフ娘。

「俺はあんなインチキ宗教なんて、信仰していませんよ？」

「へ？」

「俺は始祖うんぬん関係なく、神と知り合いだしねえ。」

あの駄神見て敬えと？

無理無理無理、ありえねえ！

しかも、他の神もあいつが毛嫌いするほど（死神除く）だから、受け付けないこと間違いなし。

「ああ、あのとき連れて来ていた……あの大暴れした人？」
俺は気まぐれながら、うなずく。

「うん、あれ。」

流石にあれのことを、神の頂点にたつものと言い切れない不思議。

「エリー」

いきなり窓を突き破って、男性のエルフが入ってくる。

イケメン氏ね。

そのイケメンは武器を掲げると、俺に切りかかってくる。

「っち」

俺は腰に手を当てようとして、刀を装備をしていないことに気づく。

「『プログラム』」

影璃との戦いで使った、剣を大量に作り出し、自在に操るプログラムを使う。

「踊り狂え、我が剣達よ。『剣王結界』」

以前、名前をつけてなかったがいま思いついた名前をつぶやいた。

「精霊魔法が効かないからって、打撃わざか？」

一本の剣が相手の剣をはじき、尻もちをつかせると、剣達がそのつの皮膚の数ミリ上にとまった。

「悪魔め」

おいおい、何かにつけて悪魔っていうなよ。

この俺のどこが悪魔……

思い出されるは傭兵に対する拷問。

「あゝ、俺のどこら辺が悪魔？」

「まずその、蛮人が使う魔法じゃない形式の魔法とか、精霊魔法ですらないよね？」

俺は少し気まづくなる。

「これねえ」

剣を一本舞わす。

「簡単な手品だ。」

俺は剣を消すと、椅子に座る。

「まあ人間ではないってことは否定しがたいがな？風の精霊さん」

俺の目の前に、風の精霊が現れる。

見た目ただの空気だが、少し厚みを持っている。

何故そんなことが分かるのかは、まったくもって不明だが。

『なぜ、我に話を振る。というより、幼い精霊から神が来ていると聞いてきたのだが？』

あゝ風の精霊むだあしドンマイ。

「神？」

『ふむ、単なるものよ。』

「ん？」

『神の加護と、神の力を両方持っておるな？』

なんでこんなに鋭いんだよ、風の精霊。

「精霊様？今言ったことは本当ですか？」

うなずいたのかどうかわからないのだが、うなずいたのであろう。

「なんだって・・・」

男は冷汗をかいている。

「安心しろ、神の力を使えば人の身であるこの体は耐え切れず朽ち果てるんだ。こんなしょーもないことには使わん。」

それが、あんまり神力を使わない理由だな。

『水の精霊に体のほうは頼んどいて見る、しかし単なる者・・・』
「解ってるさ。」

説教うぜえと思いながら聞き流す。

仕方ない、要領をえなかったから一から話すか・・・

「・・・というわけだ。」

「そんなことが・・・その・・・あるのかい？」

正直っ気飛ばした話の中で、名前を聞いたが男の名前を（イケメン限定）憶える気にはないのでAとしておく

Aがどもりながら、そう言った。

「そんなことを置いといてだ。ネフテスに俺は行きたいんだが地図なんかあるか？」

「ちよっとまってて。」

彼女が家の奥に行くと、俺は少し息を吐く。

「エリーは苦手なのか？」

Aはすこし、考えながらそう言った。

「ああ苦手だけど、嫌いになれないタイプだ。」

Aは俺のことをじっと見る。

ポツと俺は顔を赤らめてみた。

「顔を赤らめるな、気色悪い。」

「っち」

エリーが地図を持って帰ってきたので、俺はその地図を流し読みする。

「で？ネフテスまで行ってどうするんだ？」

「葉をつくってくれるように依頼する。明日朝早いから寝るわ」

俺はそういうと、用意された客室に入っていく。

そんなこんなで俺のサハラでの一日が終わった。

まったく・・・あれ？

なんか今回、軍師の妄言が一つ実行されなかった気が・・・

第二十六話：プログラマーはサハラで出会う（後書き）

アレ「んで？ハートキャッチなプリキュアはどこいったよ」

軍師「あゝんゝ笑わない？」

アレ「OK話してみろ」

軍師「そのまま出すのもあれだし、少し捻って英語変換しようとしてBudとか出た時点で萎えた」

アレ「そのまま流れるその話」

軍師「書き終わってから天啓が舞い降りたから次の話こそ出す。」

アレ「お前に舞い降りた天啓がろくなものではないことだけはわかる。」

軍師「ハート、キャッチってね？」

アレ「ぎゃああああああああ」

第二十七話：これ本編でやる必要がある？（前書き）

すみませんでした

プリキュアの改悪二次創作に怒りを覚える人は見ないで飛ばしちゃってください。

初めに言っておきます

この話は、作者の悪ノリが9割、思い付きが1割で構成されています。

第二十七話：これ本編でやる必要がある？

ごきげんよう、日も昇らないうちからの出発です。

砂漠の温度は極端に低いので、この時間に起きてくるエルフたちはいません。

俺の予想だと、まっとうに歩いて一週間、マッハで有頂天状態で2日か・・・

「それはいいとして、なんでお前等がいるんだYO」

俺の隣には、重装備のエリーとAが立っていた。

頭いてえ。

「え？私は貴方に興味があるから。」

「だそうです。」

Aも苦勞するねえ。

さっさと、告っちゃって彼女にしちゃえばいいのに・・・。

「お前等・・・俺と共に行くというのがどれだけ危険かわかっているのか？」

個ですらわかり合おうとしない連中が、いるかもしれない・・・

つかいるよなあ・・・鬱だあ。

「解っているわ。だからこそよ。」

「この世界が減ぶ、それはエルフにも関係のあることじゃないか？それなのに君に・・・たかが神に選ばれただけの蛮人にすべてをゆだねることはできないんだよ。」

Aよ・・・お前はエリーと共に来るだけじゃなかったのか？

「好きにするといいさ、つっても今回の来たのは昨日の話を抜きにしてください？」

俺は少し目を閉じる。

「『プログラム』」

目の前に現れるは、昔のゲームのポリゴンだった。

なんて言ったつけ・・・？そうそう、MHP3rdだ。

そいつに個体値と攻撃力（移動用なので正直知らない）そして知能（戦闘用A I）を与える。

「出でよ我が竜（俺の中の中二がうづく）」

目の前に現れたのは巨大な……とことん巨大な竜だった。

「何よこれ。」

「何って俺の竜、ジエン・モーランド。ジエンちゃんって呼んでやってくれ。」

「ちゃんってメスなのか？」

俺はにやりと笑う。

「そう作った。」

え？何そのマジで言ってるのかよこの化け物みたいな視線。

「行くぞ」

ざあと砂をかき分けて竜はものすごいスピードで進んでいく。

「あのさ……巨大な生物は動きが遅いって常識は？」

Aが顔を真っ青にしながらそう言うので、俺は笑顔で答える。

「ないな、俺から言わせてもらえば、魔法がある世界の時点で、常識なんかないからな？」

「言いきるね。」

当たり前だ。

空気が人型になったり、水が人型になったりする世界に常識があるとしても？

「で？エリー君の指示通りに、進路を決めているがどこに向かってるんだ？」

「えっと……プリキュアと呼ばれるエルフたちが住む集落よ？」

ぞくり、俺は背中に何かよからぬ寒気を感じる。

「うんノンストップで行きたくなった……」

「えーなんでえ」

なんでもくそも、プリキュアファンを敵に回すからだよ。

絶対に。

この手のネタは嫌な予感しかしないんだよお……

神の見えざる手（笑）が来る、間違いなくくる。

「でも残念、もう付いたわよ？」

な……ん……だ……と……

「兄者、兄者。巨大な何かがここに向けて。」

いきなり入ってきた弟者を私は横目で見ながら、立ち上がる。

「落ちつけ、弟者……巖殿いつきのもとに行くぞ。」

「兄者……解りました。」

心臓パフュームを取り出すと、私たちは巖殿のお屋敷まで歩み始める。

ちらりと見たが、遠くにいても人より大きい……

もしかしくなくても、プリキュア始まって以来の難敵かもしれないなあ。

「プリキュア……集積回路実装工程におけるアンダーフィルやモールドに用いられる熱硬化樹脂の硬化前処理段階として、ガラス転移点を僅かに下回る温度にて予備硬化を行う工程の総称である。

（参照…[Wikipedia](#)）」

「なに言っているんだい？」

Aよ……流石に今回は俺の胃がヤバいかもしれない。

「お前、プリキュアを見たことあるか？」

ちなみに俺の世界でも、プリキュアが放送されていたが。

いつの代だか、キュアナージャとか言うのが出てきて打ち切りになったなあ。

【軍師…もう許してやれよ。あれはシナリオが悪かったんだからさあ。】

という戯言は置いといて……

「いや、なんだあれ？」

進路上に、ムッキムッキなエルフが二人現れる。

「大地に咲く一輪の花、キ〇アブロッサム！」

「海風に揺れる一輪の花、キ〇アマリン！」

おぞましい光景がそこに広がっていた。

詳しく言うと、胃の中の内容物を全部外へだしそうだから簡単に言うが、世紀末救世主伝説的な何かに出てきそうな人がプリキュアのあの服を着ていると思ってくれ。

「これ以上先には」

「進まず、竜め」

止まらず行けと言いたくなったが、後々めんどろなことになるそうだから、非常に不本意だがジエンを止める。

「ちょっと待ってください」

エリーが降りて、二人に駆け寄っていく。

「なあ・・・俺も降りないとだめかな？」

「駄目だろう。正直、俺もおりたくはない」

Aとの意見が初めて一致した。

「二人とも、降りてきなさい。」

俺たちは顔を見合わせたため息をつく、と、ゆっくりと降りていく。

「エルフ二人に・・・蛮・・・人？ではないな、何者だ。」

いきなり拳がとんできたので、俺はひらりとかわす。

「ちょっと待って」

聞く耳を持たない二人を見て、俺は少しため息を吐く。

「『プログラム、剣王結界』」

もう前口上とかいらん、面倒くさい。

幾千もの武器が、俺の周りを舞い始める。

「その程度か」

ブロッサムは一本一本殴りながらこちらに近づいてくる。

しかも、驚くことに刃の部分のみを殴っていたり・・・

マリンはマリンで剣戟の中を突進しながら、こちらに一気に近づいている。

あ・・・吹き飛ばされた。

「おいおい、なんだあれ。」

Aよ・・・それは俺のセリフだ。
しかしまいったな・・・

剣王結界を単体でしかもごり押しで抜けてくる攻撃か・・・影
璃並みの実力者と見て間違いないだろう。

突進はともかくとして、問題はブロッサムだなあ。

「『プログラム』」

使い慣れた武器、刀を創造する。

「む？」

俺との間合いがわかったのか、いったん二人が距離をとった。

「ほうそれがお前の武器か。」

性能は、いつも使っている刀に劣るが、これはこれでいいものだ。
「兄者・・・何故、剣の舞う部分から少しずれた所におられるの
ですか。」

剣王結界の外、3 mの位置にブロッサムはいる。

「馬鹿者、ここでもあやつの間合いなのだぞ。」

「ふん、兄者は弱虫だな」

もうどうでもいいよ、お前ら見てるとSAN値がゴリゴリ削られ
ていくんだよ。

突撃してきたマリンを、剣王結界に命じ俺のもとまでたどりつく
ようにしてある。

「まて弟者。」

俺は目を細め、突進を・・・右腕で持った刀でガードしつつ、
左腕で首筋に手刀を当て相手の意識を奪う。

本来は刀は片手で持てる重さではないのだが、俺が作ったからな
んでもありだ。

「弟者あああああ」

もういい・・・

ん？

よく見ると、マリン（笑）がすっぽんぽんになって・・・
あれ？おかしいな・・・目の前がゆがむ・・・

「アレオス？」

あ、無理だ。

筋肉、筋肉、筋肉、筋肉。

ムキムキなフリル！

可愛らしい衣装に身を包んだ世紀末！

筋肉、筋肉。

「ハッ」

今まで俺は何を・・・

目覚めるとそこは懐かしい布団と、畳の感触。

そして鼻孔をくすぐる和の匂いだった。

「目覚めましたか？」

俺は少し驚く。

そこにいたのは、明堂院いつきにクリソツ（死語）だった。

クリソツというのも、耳がエルフ耳だったからだ。

「家の二人がいきなり攻撃を仕掛けたようで、誠に申し訳ございませんでした。」

俺は状態を上げると、吐き気とめまいを気合いで抑えながら笑顔をつくる。

「蜚人である俺がいきなりここに来たんだ。それに彼らでいいかな？」

「ええ」

俺は安心する。

あんなのが彼女等だったら、今すぐ頸動脈を切って自害するところだった。

「それに彼等は俺の気配を感じて攻撃してきただけだからね？えっと・・・」

「厳だよ。」

ああ彼女の笑顔がまぶしい

「アレオス？顔がゆるんでいるけど？」

「ああ、いたのか・・・」

エリーに緩んだ顔見られたと思うと、一気に冷めた。

「ちよっと、対応違いすぎない？」

「そういえばジエンは？」

あのでかぶつを片づけた記憶がないのだが・・・

「集落の外でおとなしくしてますよ。」

よかった。

「では、僕はあの二人のお仕置きがあるので、行ってきますね？」

そういうと、いつきは部屋から出て行った。

「マリンとか言うのに、勝ったと思ったら急に気絶したのはなぜ？」

俺は思い出したいくない記憶を探る。

「たぶん、俺のS A N値が0になって発狂する前に、自己防衛本能が働いて意識を飛ばしたんだと思う。」

我ながら都合のいい体だ・・・

「助けてくれ」

Aが飛び込んでくる。

その形相は・・・危機迫るものがあつた。

「男が鞭うたれている音が・・・」

俺の中でのいつきのイメージがあああああ

Aと一緒にがくがくと震える。

「責任者出てこいやあああああ。」

一方そのころ責任者。

「これどうよ？ 駄神」

「いいんじゃない？」

ふーと、駄神の前にいる男がタバコの煙を吐きながら・・・

「あ、それ王手ね？」

「ちよっと軍師たんま」

将棋を打っていました

「はあはあ」

「いきなり叫びだしてどうしたの？」

俺は軽く深呼吸すると、エリーに笑顔を向ける。

「いやあ何、ちよつとさく・・・神に殺意がわいたただけだから。」
さてと。

「どう言う話に落ち着いたんだ？」

「えっと、今晩はここに泊らせてもらうことになりました。」

俺はそれを聞き、少し安心する。

というのも、ハルケギニアに来てから初めての久しぶりの（言葉
おかしいぞおい）畳だからなあ。

「妾にも少し和を味あわせてくれんかのう」

影から、影璃の首がによきつと生える。

「ぎゃああああ」

エリーがそれを見て叫び声をあげた瞬間、叫び声をあげる。

全くこれが驚くようなことか？

これを見て叫び声をあげた奴は・・・・・・・・ん？

「何事ですか。」

ムキムキな二人を連れたいつきが飛び込んでくる。

「何と面妖な。行くぞ弟者」

「応、兄者」

俺は嫌な予感がしたので、影璃を引っ張り上げ・・・・

「チェストオオオオオ」

タツクルからの回し蹴りで二人を落とす。

「あぶなかった・・・また意識を失うところだった・・・・」

「必死だね？彼女は一体何なんだい？」

いつきの言葉で正気に戻る。

「ああ俺の使い魔で影璃つつうんだ。」

「使い魔？ばんじ「ストップ」」

見ると、影璃が殺気だっているように見える。

「ぬしらエルフがどれだけ偉いのか、妾は知らんが・・・・妾を蛭

人と呼んだその口粛清「はい、お前もストップね？」

ぽふと、影璃の頭をたたく。

「なぜじゃ。」

「交渉に必要なのは立ち位置だ。お前みたいにいちいち切れていたら、始まらない」

俺は静かにそういう。

「悪かったな？ つうかこいつ等はなんなんだ。」

「心臓掴みプリキュアですよ？ 何の呪いか、僕以外男ですけど」

まさか・・・うんOK何の呪いかは理解した。

ハートキャッチね・・・

いつき以外、男っていうのもあの汚物の趣味丸出しだろ・・・

「それで、アレオスさん？ 貴方が何しに来たかは、このお二方から貴方が気を失っている時に聞きました。」

すつと、一枚の封筒が渡される。

ほう、エルフの土地には製紙技術が普及しているのか・・・

「これは？」

「老評議会に話を通すための書簡です。ネフテスでの貴方の行動がある程度保証してくれるでしょう・・・」

最高で監禁が軟禁に代わる程度だろうけど、ありがたくもらっておくことにする。

「君にはいいことないはずなのに、どうしてだい？」

「エルフからの世界を救う者に対しての贈り物だと思ってください。」

俺は苦笑いをするしかない・・・

話が大きくなってるなあ

ハッ、まさかこれがうわさ効果か？

「救えると決まったわけじゃないけどね？」

そういう俺の声は小さく、頼りなかった。

第二十七話：これ本編でやる必要がある？（後書き）

キュアサンシャインが好きすぎて途中で、改悪するのやめたという・
・・・

ごめんなさい。途中で切れているのは、これ以上は書くに堪えなかったんだ・・・・

これ以上書くと・・・・・筋肉ムキムキな二人と・・・・・

ああああああああああああ（軍師終了のお知らせ）

追記・ちなみに途中のwikiは何故か知っていた用語です。

第二十八話：ゼロ戦（前書き）

相も変わらずいい加減なだつぶ〜んですではどうぞ
今回はサイトの宝探し編です

第二十八話…ゼロ戦

どうも、宝探し組に交じっているアレオス（偽）です。

「ここでもなかったわね。」

キュルケが寺院をあさっていたが、どうやら真鍮の安物しか出てこなかったようだ。

「次で最後になるんだけど・・・まとうだけで空がとべる、だって？」

「『竜の羽衣』か？確かタルブの村にあるんだっけ？」

俺の声に、驚いたようにキュルケが目丸めた。

「知っているの？」

「ん、まあな・・・」

歯切れの悪い返事を返した後、タバサの攻めるような視線が来る。

「そういえば、オルトは？」

昨日までのオーク鬼の気配がなく、オルトの姿も見当たらない。

その代わりに・・・茶髪で爽やかな感じの青少年がいて、何かをアピールしている。

「まさか・・・オルトか？」

「やっと気付いたのか。全く」

驚いたな・・・オークが人間大の大きさになるなん・・・んゝ
韻竜は精霊魔法で人間化するから、オルトもできるのか。

これで納得しておこう、何か深入りすると怖いから。

「あゝ」

ん？シエスタが何か言おうとしている。

「実はそれ、私の家の家宝なんです。」

「なーんだ、それなら意味ないじゃん」

シャラップサイト。

俺はサイトの腹をけると、にっこりと笑顔を向ける。

「では、お邪魔してもいいかな？」

「何を考えているの？」

珍しいな、タバサが俺に聞いてくるなんて。

「もしかして、とうかもしかしなくても、サイトのためになるかもしれないからだよ？」

「何を言って・・・」

俺は軽くサイトに、ウインクすると軽くわらう

「どうするんだい？行くのかい？」

ギーシュの声にせかされて、俺たちは行くことを決定する。

風を切って飛ぶ風竜の上に乗っていた。

この世界の人間って、よくこれに乗って平気だよなあ・・・

横目でわいわい騒いでいるサイトを放置して、俺はオルトの横に座る。

「オルトおー」

「なんだ？アレ」

オルトはつまらなかったのか、俺のことを快く迎え入れてくれた。

「つうかアレお前、本物じゃないだろ？」

俺は少しドキッとする。

「一瞬だがお前の存在感が消えたのを確認してな。」

もう苦笑いをするしかない。

「俺はあいつの分身体だ。つっても、思考と記憶は共有しているけどな。」

「そうか・・・。」

オルトは少し速度が出過ぎていたのか、あわてて手綱を引く

「俺から声かけたのに、俺の話になってんだよ。オルト、お前・・・力を隠しているだろ？」

少し目を細め、俺は笑う。

「あいつも聞いているんだよね？なら・・・俺の能力は浸食空間を作り出すこと。」

はあ？

「んゝ軽い空間を作り出して、その空間内にいる物体を水晶に変えることができるんだ。」

俺は少し、その言葉に寒気を覚える。

こいつと戦っていたら、確実に俺が負ける。

そう確信したからだ。

「何怖い顔をしている？」

「いや、周りがチート過ぎて困るって話だよ」

感情で使える魔法が変わるものや、伝説の属性、伝説の使い魔に、影の姫、さらにはアルテミットワンに似た力を持つオークか……。あれ？俺のプログラムと、神力そして虚無が当たり前のような気がしてきた。

「チートって……お前ほどのチートな存在いるのか？」

お前だよ。

「ついたみたいですよ？」

何やら、爺さんが変人みたいな話が聞こえていたが、気にしないでおう。

そして、『竜の羽衣』のもとまで案内される。

「こ……これは……」

「知っているのか？雷電。」

「ああって何この流れ？」

うち、このネタを知らないとは……。今の若もんはあ

【お前も大して知らないよね？】

「いやしかし、話には聞いたが、こんなものが本当に飛ぶとでも？」

この価値が解らないギーシュは、そうつぶやいている。

「まあそうね。一回も飛んだことないそうだし、出鱈目……」

まあ燃料がないから仕方ないけど……

意外とスピリタスぐらいの度数の酒入れたら動くんでね？

あゝ無理か……。比重と粘土、発火点、発熱量すべてが違ってくるからなあ。

「それはそうと・・・シエスタ？サイトを前前の爺さんの墓に連れて行ってやってくれないか？」

さっきのやり取りで元気づけたはずのサイトが、茫然とし始めたので、そういう提案をする。

「はい、解りましたけど何故？」

「俺はこいつ等の相手をしておく。」

俺はどきっと、ゼロ戦の前に座る。

「アレはこれがサイトのためになると言っていたね？」

ギーシュがそんなことを言い始める。

「これをガラクタだと思うか？」

「細かく作られているみたいだけど、魔力も込められていないし、所詮鉄屑じゃないのかい？」

ひどい言われようだなあゝ

「おいおい、こいつは魔力を動力としない、機械というものなんだっぜ？」

「機械？」

俺は満足げにうなづく。

「魔力の代わりに、別の力を動力としているんだ。」

「そういうのなら、飛ばしてみてよ。」

俺は気まづくなる。

「実はさ・・・その魔力の代わりになるものがないんだけど？」

「は？」

俺は微妙な顔をする。

その時、シエスタの妹が迎えに来たので、三人を無理やり押し付けて俺はゼロ戦の前に座る。

「なあ、サイト」

しばらくして、帰ってきたシエスタとサイトをみる。

「佐々木 武雄海軍少尉はさ、戦争のないこの世界で幸せに暮らせたんだろうか？」

サイトは少し驚いた顔をする。

「お前、ここのこと知って……」

「ああ一応な。だから、ついてきたんだけど。」

「あの……アレオス様って一体、何者なんですか？」

シエスタも疑問に思っていたのだろうか、俺にそう問いかけてくる。

「俺か？俺は『』だ。」

この世界に来て初めて、本名を使った気がする。

「お前そんな名前だったのかよ。」

「いつてなかったっけ？」

俺は悪い悪いというと、ゼロ戦に目を向ける。

「『竜の羽衣』か……」

「これ、ゼロ戦だよな？」

俺はうなづく。

「正確には、零式艦上戦闘機六四型だけだな。」

しかし、こうも状態がいいと、飛びたくなってくるなあ。

サイトが左手で、ゼロ戦に触れる。

「どうだ？動きそうか？」

まあ動くことは知っているし、動かなくても俺が修理しようかな？
エンジンの基礎知識ぐらいは頭の中に入っていると思うし。

「動くぞこれ、そうか……」

その後、サイト達はシエスタの生家にとまることになり行ってしまったのだが、俺だけはここにとどまった。

「おう、オリジナル」

「お疲れ様。『プログラム停止』」

なぜなら、本体が用事を済ませて戻ってきたからだ。

「さてと、こいつを解析してこっちで量産できるように設計図でも書くか。」

戻ってきてからいきなり、この作業は骨が折れそうだぜ。

第二十八話：ゼロ戦（後書き）

シルフィードっていったい何なんでしょうね？

原作では5人乗っけていたわけですが・・・

どうしても大きさと乗れる人数の勘定がうまくいかないわけで・・・

・

何なんでしょうね？

次回はまたエルフの土地に行きます。

話があっちこっち行ってます。

第二十九話：薬ゲットだぜ（前書き）

駄文です（キリ

第二十九話：薬ゲットだぜ

ん……

俺は目が覚めると、台所まで歩いていく。

「おはよう。」

「今日も早いのね？」

妻が作ってくれた味噌汁の匂いが、俺の鼻孔をくすぐる。

「パパ？」

息子が起きてくる。

少し音を建て過ぎただろうか？

でも、まあ久しぶりに起きている我が子を見れた、それだけで満たされた気分になる。

「ねえ、次はいつ帰ってくるの？」

その言葉で俺は、ハルケギニアにいるということに気づいた。

「ハアハア」

ホームシックか……今の今まで来なかったのが不思議だが……

・

やっぱり畳のせいかな？っと思う。

「つうか、娘のほう出てこなかったなあ」

家族の声を思い出せたことでも、よしとするかあ。

元気かなあ

あの悪夢（いろんな意味で）の里を出て、ジエンちゃんの上で砂漠を越えていく。

「昨日は疲れたわね？」

エリー？それは俺のセリフだ……

「もう、二度と出ないことを祈るよ。いつきさん以外。」
なぜかって？

決まっているじゃないですか……

『僕っ娘』が至宝だからですよ。

【なに言ってるやがる、二児の父】

「意外に、ジエンの背中にいたりして・・・」

やめてくれA、そんなこと言われると来るきつと来るって頭の中で流れるから。

「よびましたかな？アレオス殿」
はっ・・・

後ろから妙な気配がする。

俺はゆっくりと、後ろを見た。

「誰もいないよな・・・」

「兄者そんなことでは、密航してきた意味が・・・」

さてと『プログラム』

俺と、エリーとAを覆い隠すシエルターみたいなものができる。

「よしジエン・・・潜れ」

軽い振動の後、後ろのほうから悲鳴が聞こえた。

「なにしたの今？」

「んゝ悪霊払い？」

疑問を疑問で返す俺。

「悪霊って・・・」

私は何も知らない。

「んゝ流石にこいつでは近づけないよなあ？」

どうしようかゝん？

「とりあえず、考えがわからないので、エルフってみましたゝ」

俺の耳は今尖っている。

「幻惑？それとも幻視の魔法？」

にやりとしながら首を横に振るう。

「体をエルフに近づけただけですよ？」

「そんなこと出来るのかい？」

そういうAにこの言葉を贈りたい。

「出来るできないの問題じゃねえ。」

えっと『プログラム』

「やるんだよ」

『プログラム解除』

「今増えたよね？ね？」

「気のせいだ」

ことさういう、馬鹿なことに關しては、エルフより俺のほうが強いのだよ。

「さてと、現実逃避してないで、これからどうするかだ。」

「どうするかってなんだい？」

こいつ、エルフのくせに何も考えてないのかよ。

「ジェンのことだ、流石にこいつに乗ったままでの接近は危険だろ？」

俺は少し水を飲む。

「あゝ」

気づいたように、何かをAが考え始めた。

「何か小さいものをつくれればいいだけじゃないの」

その手があったか、ナイスだエリー

「ジェン、ストップ」

ジェンを止めると、俺は砂漠に降りる。

「正直MHネタ使っちゃったからかぶるのは……」

バクウとかどうだい？

駄目だ、奴らの動力がよくわからん。

「やっぱり想像力の乏しい僕には……無理だよ。」

「いいか？アレオス。忘れんじゃねえよ。お前を信じろ」

どこからか駄神の声が聞こえてくる。

さてと、ラーメン作ったし、いつでも来い。

「俺が信じるお前でもない、お前が信じるお前でもない」
俺の後ろに気配を感じる。

どうやら現界したようだな。

「お前が信じる「そおい!!」 あっち・あっち
ふう・・・任務完了。」

「アレ、今のなんなの？」

しらんし、俺が聞きたい。

まず、砂ってドリルで掘れるのか？

「なかったことにしてみただな。まあ解らんでもないが。」

だったら言わないでおうね？ A君？

「ん？ 船をつくればいいのか」

俺は小さな船をつくり、にやりとする。

「風の精霊さんたち、頼むこの船を浮かせてくれ。」

『合点承知之助』

古っ・・・解るやついるのかそれ。

ともかく、船が浮いたので一安心。

「よし、これで行くぞ」

ジエンをしまうと、大空へと飛び立っていく。

暑いから途中で日よけをつくったのは内緒な？

ついたな、ネフテスに何の審査もなく突破できた俺たちは、少し
落ち着いた感じの店に入っていく。

エルフの金は持っていないので、二人のおごりだが。

「やっぱ味付けも、俺の世界に似ているなあ」

貴族見捨てて、体完全にエルフ化してここに永住しようかな？

「何かよからぬことを考えていない？」

「いやただ、エルフになりたいなあって」

いゃん、そんな目で見ないで。

「出来るの？」

あ、そっちの意味で白い目で見た訳ね？

「出来るできない以前に、やっているから仕方ない」

俺は上品と云えない食べ方で箸（笑）を進める。

「どうやって、老評議会に突入するつもり？」

腹ごなしも終わったし・・・

「突撃☆ラブハートとか？」

「ハチの巣にされるわよ」

エリー寒気がすることは言わないでくれ。

「老評議会のメンバーが一人で歩いているところを・・・」

Aがぼそりとつぶやいた。

「知っているメンバーいないでしょ？」

普通ならな？

だけど、俺は二人と関係者一人を一方的に知っている。

「その案でいく。」

「「へ？」」

つうかなんで俺こんなに疲れないといけないんだ？

タバサを助けるって決めたのも、思い付きだし・・・

まあいいや。

さあ、悪だくみを始めようか。

こちらアレーク、潜入に成功した。オーバー？

と、ビダーシャルと呼ばれるエルフの後ろをとる。

さっそくターゲットを確認した。

今から捕獲に入る。

1・・・2・・・3・・・

「一狩り行こうぜ？」

言葉に深い意味なんかない、ただ言いたかったただけだ。

「な・・・」

俺はビダーシャルの死角を移動していく。

これは無能兵士にも・・・いやなんでもない。

「ビダーシャルだな？老評議会の？」

俺は短剣（さっき作った）をビダーシャルの首筋にあてる。

「蛮人か？」

ほう・・・

「限りなくエルフに近づけたんだがな？」

遊びで変身したままなのだが……

「いや感覚が、蛮人と近いのだ。」

感覚とききましたかあ。

なれちゃあいるものの、こう言わずにはいられない。

「流石はファンタジーとね？」

つうかこいつに話通すだけでよくね？

どうせ薬作るのこいつだし。

ヤバい心が俺かけてきた。

「同胞が最低でも二人は協力しているな？」

ビダーシャル……なかなか、おもしろい男じゃないか。

「それで私に何か用かい？」

俺は少し目を細める。

「老評議会に逢わせてくれないか？議員のビダーシャルさん？」

ざあっと鳥肌が立ち、寒気がしてきた。

なかなかどうして、いい殺気じゃないか……

こちらも、全力でお相手しよう。

「まあ座りたまえ。」

へ？

一気に、やる気がそがれる。

「君のことは聞いているよ？アレオス君？」

な〜んか、俺の知らないところで話がヌルヌル進んでいるんです
が……

なんだこれ？

お茶を出されたので、ゆっくりと口をつける。

ちなみに、ビダーシャルに敵意はないためAとエリーを呼んでい
たりする。

「さて、俺のことを聞いたのは誰からだ？」

「『神の代行者』に紛れ込ませた、エルフだよ。老評議会のメンバ
ー全員が君のことを知っている。」

マジかよ、こんなに苦労する必要なかったんじゃないか？俺
「なぜ・・・何故、隠しているのですか？」

「この世界を救う最後の望みが、蛮人というのを公表すれば・・・
・虚無に対する危険性が薄れると評議会が決めたのだ。」

「うち、老人はどここの世界も腐っているなあ。」

「ゆえに評議会へと通すことはできない・・・が」
ビダーシャルは少し笑う。

「お前の頼みなら、かなえる分だけかなえてやろう。」

「なんで、彼を評議会に通せないんですか？」

「全く、エリーはまとまりかけていた話をほじくり返す。」

「蛮人が評議会入りしちゃうと、いろいろエルフ内で憶測が飛び交
い、世界の滅びを救う救世主の話が漏れそうだからだろ？」

「まったく、我らが同胞でもここまで浅はかな者がいるのだな。」

俺とビダーシャルは息があったように、エリーを言及する。

「さて俺からなのだが、蛮人の国で『ガリア』という国があっただ
ろ？」

ビダーシャルの顔から笑顔が消える。

冷たい感じの顔、イケメンであることで睨まれたらぞっとする。

「その王に送った薬の解毒剤を、作ってくれないだろうか？」

「何を考えている。」

身も凍るような怒りの感情を込めた言葉に、俺は口笛を吹きたい
気分になる。

「実は何も考えていなかったり？」

「嘘だろ？何も考えていないのに、ここまで来たのか？」

A ややこしいと言わない。

「本音を言うとな、俺がいなくなった後にあの宗教家にいじられて
くないんだよ。」

ただそれだけ・・・俺はどうあがいてもガリア王家の問題まで
生き残れる気がしない。

ならいつそのこと、死ぬ前に仕掛けをしておいたほうがいい・・・

「その目……嘘ではないようだ。」
ほう……

「解った……評議会へは事後報告としておこう。」
評議会に突入して、『解ったこの世界は滅亡する。』ってやりたかったなあ。

残念だなあ

「これが葉だ持って行け。」

どこからともなくビダーシャルは小瓶を取り出し、俺に投げつけた。

「っと」

カレーにキャッチする。

「サンク、さてと……んじゃ、ビダーシャル元気だな？」

「君なら歓迎するよ。」

俺はにやりとして、ビダーシャルの家から出た。

「で？帰るのに数日かかるわけですが？」

エリー……もうめんどいから奥の手使わせてくれ。

「『プログラム…ワールドドア』」

初めからこれ使えばよかったんじゃない？と思うが実はこいつ、行ったことのある場所にしか指定できないんだよねえ。

というのも、プログラムで詠唱を短縮しているせいか位置指定がうまいこといかんのよ。

だから、記憶にある場所にしか行けない。

ちなみに、記憶の共有で知っている場所にも可能なのだが……

「まあ帰るか」

はじめてきた、エルフの集落に到着する。

「あまりにも濃かった……とくに……プリ……」

やめろおとおおA~~~~、思い出させるんじゃないいいい。

「アレはこれからどうするの？」

俺は少し考える。

「こっちにいて、あっちを任せておいてもいいのだけど、帰るよ。
一応話的にはめんどくさそうなことになりそうだし。」

【メタんなよ】

「そう・・・またね？」

「ああ」

俺はワールドゲートを出し、それをくぐっていく。

「よう、俺」

俺が声をかけると、ゼロ戦の前にいた奴が少し笑う。

「おう、オリジナル。」

その応答に、俺は少し頬がゆるむ。

「お疲れ様・・・『プログラム停止』」

さあてと・・・いっちょ作業でも開始するか。

第二十九話：薬ゲットだぜ（後書き）

本当は老評議会に突撃☆ラブハートしたかったんですけどね？
ビダーシヤルは俺の中では友好的なエルフだったのさ。

な・・・なんだってゝ

なんか、人とエルフを見下した発言をするが、本心では評価している人？的な・・・

さて次回は・・・番外でバレンタインデーと行きましようか

番外編・・・うん（前書き）

時間の都合上割愛し過ぎてわけわからなく。
マジ反省してますん。

今回は私も出撃します。

基本番外編はフリーダムに行きたいなあと

番外編・・・・・・・・・・うん

この世界にも、バレンタインデーみたいなものがあるみたいで、貴族の子女がなにやらこそそこそとやっていた。

「いやゝ、リア充爆発炎上しろよ。」

何故か軍師まで来ているし。

つうかお前この世界との接点ないだろ？

「やったゝ、はじめてもらえたぞゝ」

ぬか喜びしている、貴族に向けてにったりと軍師が嗤っている。

「マッカーサー・・・・・・・・」

「言葉間違えてるぞ？それは、某国から派遣された將軍の名だ。」

軍師が嗤うのをやめ、こっちの言葉でドッキリと書かれた看板を取り出したのが見えた。

見ていると、いつの間にか艶やかな明るめの金髪美少女に代わる。

「行ってくる。」

あいつ何がしたいんだよ・・・・・・・・。

軍師は、一人の貴族のほうへ歩いてゆく

「あんたみたいな、男にプレゼントやるやつなんていねゝから。」

うわぁ・・・・・・・・性格悪・・・・・・・・。

涙目じゃねーかあいつ。

「女の子からもらえた？私・・・・・・・・いや俺男だからね？」

言葉の途中で、青いフレームの眼鏡をかけた男に代わる。

追い打ち？まさかの追い打ち？

やられた貴族は、涙目になってどこかに走り去ってしまった。

「ふう、すっきりした。次はリア充を爆発炎上させに行くか。」

・・・・・・・・こっちにくなよ。

午後になっても、誰からもチョコがもらえさびしい子です、はい。

「お、ぎーs・・・・」

ギーシュを見つけたと思ったら、ギーシュが煙を吹きながらゆっくりと倒れていく。

「何が起こったし」

まさか本当に軍師が燃やしたのか？

「アレ・・・水。」

俺はため息をつきながら、プログラムで水をつくりだした。

「ありが・・・とう。」

「で、何があった。」

その瞬間、悲鳴が聞こえてきた。

「まさか・・・」

今日という日でまだ見てないのが・・・

「アリアだよ。彼女はなんだ、普通のクッキーだと思って食べたら・・・」

「爆発したのか・・・」

さっきの悲鳴はたぶん・・・サイトだろう。

「さっさと逃げるんだ、アレ。彼女は君を探していた。特別に作ったとか言いながら。」

俺は冷汗をだらだらと流す。

これが軍師ののろいか？

俺は二人の冥福を祈りながら身を隠すことにする。

まったく、私の才能はこわいわと、アリアは自己陶醉に浸っていた。

「まさか、実験で上げた二人ともが、おいしすぎて倒れるなんて・・・」

絶対違うと思うのだが、何をどうみたのか彼女はそんなことをつぶやき始めた。

「さあて、アレはどこかなあ。」

はっはっは、アレオス逃げてえええええ

うん逃げているのはいいんだ・・・

何故こんな時に限って、アリアの偏在がそこらじゅうにいるんだよ。

「まさか俺が見つからなくて、イライラしているとかか？」

「どうだっていい・・・逃げ切らなくては・・・」

「そう思い、身を隠しながら進んでいくと。」

「きゃ・・・」

誰かとぶつかった。

「あれ？」

メイド服姿の、リンがそこにいた。

「アレオス様？」

「呼び捨てでいい」

俺は短くそういう。

「えっと、エルと連絡とれます？」

「どうやら、俺を探していたようで・・・」

してもエルかぁ・・・俺が変身してもいいんだけど本人だし、エルの役目は一番古い分身体にやらしているからなぁ・・・。

「その前に隠れる場所用意してくんない？アリアにはつかまりたくない。」

切実な本音を言う。

「ん？」

「どうした？エル」

俺は、少し首をかしげる。

「いや、なんか本体が一人で戻って来って・・・」

「なら俺はアルビオンにいるわ。すこし、あいさつもしておきたいし。」

エルは解ったと短くうなずき、どこかに歩き始めた。

俺はそれを確認すると、ウエストウッドに向けて足を速める。

彼女は元気になっているだろうか？

俺はワールドゲートを発動させて、待機をしている。

ちなみに、魔力を以上消費するので、通常発動させっぱっていうことはないのだが……

「呼んだかい？」

エルの上半身がぬるっと現れた。

「うん、リンが探していたからね？」

全くこの俺がなんでこんなことをしなくちゃいけないんだろうね？

「恋のキューピットやりやならんだ……」

俺は少し口元を緩ませる。

「みーつけた。」

一瞬にして、背筋がゾクっとし……いやな予感が脳内を占める。

「はい、これ私からのプレゼント。」

受け取らないわけにもいかないので、受け取ることにするが……

・

もった瞬間から、拒絶反応が始まる。

ヤバイこれを食べると……

「どうしたの？」

俺は勇気を持って……いや、死ぬ覚悟でそれを口に含む。

ギーシュ、サイト……今、会いに行くぜ？

「久しぶり、リン」

「変ったわね、エル」

俺は少し苦笑いする。

「記憶がさ、戻ったんだよ。」

「そう……で今は生まれ故郷に？」

軽く首を横に振るい、それを否定する。

「やらないといけないことが、解ったんだ。」

「それは、貴方が傷だらけになってまで、やらないといけないことなの？」

傷は目立たないように隠し、行動も少々無理して怪我をしていないようにふるまっていたのに、まいったな・・・。

「俺等にしかできない。」

「そう、なら・・・がんばってね？」

手渡されたものを、まじまじと見つめる。

「これって・・・。」

真っ赤になっているリンをみて、俺は頬を緩ませた。

「わかったよ。ありがとな？」

番外編・・・・・・うん（後書き）

皆さんは、チヨコいくつもらいましたか？

俺はむっ・・・・・・おや誰か来たようだ。

に・・・義兄さん？

や・・・やめろ・・・わあああああああ

軍師の次回作にご期待ください【打ち切り】

嘘予告（一部本当）

初めて触れるゼロ戦にテンションが上がるアレとコルベール、彼等は何を思い何をするのか・・・

次回【俺の技術力が火を噴きますん】

第三十話：話は進んでないけど（前書き）

短いです。

第三十話：話は進んでないけど

俺は設計図の図面を書き終わると、眠い目をこすりながら立ち上がる。

「主？」

影から影璃が現れる。

「休まぬと、体を壊すぞ？」

俺は軽く微笑むと、プログラムで紅茶を作り飲む。

いつもの簡単な作業、でも今日は異常な頭痛が来ているのがわかる。

「もう壊れてるよ。心配しなくても。」

この言葉も正直どうかと思うのだが、これしか言いようがないのでこう言っておく。

「もう朝だなあ・・・」

夜明けが近いのか空は瑠璃色になり始める。

「綺麗だ。」

「のう、主よ。」

「ん？」

少し、首を後ろに向ける。

「少し変なものでも食べたか？」

ひでえなあおい、眠気でテンションおかしいのは認めるけど。

「ちよっとね？ たった4日なのに、非常に濃かったなあってさ。このまま、隠居しようかな？」

「主は、他人を見捨てて、隠居などできんだらうに。」
俺はフフと笑う。

「ご明察で・・・ん？」

この時間に目が覚めたのか、サイトがゼロ戦のそばまでやってきた。

「よう、サイト。おはよう」

「昨日いないと思ったら・・・」

あきれた感じで、サイトが頭を押さえてる。

サイトにあきれられるなんて・・・涙が出そう。

「燃料どうしようか？」

サイトがそうつぶやく。

「コルベールのハゲなら何とかしてくれると思うぞ？」

「あれ？お前、出来ないの？」

俺は苦笑いをする。

「専門が違う、一応前世でそっちもかじってたけど、あんまり得意じゃない」

「あんまりか・・・つまりはできると？」

あ、気づきやがった。

「魔法が使えればな？」

「？」

俺は苦笑いをする。

「魔力切れさ。竜も呼ばないといけないし、完全に俺の魔力すっからかんになるわけですよ。」

はふーとため息をつく。

「そうなのか？」

「主は力の使い方がとことんおかしいからのう」

おいこら待て、影璃。

まっとうに使った結果がこれだろうがYO。

「まあ、アリア達起きたら帰る準備しようか。」

俺は軽く腰を落ち着ける。

腰につけた刀の重さが心地いい。

「なあ・・・」
『。こっちに來てから、護りたい者がまた増えたよ。』

目から出た汗は、頬を伝い地面へと落ちてゆく。

空気を呼んだのか、影璃は影に潜っておらずサイトはゼロ戦のコックピットに入って遊んでいた。

「今回はちゃんと守れるかな？」

いつにもなく弱弱しい言葉……

それが強者^{オレ}という名の仮面をかぶった弱者^{じぶん}の本心だ。

「『プログラム…ウインドドラゴン』」

「おはろ〜」

起きてきた連中に向かって、声をかける。

ちなみに俺は、料理を手伝っていたりしているのだが。

ん？出来るのかって？

タルブ村はゼロ戦の影響か、日本食に似た料理が非常に浸透しているおかげで、俺でも料理が作れる仕様になっている。

「驚きました。貴族の方がこの地特有の料理を作れるなんて。」

俺はシェスタの母の言葉に、苦笑いをする。

「ちよっと特殊でしてね？」

トントントンとリズムをとりながら包丁で切ってゆく。

「……意外な才能ね？」

アリアがこちらをじっと見ている。

「そうか？よっと、実家では隠れて結構やってたんだけど。」

あきれたようなため息が聞こえる。

「ほらさ、お家がお取りつぶしになったときとかに、必要かなあ〜って。大体が、山賊か盗賊になるパターンらしいし。」

「ネガティブなところで、ポジティブねアンタって……」

「……意味はわかるんだけど、言葉の使い方間違っていますか？アリアさん。」

「いや〜、褒められてもねえ？」

「褒めてない。」

それを見ていた、ギーシュ達は。

「彼らの拳式はいつなんだろうね？」

「解らないわ。まさにブリミルのみぞ知るってやつね。」

「モンモンとギーシュはいつ（ry）」

「サイト~~~~!」

「ハハハハ」

といったやり取りをしていた。

そんなやり取りをすると、アリアが……

「で、いつにするの？」

ほら見ろ……

「いつも何も、まだ結婚するとか告白さえもしていないんだけど？
下手すると、政略結婚の可能性もあるしね？」

親父はヴァリエール家にもコネを持つほどの奴だし……
まあいいか。

「さてと、飯食ったらアレだぞ？学院に帰る準備だ。流石にそろそろ帰らないとまずい。」

「しかし、二匹も竜を集めるなんてね？」

二匹の竜がそこには鎮座していた。

「ん？暴れないのかい？」

心配そうなギーシュの声が聞こえる。

たいてい乗り手がいない竜は暴れるのでつないでないといけ
ないだけ……

つなぐのを俺が忘れていたのだ。

「大丈夫だ。こいつ等はおとなしい。」

俺が手を上げると、その手に向けて竜は首をすりつけてくる。

「な？」

「すごいわね。」

キュルケがそれを見ていて、哑然としている。

「……どうやったの？」

「企業秘密ってことで……つうかタバサの竜もこれぐらいい
けるだろ？」

タバサは今まで驚くときも顔にでなかったのに、少し目が開いて
いる。

「さてと、悪いけどこいつを運んでくれないか？」

二匹の竜はキューっとなくとしっかりとゼロ戦を足で固定しとび上がる。

「ねえあれに私たちが乗れば、楽だったんじゃない？」

キュルケ、それは言うなよ。

精神力切れで、ゼロ戦運ぶのが精いっぱいとか言えないしなあ。

「繊細な仕事押し付けてるわけだから、人を乗せるなんてさらに繊細な仕事押し付けられないでしょ？」

まあそんなことはないのだが、適当な理由をつけないとあいつ等は納得しないからなあ。

「どうでもいいからさっさと帰ろうか。」

俺も休みたいしね？

第三十話：話は進んでないけど（後書き）

アレとかアレとかあそこらへんのアレとかどうしようかと悩んでいます。

更新遅れてる理由がそれなんですけど・・・

たぶんですが、タルブ防衛戦以降オリ話√に入ります。

次回更新日5／1に決定いたしました。

予告…3人はそれぞれの日常を過ごす。

一人は戦いの準備に

一人は逢瀬

そして：最後の一人は？

第三十一話：それぞれの帰宅（前書き）

長いこと執筆をしていなかったせいで、駄文＋駄文＊駄文＝日本語
となってしまっています。

第三十一話：それぞれの帰宅

「やあイスミ」

俺は、そうボーイッシュな少女に声をかける。

「エル？ここに君が来るのは珍しいね。」

肩をすくめると、苦笑いをする。

「ちよっと、本体から話を受け取ってね？司教に逢いに来たんだ。」

「司教なら、もうすぐ戻ると思うよ？」

たらこ唇の騎士風の男、ゼイルが奥から現れる。

「ならのんびり待たせてもらおうか。」

俺はそういうと、軽く伸びをする。

「ところで、エルとアレって同じ存在なの？」

ふと、イスミがそんなことを尋ねてくる。

「まあ記憶の共有してるし、人格構成は丸コピーらしいなあ。」

「つか、製作者で本体であるアレオスと記憶の共有をする場合、思考を同調させるため自身の自我があるか、超微妙なところなのだが。」

「へえ。」

「そこにいるのは、エルか？」

司教が返ってきたのか、濃い声の男が入ってくる。

「アレからの言伝だ。一両日中にラインバースは独立国となる。」

『歪み』は：始祖祭だったか？まで現れないそうだ。」

「それは、アレオス情報か？」

「いや、『歪み』が自ら言っていたらしい。」

そうかと、司教は難しい顔をした。

「王と、『歪み』は一体何を考えておるのだ。」

「アレの意志は俺でもわからん、来るのは情報だけだからな。」

ただ：ただ一つ言えることは：

「あいつは世界を変えるぞ？もちろん悪い意味でだけだなあ。」

俺は少し含み笑いをする。

まるでそれは、プログラミングされた顔ではないみたいに、見えた。

俺は、エルが司教に報告に行くというので、暇をもらってウエストウッドの村に行くために森の中を通っていく。

空の上ということで、若干寒いが耐えられないほどではない。

「ここに来るのも、一年ぶりかあ。」

昨年、ここに来た時は『歪み』を探さないと行けないということ
で、あまり滞在できなかったんだっけなあ。

「あ、お兄ちゃんだ。」

珍しく、孤児院の子供たちが森で遊んでいたようで、一気に囲まれる。

「はは、久しぶり。」

俺は苦笑いを浮かべると、一人ひとり頭をなでてゆく。

「ティファは？」

「お姉ちゃんなら、買い物に行ってるよ。」

孤児院の中で、お兄ちゃんとしてふるまっている最年長の男の子をみる。

「それで、森の中に遊びに来たのか。見つけたのが俺でよかったけど、マチルダの姉さんにばれたら大目玉だぞ？」

マチルダの姉さんはよく、ラインバース領で逢うから解るんだけど、かなりおっかない。

よくあんな人間の手綱を親父は握っているなあ。

「でも、お兄ちゃんなら問題はないでしょ？」

「ん？俺が見ていたって言ってやるから、遠慮せずに泥だらけになっ
てこい。」

戦争準備で、ここら辺には山賊はいないはずだしな。

「流石お兄ちゃん、カッコイイ。」

俺は少し目を細め、笑う。

子供は嫌いじゃない。

「え・・・ミコトさん？」

俺は振り向くと、そこにはキョニユーナハーフエルフの少女が立っていた。

「ん、久しぶりだな。」

彼女は少し微笑むと、涙目になっていた。

それから、子供たちを連れて村に戻ると、村には何やら胡散臭そうな男たちがいた。

「おお、人がいるじゃねえか。」

：外で遊ばせておいて、正解だったかな？
杖をだそうとするティファを止める。

「あんた等、ここら辺の山賊じゃないね？」

「ああん？　だったらどうした。」

俺はため息をつく。

「他の山賊から聞いていないのか？　ウエストウッドには近づくなど。」

男と俺はその空間から、一時的に消える。

「理由は、あの村を半神が気に入っているからだと…」
ざわっと俺の作りだした空間がざわめき始める。

「よっと、ただいま。」

通常空間へ戻ってきた俺は、伸びている男を眺める。
しかし、久しぶりに神力使ったら疲れるなあ。

「どうなったの？」

「軽く脅しただけさ。」

正確に言うと、ウエストウッドに害をなそうとする者に対して警告を発するのと、畏怖と恐怖から二度とこの地へと足を踏み入れなくする呪いをかけた。

半神としての呪いだから、かなり効いたはずだ。

「そういえば、仕事のほうは？」

「しばらく休みだし、こっちにいるよ。」

ティファの顔が花のように明るくなり、俺はそれを見て少し苦笑いになった。

「アレー」

俺はその聞き覚えのある彼女の声に、ぎくりとし、逃げようとするが……

「しかし、アレオスは回り込まれてしまった。」

ちょ、ギーシュなんだその俺の心を代弁したようなセリフは。

ちなみに、サイトは帰ってきた瞬間、ルイズに拉致られていった。「なら。」

俺は神力を体中に回すと、空に飛びあがる。

魔眼を使ってフライを唱えてもいいのだけど、こっちの方がしんどくないか楽なのだ。

しかも、殲滅眼は魔力を食わせてさえいれば、身体能力が上がるので魔法使う意味がない。

「『フライ』」

アリアが俺に追いついてき……

は？ちよつとまで。

今俺は、音速の壁をぶち破っている状態なんだけど……

そーいや忘れていたけど、アリアさんって感情によって魔力値がかえれましたよねえ。

「なんで、逃げるのかなあ？アレ。」

ヤバい、速度が落ちてきている追いつかれる……

「追いかけられたら逃げてしまう、男の性というか……」

「へえ『』」

少し長い目の詠唱が始まる。

フライを維持したまま、別詠唱だと？

どんだけ魔力いるんだよ。

俺は少し絶句する。

内包する魔力が、虚無を数発撃てるだけの魔力だったからだ。

虚無系統の人間は、これを制御できずに爆発させてしまうわけか？
だけど、それだったら虚無としての理論がおかしい。

「『カッタートルネード』」

うわああああああ、トラウマきたああああ。

俺は腕を前に突き出すと、腕の肉がえぐられる感覚に襲われる、

「『デイスperl』」

危なかったあ……死ぬかと思った。

そう思っていたけど、右腕があり得ない方向に曲がっている。

「なんで逃げるのかなあ？」

いつの間にか、俺の腰に添えられていた刀が抜かれ首にあてられている。

「お・ま・え・がものすごい形相で、追いかけてきたからだろうが。」

「アハハハ」

アリアが苦笑いをしたので、左手で軽くこづいておく。

「人助けのための葉をとりに行っていたんだ。」

「へえ？その人助けの対象って、女の子？」

俺は背筋に寒いものを覚える。

「女の子だけど、睨むな睨むな……名前は教えられないけど、理由は話せるから。」

納得していないような顔で、さあ話せという雰囲気醸し出している。

なんつう器用なことしとんだ、こいつは。

「ガリアの状況って知っているか？」

「無能王が暗殺して王位を篡奪したっていうアレ？」

俺は少し悩むと、ため息をつきうなずく。

「その後の顛末は？」

「そういや、聞いたことないわね。ガリアの諜報部が必死に情報を隠しているとしたら。」

貴族内で、間諜を放つのは当たり前のことになっているのに、家

以外情報うが張ってきていないのはおかしいな。

「まあはしよるけど、王位継承権を持つ娘の心を壊すために、エルフの秘薬を使ったそうだ。」

「可哀想だから、その子を治そうと?」

俺は首を横に振る。

「そんな安っぽい同情で、俺が動くと思うか? いや、話に続きがあるってな。」

タバサということは、伏せているから大丈夫だろう、間諜も調べることができなさそうだしな。

「その娘を助けようと、母親がその毒を飲み心が壊れた。」

「へ?」

「そしてだなあ、その心が壊れ身動きが取れなくなった母を人質に取られて。危ない仕事をさせられているわけだ。」

「なるほど、それで同情して貴方が?」

俺はさらににやりとして首を横に振るう。

「王位をはく奪されたといっても、王家の…始祖の血に恩を売って
おいて損はないだろう?」

これがただの貴族だったら、助けようとも思わなかったろうなあ。

「相変わらずね。でも、その情報はどこから?」

「うちの間諜は優秀だってことさ。」

まあ、間諜の手腕でなく、俺の記憶が頼りだからなあ基本的に。

「まあいいわ。次の休暇に王都に連れてってね?」

わああ……

金のかかりそうなお願いだこと。

ため息を吐くと、いいよと彼女に微笑みかけた。

第三十一話：それぞれの帰宅（後書き）

……こいつわあ書かない方（禁則事項です♪）

小説家になろうの方の利用規約が変わって二次創作ガクガクブルブルしていたのですが、どうやらWEB小説関係の話みたいです。ね。
次回…『あそびにいこう』 更新日時未定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4289o/>

プログラマーはハルケギニアで夢を見る

2011年5月1日14時10分発行